

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和28年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001181

昭和28年度

国立国語研究所年報

—5—

国立国語研究所

1954

はじめに

この年報は、昭和28年度におこなった調査研究の概況である。昭和28年度に刊行した「研究報告」は、このほかに「少年と新聞」「入門期の言語能力」の2冊である。

国立国語研究所が設置され、研究活動が始められてから5年の歳月を重ねてきた。そのあいだの研究成果は「研究報告」7冊、「年報」5冊、「資料集」3種となって公刊されている。が、それに伴って、研究機関としての協同態勢が年とともに緊密の度を加えてきたことを喜ぶとともに、われわれに課せられている、国語の純化・合理化の確実な基礎を築くことが、いかに複雑な問題関連のなかに埋もれているかに驚かされる。

設立後5年にわたる研究活動の経験は、ますます課題の広さと深さを明かにした。覚悟を新たにして来るべき5年を迎えなくてはならない。理解ある御支援をこいねがうしだいである。

昭和29年11月

国立国語研究所長 西 尾 実

目 次

はじめに

昭和 28 年度調査研究のあらまし	1
話し言葉の調査研究	
日常談話語の調査	5
書き言葉の調査研究	
総合雑誌語彙の準備調査	19
語彙調査に生ずる狂いの種類・原因・対策	22
当用漢字の実施によって生じた問題とその解決法の研究	36
地域社会の言語生活の調査	
地方言語の敬語に関する調査Ⅰ	59
地方言語の敬語に関する調査Ⅱ	81
三重県上野市における敬語調査の集計・分析	88
愛知県岡崎市における敬語の調査	111
国語の学習と指導に関する研究	
文字言語の学習負担についての研究	117
言語能力の発達に関する調査研究	137
国語科学力水準調査	141
言葉の効果に関する調査研究	
文字配列の合理化に関する実験的研究	180
ラジオ・ニュース文体の研究	220
国語関係文献の調査	224
図書収集と整理	226
庶務報告	235

昭和28年度の調査研究のあらまし

国立国語研究所も、昭和28年度は創立以来第5年目を迎えたことになる。これまでの調査研究を基として、昭和28年度の研究項目を次のように定めた。

(1) 話し言葉の調査研究

日常談話における話し言葉の特性を明かにする。

(2) 書き言葉の調査研究

語彙および用字法の調査。材料としては、総合雑誌5種の最近1か年分を用いる。

当用漢字の実施によって生じた問題とその解決法の研究。材料としては、総合雑誌4種の最近1か年分を用いる。

(3) 地域社会の言語生活の調査研究

全国各地における敬語使用状況の調査。特定の地域社会における敬意表現の社会心理学的調査。

(4) 国語の学習と指導に関する調査研究

文字言語の学習負担に関する調査研究。主として読みの方面から調査する。前年度来の研究である。

(5) 言語能力の発達に関する調査研究

小学校児童の言語能力の発達段階についての調査研究。

国語科学力水準の調査。

(6) 言葉の効果に関する調査研究

文字配列の合理化に関する調査研究。

マス・コミュニケーションに関する調査研究。

(7) 国語関係文献の調査および収集整理。

(8) 国語の歴史的発達に関する調査研究

古辞書の語彙索引の作成。

国語史資料の収集。

(9) 特殊問題の調査研究

なお、各地の地方調査員に地方言語に関する調査を委託したことは例年の通りである。また、放送文化研究所に対しては前年に引き続き「ラジオ・ニュース文体の研究」を委託した。

研究所における調査研究は、日本人としてのわれわれが当面している国語問題の解決を旨としていること、もちろんであるけれども、それに近づくためにわれわれのとった方法は、国語問題の生じて来る基盤的なものからその実状を明かにして、解決のための方策をさぐり出そうと意図して来た。この方法は結局遠まわりのように見えて、実は近道であること信じたからである。しかし一方、その研究途上においても、現在の問題に対して直ちに、直接的に発言しえることは望ましいことである。本年度は、できる限り、この方面にも努力をすることにした。また研究所の監修する月刊雑誌「言語生活」においても、創刊以来の方針のもとに、現在の問題を広く取り上げ、雑誌刊行の意義を高めることを考えた。

調査研究を行うための本年度の機構は次の通りである。

	—第1研究室	
	中村通夫(主任) 大石初太郎 飯豊毅一	
	宇野義方 進藤咲子	
研究第1部	—第2研究室	
部 長 岩淵悦太郎	林 六(主任) 永野 賢 齋賀秀夫	
	水谷静夫 石綿敏雄	
	—第6研究室	
	岩淵悦太郎(主任・兼) 柴田 武 北村 甫	
	野元菊雄 上村幸雄 山之内り	
	—第3研究室	
	平井昌夫(主任) 上甲幹一 高橋 進 寺島 愛	
研究第2部	—第4研究室	
部 長 草島 時介	輿水 実(主任) 高橋一夫 芦沢 節	
	—第5研究室	
	草島時介(主任・兼) 森阿健二 林 四郎 村石昭三	
資料室	岩淵悦太郎(主任・兼) 村尾 力 有賀憲三 広浜文雄	
	高橋太郎 吉沢典男 渡辺友左 高田正治	

現代語の調査研究を担当する第1部では、その第1研究室において、前年度と同じく、日常談話語の実態を明らかにすることを中心的な仕事とし、日常に行われる談話のいろいろを実際に指導してその分析を行って、話しことばの特性を明らかにすることに努めた。第2研究室においては、前年度において、日常生活語の反映していると考えられる婦人雑誌を資料として語彙調査を行ったが、本年度から、いわゆる文化生活語を多く含むと見られる総合雑誌を資料としての語彙調査に取りかかることとし、これまでの経験を基として出来るだけ経済的に、しかも信頼の出来る調査方法を考えて調査に従った。また文部省科学試験研究費補助金の交付を受け、「当用漢字の実施によって生じた問題とその解決法」という題目で調査を行った。当用漢字によっては書き表わせない表現がどれほどあるか、またそれはどのようなものであるか、それははたして当用漢字のわく内ではまかなえないものなのかどうかを検討した。

同じく第1部に属する第6研究室においては、前年度実施した調査の整理の完了しないものの整理をいそぐと共に、新しく、地方調査員に委託して、一定の方法と形式のもとに地域社会の敬語について調査を進めた。一方、文部省科学研究費交付金（総合研究）を受け統計数理研究所と共同して、岡崎市において敬語を中心とする日常生活のことばづかいの調査を実施した。

第2部の第3研究室においては、前年度から継続して、児童生徒の読み（特に音読）においてどのような問題があり、その問題の起る原因を調査した。これは、国語学習の指導方面ばかりでなく、国語政策、ことに国字政策に対して寄与しようと考えたからである。

第4研究室においては、さらに基礎的な問題として、児童がどのように言語能力を身につけて行くかその実際を明らかにしようとした。これは、同一人について小学校6年間において、聞く力、話す力、読む力、書く力がどれだけ、どのように伸びて行くかをとらえようとするもので、東京に実験学校を一校設けて所員が絶えず調査することとした。一方、各地にも協力学校を依頼し

て、環境の差によって生ずるいろいろの問題を明かにすることとした、この継続研究の初年度の調査結果の一部は「入門期の言語能力」と題して刊行した。なお、国立教育研究所の主宰する全国的な学力調査に協力し、国語科の調査問題の作製、結果の整理分析に当たった。

第5研究室においては、新しくアメリカから入ったオフサルモグラフをも利用して、読む時の眼球運動を明かにし、どのように文字の配列された印刷物が読み易いかの実験を続け、これまでの成果を整理した。なお、第4研究室および日本新聞協会と共同で行った児童生徒の新聞への接近とその理解度の調査は、整理が終り、これをまとめて「少年と新聞」と題して刊行した。

資料室においては、図書の整備、文献目録の作製、古辞書の索引作製、国語史研究資料の収集等を行った。なお、文献目録などの資料を中心として、昭和28年度1年間の国語に関する動向を記録した「国語年鑑」を編集刊行した。これは今後も続けて出す予定である。

(岩 淵)

日常談話語の調査

話し言葉の研究室は、昭和27年度に引続いて録音資料によって日常談話語の分析を続けると同時に、その比較材料として、ラジオ座談、ニュース、ニュース解説、講演、落語、講談、劇、おとぎばなしなど計18巻を加えて、それと日常談話語との異同を分析した。その結果は、文、文節、語の長さ、イントネーション、文の構造、品詞のあらわれ方の四部とわけてまとめた。これらのうち、本年度内の作業経過および結果の概略を列記すれば次の通りである。

文・文節・語の長さの調査

A. 前年度に行った分析作業

- (1) 日常談話の録音テープのうち、5巻を選んで準備調査を行った。
- (2) 本調査として、日常談話の録音テープ18巻についての分析の一部を終った。

B. 本年度の計画

- (1) 前年度来の本調査の分析を終了する。
- (2) 日常談話以外の資料、ラジオのニュース、ニュース解説、座談、講演、講談、落語、劇、おとぎばなしなどを採集し分析する。
- (3)(1)の結果と(2)の結果との異同を比較、検討する。

C. 分析の経過と結果

- (1) 8月までに前年度来の本調査の分析を終了し、9月中には比較資料として、日常談話以外の、ニュース3巻、ニュース解説4巻、講演、講談、落語、放送劇各1巻おとぎばなし2巻を採集、10月以降12月中旬まで文字化、資料化し12月中旬以降分析に着手し、3月末に作業を終了した。

(2) 本調査での文、文節、語の長さは次の通りであった。

〔表 1〕

種 類	文の 総数	文節の 総 数	語の 総数	音節の 総 数	一 文 に お け る			一文節における		一語における 平均音節数
					平 均 文節数	平 均 語 数	平 均 音節数	平 均 語 数	平 均 音節数	
本調査 (18巻)	10118	38606	77520	163757	3.81 (3.13~ 5.49)	7.66 (6.12~ 10.78)	16.15 (13.09~ 23.39)	2.01弱 (1.88~ 2.14)	4.24 (3.96~ 4.50)	2.11 (1.97~2.31)

かつこの中の数字は、1巻ごとに集計した場合の平均の最小のものと最大のものと

これによると、1語における平均音節数は、平均2.11、最低1.97、最高2.31音節で、資料による差異は少なく、ほぼ2音節強を示している。一文節における平均音節数も同様に資料によるひらきは少なく、語の平均音節数のほぼ2倍の4音節強を示す。一文における平均音節数は語の平均音節数の7.5倍、文節の平均音節数の3.5倍を示すが、その資料による差異はかなり顕著である。

一文節における平均語数は、ほぼ2語であり、資料による差異は少ないが、一文における平均語数には資料によるひらきが少なくない。

一文における平均文節数は、3.81、最低3.13、最高5.49、ほぼ4文節弱を示す。

(3) 本調査における録音資料相互の間には大きな差異はみられないが、小異を求めると次のようなものがある（例に1文における文節数を目印にすれば）。

- (a) 地域的に下町で採集された録音資料は、それ以外のものと比べていずれもやや短い。
- (b) 公共施設で採集された録音資料は一般に文の長さが短く、これに対して家庭で採集されたそれは一般に長い。
- (c) 女どうしの会話は、その他の資料と比べて、文がやや短い傾向がある。
- (d) 年長者相互の会話は、その他と比べて、文がやや長い傾向が見られる。
- (e) だ調を基礎話調とする会話は、その他の「です」「ございます」調とくらべて、文が短い傾向がある。

(f) 事務的な会話は、その他の資料とくらべて、文が短い傾向がある。

- (4) 談話語の比較資料として採集したラジオ座談5巻の文、文節、語の長さは次の通り。

〔表 2〕

種類	文の 総数	文節の 総数	語の 総数	音節の 総数	一文における			一文節における		一語における 平均音節数
					平均文節 数	平均 語数	平均音節 数	平均 語数	平均音節 数	
ラジオ座談 会 (5巻)	1684	9243	17545	37520	5.49	10.42	22.28	1.70	4.06	

これによると、一語における平均音節数、一文節における平均音節数、平均語数は談話語と大差ないが、一文における平均音節数、平均語数、平均文節数にはかなりの相違が認められる。仮りに一文における平均文節数を目印とすれば、日常談話語の平均文節数は3.81であるから、この5巻はすべてそれを上回る。しかし、5巻中の2巻までは、日常談話語の資料のあるものにも見られる平均文節数を示している。

- (5) 日常談話語の比較資料として採集した、ニュース3巻、ニュース解説4巻の文、文節、語の長さは次の通り。

〔表 3〕

種類	文の 総数	文節の 総数	語の 総数	音節の 総数	一文における			一文節における		一語における 平均音節数
					平均文節 数	平均 語数	平均音節 数	平均 語数	平均音節 数	
ニュース解 説 (4巻)	196	4054	7618	18961	21.02	39.40	97.80	1.88	4.66	2.48
ニュース (3巻)	152	2505	4379	12219	16.48	28.81	80.31	1.75	4.88	2.79

これによると、一語における平均音節数は、ニュース解説ではほぼ2.5音節、ニュースではほぼ3音節弱を示し、いずれも日常談話のそれよりも長い。一文節における平均音節数も同様に長い。それに対して、一文節における平均語数は日常談話よりもやや下回っている。

一文における平均音節数、平均語数、平均文節数は日常談話と比べて、顕著な差異を示す。仮りに一文における平均文節数を目印とすれば、ニュースの平均文節数16.48、ニュース解説では21.02で日常談話の3.81と比

べて、ニュース約4倍強、ニュース解説6倍弱となっている。

- (6) 日常談話の比較資料として採集した、講演、講談、落語、劇、おとぎばなしを一文における平均文節数の短いものから順位に示せば、次の通りである。

〔表 4〕

種 類	文 の 総 数	文 節 の 総 数	語 の 総 数	音 節 の 総 数	一 文 に お け る		一 文 節 に お け る		一 語 に お け る	
					平 均 文 節 数	平 均 語 数	平 均 音 節 数	平 均 語 数	平 均 音 節 数	
落 語	282	1139	2155	4489	4.04	7.64	15.91	1.89	3.94	2.08
（会話）	270	1050	1983	4087	3.88	7.34	15.14	1.89	3.89	2.06
（地）	12	89	172	402	7.42	14.33	33.50	1.93	4.52	2.34
講 談	307	1547	2945	6465	5.04	9.59	21.02	1.90	4.17	2.19
（会話）	265	1232	2363	5176	4.65	8.92	19.53	1.92	4.20	2.19
（地）	42	315	582	1279	7.50	13.86	30.45	1.85	4.06	2.20
劇	424	2381	4399	9271	5.62	10.38	21.87	1.85	3.89	2.11
おとぎ ばなし	205	1710	3415	7061	8.34	16.66	34.44	2.00	4.13	2.07
講 談	111	1033	1855	4344	9.31	16.71	39.14	1.79	4.21	2.34

これによれば、一語における平均音節数、一文節における平均語数、平均音節数は日常談話と大差ないが、一文における平均音節数、平均語数、平均文節数にはかなりの相異が認められる。仮りに一文における平均文節数を目印とすれば、それらすべては、日常談話の平均文節数を上回っている。しかし、落語や講談の会話の部分は、日常会話の平均文節数とほぼ同じであるか、または日常談話のある資料にも見られたものである。しかし、それらの差異はニュース、ニュース解説ほどはなはだしくはなく、むしろラジオ座談に近い。

- (7) なお、それらの分析の結果は、各資料群ごとに、各分析項目ごとに、計数表と図表とにまとめられている。

文 の 構 造 の 調 査

A. 前年度の経過

主語・述語・連体修飾語・連用修飾語・独立語の五成分の組み合わせによる調査を中心として、日常談話語における文の構造を調査した。テープ5巻について、コードづけ、カード採集を行ない、なお分析の一部をも行なった。(年報4 参照)

B. 本年度の作業経過

前年度に引き続いて、日常談話語における文の構造を調査した。テープ5巻について、コードづけ、カード採集を行ない、さらに前年度分の5巻と合わせて、計10巻について分析をした。(29年1月末まで)

その10巻は次のとおり

学生座談(1) 女子学生 N家座談 三愿女工 友の会 I夫妻 U氏
談 無尽 職安(男子) 魚屋(国立国語研究所年報4 P.8 P.18参照)

次に、この結果と比較するためにニュース3巻について同様な調査を行なった。(29年2月より3月まで)

C. 分析の結果

- (1) 主語・述語・連体修飾語・連用修飾語・独立語の第一次的成分の組み合わせによると、

〔表 5〕

	型 の 数	文 の 数
総 数	768	4691
度数11以上のものの計	36 (5 %)	3484 (74%)
度数51以上のものの計	11 (1.4%)	2958 (63%)

- (2) 主語・述語・連用修飾語の関係だけに着目して、その第一次的成分の組み合わせをみると

〔表 6〕

	型 の 数	文 の 数
総 数	253	4691
度数11以上のものの計	13 (19%)	1367 (91%)
度数51以上のものの計	5 (7%)	1142 (76%)

次に、二次以下の組合わせをみると

〔表 7〕

	型	の	数	句	の	数
総			69			1502
度数11以上のものの計			13 (19%)			1367 (91%)
度数51以上のものの計			5 (7%)			1142 (76%)

以上、(1)(2)を要するに、少数の型が頻繁に用いられているということになる。比較資料としてとったニュースでは、日常談話ほど少数の型が頻繁に用いられる傾向はないようである。

なお、11回以上の型は〔表 8〕の通り。

〔表 8〕 11回以上の型

d	742	a b	313
d d	17	a b	54
b	1334	a y b	146
b	11	a y b	15
y b	507	a y b	15
y b	185	a y y b	33
y y b	190	a y y b	12
y y b	41	y a b	79
y y b	76	y a b	13
y y b	20	y a b	30
y y y b	42	y y a b	33
y y y b	13	y y a b	23
y y y b	41	y a y b	33
y y y b	17	a b y	26
y y y y b	11	a y b y	12
b d	12	b a	24
b y	27	y b a	21
y b y	29	a a b	20
y b y	11	種類37(14.6%)計4228(90.1%)	

a 主語 b 述語 y 連用修飾語 d 独立語 ~ は二次以下の成分を含むことを示す。

(3) 主語を含む文の数の割合は26%である(型の種類は61%)。これに対し、

て、ニュースでは63%であった(型の種類は75%)。またそのうちいわゆる「総主」とか「文主」とか言われるもの、つまり第一次の成分としての主語が二つ以上ある文の数は2%であった(型の種類は23%)。これがニュースで4%はとなっている(型の種類は9%)。

- (4) 倒置の文の数の割合は7%である(型の種類は39%)。これに対してニュースでは倒置の文はなかった。
- (5) 二次以下の成文を含む文の数は19%である(型の種類は52%)。ニュースでは77%である(型の種類は86%)。
- (6) 文の成分の割合は新聞などに比べて連体修飾語が少なく、独立語が多い。ニュースはその中間的様相を示している。

〔表 9〕

主	述	連体	連用	独立	日常談話
12.0	26.0	7.0	35.7	19.3%	
主	述	連体	連用	独立	ニュース
11.1	7.5	29.3	43.5	8.8	
主	述	連体	連用	独立	新聞 (新聞用語研究25号)
11.1	15.2	31.5	38.7	3.5	

- (7) 文末部に終助詞のあるものは75%である。(終助詞のうちでは「ね」—25%、「よ」—15%、「の」—7%などが多い)。「ます・です調」を用いるか「だ調」を用いるかなどは人や、場、話題などによって、はっきり差が現れている。
- (8) 連用修飾語は次のようになっている。

〔表10〕

	a	b	c	d
	名詞 名詞+格助詞	副詞 形・形動の連用形	用言+助辞	その他
日常談話	853 (30%)	826 (29%)	686 (24%)	441 (16%)
ニュース	156 (53%)	13 (4%)	81 (28%)	43 (15%)

- a, bの項が日常談話とニュースとはかなり異っている点に注意される。
- (9) 文脈の乱れているもの、論理の整わない表現は全体の5%弱であった。

語に関する調査

A. 前年度の作業

- (1) 日常談話の録音テープ20巻の内容について、品詞の使用度数の割合を調べた。
- (2) また、いわゆる融合形の種類と使用度数とを調べた。

B. 本年度の計画

- (1) 品詞別使用度数を・性別・年齢別・教養別等について調べる。
- (2) パブリック・スピーチについて品詞別使用度数を調べ、日常談話との異同を見る。
- (3) 融合形についてさらに詳しく分析する。
- (4) 副詞・接続詞・形容詞・形容動詞等、問題のある品詞について調べる。

C. 分析の経過と成果

- (1) 前年度、日常談話における品詞別使用度数の割合を総体的に調べたのに引き続き、男女別・年齢別(20才以下, 21才~40才, 41才以上)教養別(義務教育だけのもの, 中等教育以上を受けているもの)既知未知別に調べてみた。結果は、既知未知別にやや注目すべき差異の見られるほか、それぞれの間に著しい差異は出なかった。すなわち、品詞別の使用の割合については、性・年齢・教養等の違いは格別影響しないことが、取扱った範囲の資料の分析から推測された。
- (2) 日常談話に対する対照材料として、パブリック・スピーチを取り上げ、NHKのニュース3巻分、ニュース解説4巻分の品詞使用率を調べた。結果は、名詞・動詞・形容詞・副詞・連体詞・感動詞・融合形・コソアド語等の上に著しい差異があらわれ、日常談話とパブリック・スピーチとの性

格の差がこの面からも示された。(表11)なお、新聞や小説の文章についての従来の調査(朝日新聞社「新聞用語研究」25号の新聞文章についての調査。国立国語研究所「年報」の社説の用語の調査。国立国語研究所「資料集2」語彙調査。波多野完治「文章心理学」の作家の用語の調査等)に比較してみても、日常談話の品詞別使用率は著しく相違することが明らかになった。

- (3) 融合形については、それに対応する形によって分類し、それぞれの類の異語数と使用度数との融合形全体のそれに対する比率を求めた。(表12)

なお、融合形に対応する形の構成を調べて、その面による融合形の分類を試み、また融合形の種類と使い手との関係を調べた。

- (4) 品詞の使用率の上で、日常談話においては著しく副詞の多いことが注目された。よって日常談話における副詞の語の種類・用法に問題のあることが考えられる。

そこでとりあえず副詞の語種と男女別・教養別(義務教育だけのもの、中等教育以上を受けたもの)・年齢別(40才以下、41才以上)の使用度数とを調べた。副詞全体の異度数と使用度数とは(表13)に示す。

- (5) 日常談話における接続詞の用語については、特色のあることが人々によって指摘され、また、品詞別調査をしている間にも気づかされたことであった。よって、語種・使用度数(男女別・年齢別・教養別・総体)の調査(表13)とともに、用法の調査を行った。その結果のあらましは(表14)。

- (6) 形容詞は語の種類が少なく、形容動詞は漢語・外来語から自由に作られて、その語の種類が多いと言われているが、その実態はどうか、それをさぐってみるために、それぞれの語の種類と使用度数(男女別・年齢別・教養別・総体)とを調べた。(表13)

また、形容詞・形容動詞の用法調査の一部面として、談話用形の使用度数および接続関係を調べた。

〔表11〕 日常談話とニュース・ニュース解説との品詞別使用率比較

			日常談話	ニュース	ニュース解説
体	言		20.5%	36.4%	28.5%
名	詞		16.2	32.6	25.1
代	名	詞	2.6	0.5	0.9
数	詞		1.7	3.3	2.5
動	詞		12.2	14.9	16.0
形	容	詞	2.7	0.4	0.9
形	容	動	1.2	0.9	1.5
副	詞		6.1	1.3	2.5
連	体	詞	0.8	1.6	1.2
接	統	詞	1.9	1.0	2.6
感	動	詞	4.7	0	0.3
助	詞		34.7	33.0	34.3
助	動	詞	12.9	10.6	12.3
融	合	形	2.3	0	0
コソアド語合計			4.6	1.5	2.3

〔表12〕 融合形の種類と使用度数の比率

相当するていねい形				種 類	使用度数			
体	言	十	助	詞	24.6%	9.1%		
動	詞	十	助	詞	29.7	3.1		
形	容	詞	十	助	詞	3.4	0.7	
形	容	動	詞	十	助	詞	5.1	0.3
助	詞	十	助	詞	17.0	58.4		
助	動	詞	十	助	詞	6.0	18.1	
助	詞	十	助	詞	5.1	7.3		
助	詞	十	助	詞	4.2	1.6		
そ	の			他	5.1	1.0		

〔表13〕 副詞・接続詞・形容詞・形容動詞の異語数と使用度数

			異 語 数	総使用度数
副	詞		318 (306)	5001
接	統	詞	88 (63)	1558
形	容	詞	170 (143)	2276
形	容	動	179 (170)	924

(注) 異語数はありのままの形の計と、語形による整理を加えた上の数とを示した。

〔表14〕 接続詞の用法別の比率

(1)	文の中間に用いられたもの	15.3%
	文の頭に用いられたもの	53.0
	発言の頭に用いられたもの	31.6
(2)	aの使い方	72.7%
	bの使い方	14.5
	cの使い方	10.4
	dの使い方	2.4

(注) 使い方の a, b, c, d の別は次のとおりである。

a—明瞭に前のことばを受けて、次のことばにつながるもの。

b—直接前のことばを受けず、話によって作り出されている事態を受けるものの。

c—無意味のつなぎとして用いられているもの、およびある心持を表わしてはいるが接続詞の役割をもたないもの。

d—一文が不完全のため、用語が不明瞭のもの。

a, b, c, d の区別には困難が多いが、a のはばを広くして処理した。

イントネーションの調査

A. 課 題

前年度に引き続き、話し言葉のイントネーションの調査を行う。

本年度の課題としては、次の5項目を立てた。

1. イントネーションの型の個人別分布。(リール10巻について)。
2. 発言者の性別、年齢別、教養別などによって、イントネーションに相違があるかどうか。
3. 同一人のイントネーションの場面による相違。
4. 文末文節における語とイントネーションとの関係の記述。特に終助詞との関係。
5. マス・コミュニケーションのうち、ニュース、ニュース解説における文末文節のイントネーションの分布。

B. 経過と結果

これらの課題のうち、課題1, 2, 3については4月から8月まで、課題4については9月から12月まで、課題5については1月から3月まで、それぞれ分析の作業を行った。

課題1については、文末部と文中の句末とに分け、リール10巻、延57人（実数52人）について調べ、個人別にイントネーションの型の出現回数を記入した表を作成した。

なお、このうち、発言量が少なく、文末と文中とを合せて10回に満たないものを除き、47人（実数41人）について、文末と文中との合計が、その個人全体の何割をしめるかの1,000分比を調べた。個人別に調べても、全体が10%以上の型^(注)（21, 22, 22₃, 23, 31, 31₂, 32, 32₃, 33）では、大体10%以上になっている。特に33では、すべて100%以上、32でも大部分が100%以上である。

課題2については、性、年齢、教養の相違によるイントネーションの型の種類の相違で特に注目すべきものはなかった。

しかし、型の使用率では31が女性の方に多く、男性の方に少ない傾向があるようである。

課題3については、延8人（実数3人）のリール別分布について調べるに止ったが、話相手あるいは話者の態度によって、ある程度の相違がありそうだという見込がついた。

課題4については、リール5巻（2, 3, 86, 93, 100）について調べた。整理の方針は文末の文節が1語で成るもの、2語から成るもの、3語から成るもの（以下同じ）のように分け、それぞれの群を末尾の語の五十音順に並べた、末尾の語が同一の場合は、その直前の語の五十音順、（以下同じ）に並べた。その場合、語に高さを付け、その文節の発音者ごとの回数、回数の合計を記した。

課題5についても、課題4と同一の方針で、ニュース3巻、ニュース解説2巻について調べた。

課題の4, 5については、文の構造によって、イントネーションが影響を受けることが確かめられた外、ニュースやニュース解説では、日常会話と違

う点がみられた。これは、場面による相違のほか、個人の相違も原因として考えるべきであろうと思われる。

(注) イントネーションをどのように表示するかについては、いろいろの方式があるが、ここでは K, L. Pike “The Intonation of American English” にならない、高さに4段階を認め、音の高さのうち一番高いものを1、次のものを2、その次を3、最も低いものを4で表わしている。詳しくは、年報4、19.20ページ参照。

なお、この調査は、話しことばのうちで調査の手薄な分野を展望するという当初の目標をある程度満たすことができたので、一応本年度を以て打ち切り、その結果は整理されている。

この調査を通じての反省としては、録音の企画、実施に際して、大都会で大量の録音を行うことは初めての経験であったため、騒音によって音声がつぶされるという条件についての誤算があり、また当時電力事情が著しく不良であったことも伴って、所期の録音リールが採集できなかったため、調査資料の大きさが不十分であり、条件分析のためには偏りがあり、また聴取に困難な部分を多く含んでいて、分析のための作業能率を著しく低下させる結果となった。また、比較のための資料はさらに広範囲に、大量に採集すべきであった。

一般に、資料の中には聴取困難あるいは不能の箇所が挿入されており、この部分は分析の対象とはしなかったが、この聴取不能の箇所および聴取不能の発言に、話しことばの大きな問題が含まれていると考えられる。そういうものも何等かの方法でつきとめるべきであった。

文の構造についての調査では、この調査の基礎とした単位とは別の単位、たとえば連用修飾語などは、格助詞の類によって導かれるもの、接続助詞の類によって導かれるもの、副詞および形容詞、形容動詞の連用形によって導かれるもの、その他のもののように、最初からもっとこまかい単位を設定して調査することも考えられ、すくなくとも連用修飾語と独立語との取扱いに

については考慮すべき点が見られた。また、語の認定・品詞の決定についても同様に、話したことばとしての新しい角度からの基礎的な検討を要するものがあった。

また、今後の問題としては、それらを満たすと同時に、ただに展望するだけにとどまらず、それぞれの分野の中心的課題を詳細に追求することが残されている。今回の調査に関連したものとしても、文・文節・語の長さの調査では、それらの長さを規制すると考えられる条件の分析を目標とする調査、具体的な長さや長さの意識との相関についての調査などが行われるべきであり、文の構造の調査では、叙法を中心とする文の構造、文の構造と社会的、文化的条件との関係、基本文型などの調査が、語に関する調査では、日常談話の上での助詞の使われ方、パブリック・スピーチ、書きことばとの比較などの調査が、イントネーションの調査では、文全体のイントネーションの調査、日常談話以外の話しことばについての調査、ピッチレコーダーなどの機械を用いての調査などが、それぞれ今後の問題として残されている。

(中村大一)

総合雑誌語彙の準備調査

第二研究室の語彙調査は、従来はある非常に限られた対象（たとえば朝日新聞の特定の一箇月とか、婦人雑誌の代表としての主婦之友・婦人生活とか）について行って来た。もっと広い範囲（たとえば総合雑誌全般）を対象とする調査を実施するには、調査法の検討が更に必要である。対象が拡大すれば当然作業の量がふえる、調査の能率的な経営を計らなければ、結果の公表までに要する時間が増してしまう。そこで今年度の仕事の一つとして、こうした場合の調査法の研究を行った。

試験的なケースとして、総合雑誌五種（潮、改造、世界、中央公論、文芸春秋）の昭和27年1月号～12月号を調査対象とし、下記の目的で、標本の大きさ二万語（ α 単位）の抽出調査を実施した。

1. どういう抽出法が、推定精度の点でも能率の点でも有効であるかを検討する。
2. リプリント=手集計方式によるとして、どういう作業の進め方が、製表までの時間を短縮する点でも作業の正確さを保つ点でも、すぐれているかを検討する。

第一の点では、次の方法が有効であることが分った。調査対象が相当に大きい場合には、雑誌の号を第一次抽出単位としてその大きさ（この例ではページ数）に比例した確率で数冊を抜き、更にこうして抜かれた号から一定数のページを等確率で抜き、抜かれたページについて比推定を行うという方法である。この方法は従来の方法（たとえば婦人雑誌調査で用いた層別一度抜き法比推定）より、精度の点で著しくまさるとまでは言い切れまいが、抽出法になおくふうを加えることにより、精度を高め得る余地がある。かつ抽出の操作の容易さ、推定値およびその精度の計算の簡単さにおいて、従来の方法より格別にすぐれている。従って調査対象が大きく、従来の方法では調査台帳の作成に非常に費用を要するような場合には、きわめて有効な方法であ

ると言える。

今後第二研究室の調査は、そのような対象を撮うことになるので、以上の方法は作業能率の向上に寄与する所が大きいであろう。ただし調査対象全体における第一次抽出単位の数 M と標本に抜かれる数 m との比 $\frac{m}{M}$ を、きわめて小さく設計してもよい場合以外は、外分散の増大により精度の落ちることが考えられる。次年度に開始する本調査では、この $\frac{m}{M}$ を余り小さくする訳には行かない。ところで第一次抽出単位は何も雑誌の号の形をそのまま使う必要はない。人為的に適当な集落を形作ってさしつかえない。かつこの場合集落の外分散と内分散との比がある条件を満たせば、集落抽出法によりながら精度を高め得ることが、統計理論上保証される。ゆえにこの条件およびその他の二三の条件をなるべく満たすように集落を作れば、精度の点でも集計の容易さの点でも、従来の方法にまさる抽出法となることが見込まれる。そこで次年度に行う本調査では、このアイデアに立った方式を採用することとした。

上記の第二の問題では、作業の各段階で二度ずつ検査を行い、原作業および検査にどのような種類の狂いがどの程度現われるか、それをある限界内にとどめながら作業を速く進めるにはどういう手を打つべきかを調べた。採集用カードの作成から製表までの間に起り得る狂いの類型は、別項に述べる通り五十余りが数えられたが、作業管理がうまく行けば、実際には、それほど多くの型の狂いは生ぜず、また結果表にまで残る狂いの程度もさほど高くはない。たとえばカードの数え違いは、平均して一万枚に二枚ぐらいまでに押さえられよう。

なおこの調査の結果の語彙表として、五十音順度数表を作った。

試みにこの調査の上位百語と、「主婦之友」調査(報告4参照)の上位百語とを比べる。まず両方に現れた語(α 単位)は、次の59語であった*。

有ル (1,3) 居ル (2,2) イウ (3,4) コト (4,6) スル (5,1) ナル (6,5)
ソの (7,8) ナイ (8,7) コの (9,14) モノ (10,9) ソレ (11,13) コレ

(12, 18) 来ル (13, 11) 思ウ (14, 17) タメ (16, 33) ミル (17, 16) ヨイ
 ・イイ (18, 10) ソウ一指示 (19, 34) ワタクシ (20, 12) 持ツ (21, 52) ヤル
 (22, 42) デキル (23, 23) 時 (23, 25) 行ク (25, 26?) マター副・接 (27,
 34) 依ル (27, 76) 今 (30, 36) ドウ一指示 (30, 24) 何 (30, 19) トコロ
 (33, 21) 考エル (34, 76) ナカ (36, 30) シカシ (37, 71) 彼 (39, 51) 一
 ツ (41, 64) 分ル (41, 66) ヒト (45, 20) 方^{ホウ} (46, 40) 知ル (47, 89) マ
 エ (47, 37) 自分 (51, 39) 出ル (53, 31) ウエ (54, 28) トル (54, 28) ソ
 シテ (56, 73) 大キイ・大キナ (60, 88) コウ一指示 (60, 83) シマウ (60, 27)
 居^イリ (66, 60) 着ク (66, 81) 目 (66, 45) モウ一副 (77, 43) 同ジ (80, 71)
 アの (82, 79) 出ス (82, 96) 手 (82, 48) 聞ク (94, 83) 子供 (94, 38) ハ
 イル (94, 80)

従って、一方では百位以内にありながら他方ではそれ以下になる語は、それ
 ぞれ41語である。総合雑誌の方に現われたのは、

日本 (26, 123) 於キ (26, 一) 対スル (27, 123) 戦争 (55, 535) 就キ (38,
 201) 問題 (39, 254) アメリカ (41, 170) 訳^{ワケ} (44, 111) ソコ一指示 (47, 101)
 人間 (47, 254) 僕 (52, 103) アイダ (56, 117) 後^{ノチ} (56, 207) コトバ (56,
 157) 憲法 (60, 一) トコロが、で (60, ?) だが、から、etc. (65, ?) 行ウ
 (66, 652) 国民 (66, 一) ウチ (71, 101) 新聞 (71, 515) ソ連 (71, 706) 点
 (71, 419) 天皇 (71, 一) 共^{トモ} (71, 180) 既に (77, 706) 非常 (77, 268) 日
 本人 (80, 421) 意味 (82, 440) 選挙 (82, 一) タダ (82, 201) ドコ (82,
 138) 必要 (82, 164) 変ル (90, 236) 国 (90, 515) 国会 (90, 一) 我々
 (90, 1539) 書ク (94, 117) 共通 (94, 一) 政友会 (94, 一) 特に (94, 246)
 また「主婦之友」の百位までで総合雑誌ではそれ以下の語は、次の通りであ
 った。

一 (22) 二 (25) 置ク (28) 附ケル (32) 掛ケル (40) 心 (44) 夫 (46)

*かっこ内の数字は、前の方がこの準備調査での順位、後の方が「主婦之友」調査での順位。以下同じ。ただ
 し数字が一つしか書いてないものは、「主婦之友」調査での順位である。また一は標本度数が少ないなどで順
 位づけをしなかったもの、?は整理の規程を変えたため比較できないものである。

クレル (47) 家 (49) 入レル (50) 三 (53) 場合 (55) 彼女 (56) 四 (56) 母 (56) 作ル (59) ココ (60) アナタ (62) 帰ル (63) ゴザイ
 ます (67) 妻 (67) 顔 (69) 日 (69) 次 (73) 女 (75) 多イ (76) フ
 タリ (81) 氣 (85) 下サル (85) ^{アベ} 儘 (85) ^{イフ} 何時 (90) ^{カタ} 方 (90) 水 (90)
 少シ (93) 朝 (94) ^{オモテ} 表 (95) 男 (97) 子 (97) 編ム (99) ヒトリ (99)

ただし、同語と認めるか否か、分類規準を変更した部分があるので、準備調査の方によって整理すると「主婦之友」の百位まででは<ユク>と<イク>とが合併されて、一つ減ることになる。

百位までの比較からしても、総合雑誌や婦人雑誌の語彙の特色の一端はうかがわれるが、われわれの注意はむしろ、雑誌の種別にかかわらず同様によく使われる語に向けるべきであろう。

語彙調査に生ずる狂いの種類・原因・対策

——特に使用率推定値に及ぼす誤差について——

1 序 説

科学的調査の生命は結果の正確さだと言われる。その「正確さ」とは一体何の事か。人文科学では多くの場合、その意味についての深い認識に欠けていた。もしこれが普通考えるように、真の値と調査から得た値との差が0である、または0にきわめて近い事なら、われわれの調査では必ずしも追求するに当らない。そういう正確さを満たす代りにわれわれは、調査で使う平均的な費用 (cost) とその調査結果の狂いによってこうむる平均的な損失 (loss) との和として考えられるところの、危険 (risk) を小さくすることに務めるべきである*。

一例として単純化した場合を示して見よう。現在または将来のある時点もしくは期間 t_0 において利用する目的で、ある事柄の時点もしくは期間 t_1 における特性 θ を調査する。その時 M という方法で延べ n 語の測定をした結果、 θ に対して

* 松下嘉米男：統計処理の基本概念、「統計学研究会調査録所」Ⅷ，3 (昭27)。北川敏男編：サイバネテイクス，昭28，13ページ。F. Yates: Sampling Methods for Censuses and Surveys, 1949; 大沢・本田・石田訳，昭27，§ 8・10。

\bar{x} が得られたとしよう。この調査に要した費用は $C(M, n)$ で、また $\bar{x} \rightarrow \theta$ という食い違いおよび t_0 と t_1 との時のずれによってこうむる損失は $L(\theta, \bar{x}, t_0, t_1)$ である。そうすると「危険」は次の式で表わされる。

$$r(\theta, t) = \int_S L(\theta, \bar{x}; t_0, t_1) dF + C(M, n)$$

ここに F は θ の推定量である \bar{x} の分布函数、また S は全標本空間を示すものとする。

理論上はこういう事になる。ただし語彙調査の危険函数がどんな形をとるかは、まだ、ほとんど分っていない。だが分からないからとて調査の放漫な運営は許されない。一方ただいたずらにいわゆる正確さを追っても、たとえば国語政策の面から見て、決して得策とは言えない。なぜかなら、そうした調査では費用（上式の右辺第二項）が著しく増大する割には損失（上式の右辺第一項）が減少しない。恐らく n が増し、その大量の n という資料を「正確」に消化するために、はるかに多い労力とはるかに長い期間とを費さなければならないのである。労力が増せば当然費用は増すし、期間が長引けば恐らく時のずれによる損失も大きくなるからである。

ゆえに調査結果の精度、更に広く生産性を高めるためにも、その方略 (strategy) として調査そのものの合理的な経営* が必要である。すぐれた調査すなわち生産力の豊かな調査の実施には、損失に関する知識と調査経営の能率化とが前提となる。現在一遍にこういう課題を解決することは望めない。そこで問題を限って、手の着けられる所から押さえて行くべきである。その手始めに、どんな因子が個々の語の使用率の推定に影響して、眞の値に対する狂いを生ずるかを分析した。この問題はどんな調査方式を選ぶかでかなり趣きを異にするが、ここではモデルに、われわれが行い得る範囲** で最も効率のよいと見られるリプリント=手集計方式を取って考える。

2. 作業手順のあらまし

リプリント[†]手集計方式については、国立国語研究所報告4, 昭28, §2に一往

* たとえば J. P. Palewski : L'organisation du Travail, 岡野訳。

** 国立国語研究所第二研究室が使える程度の子算で二年間ぐらいにまとめられるような調査の規模を考えているのである。

解説して置いた。ここにモデルとするのは、これに改良を加えたものである。その手順のあらましを第1図に示す。この図のカード用紙印刷から後の段階は、作業計画をうまく立てる時、流れ作業として能率をあげることが出来る。たとえば採集から集計までの段階について第2図のような方法も考えられる。これは採集・検査・整理のスタッフを分けて置いて、ある一まとまりの箇所が採集されればすぐ検査して、整理に移すのである。第2図で「群」とは、そのような「採集カードの群」を意味し、「票」とは「集計票」を意味する。なお図の上下の方向は、作業を行う時期の前後を表わす。従って群2・の採集と群1の整理と同じ高さに描いてある事は、この二つが並行して行われる事を意味する。集計票はまず、群1の各語に対して作り、その検査が済んでから群2に関する記入を行う。群2で初めて現れた語については、その語のための集計票を作ってこれを加えて行くのである。以下同様。

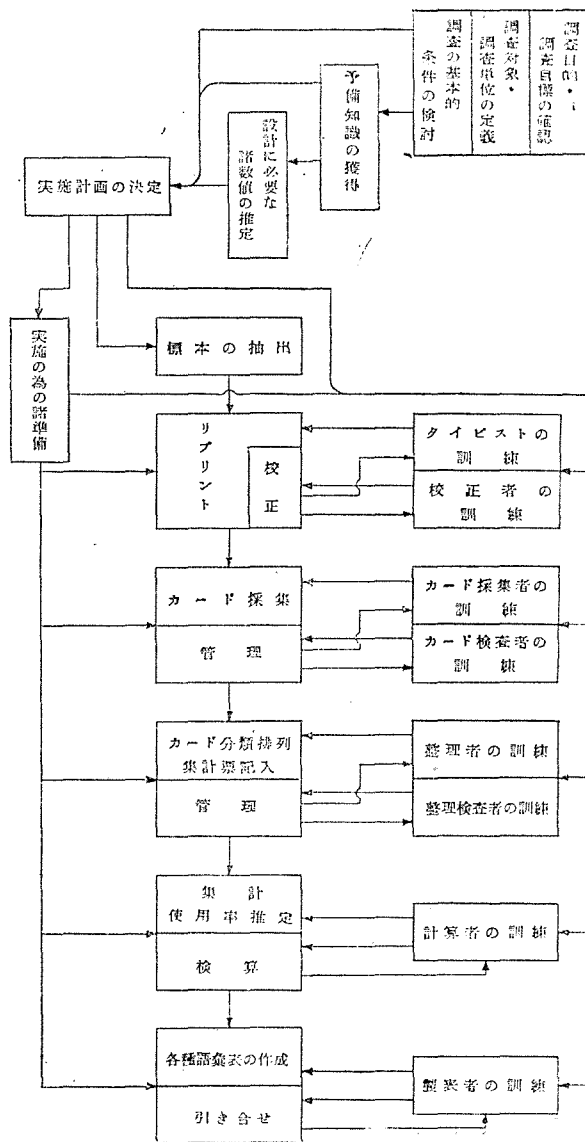
3. 狂いの種類と原因と（総論）

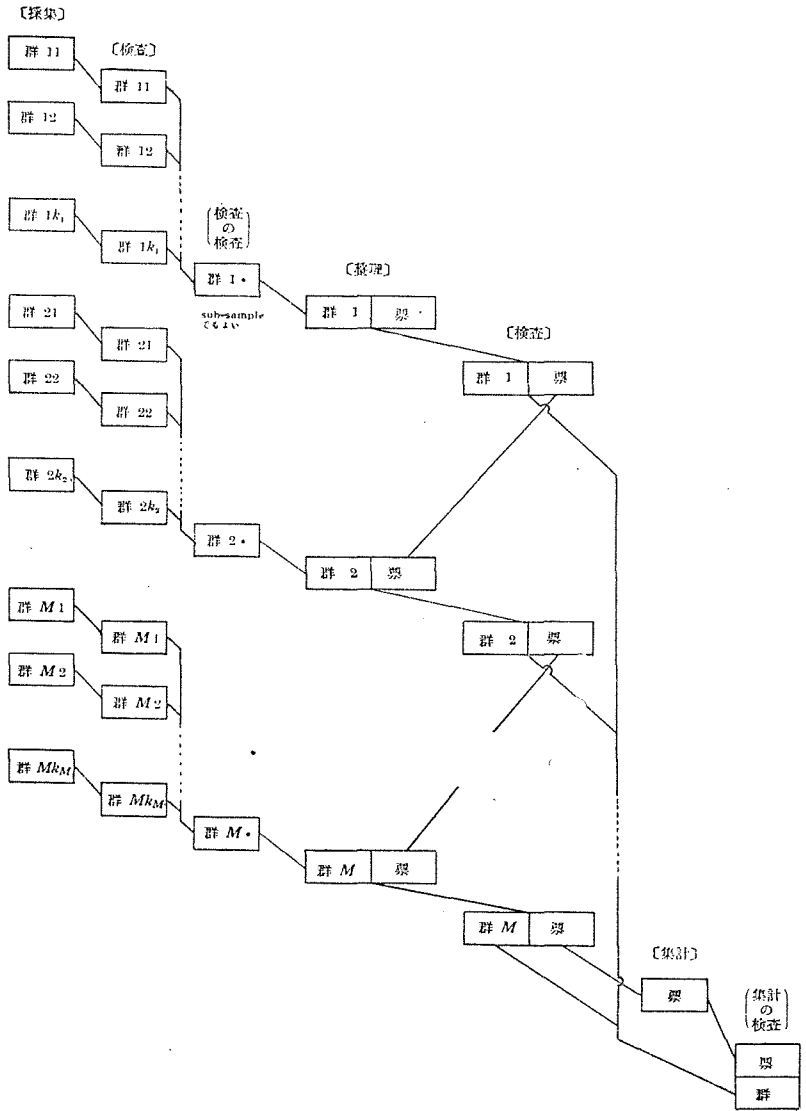
調査結果が蔵する狂いはもちろん単一のものではない。作業の諸段階で起り得る雑多な狂いの集積である。中には途中で行われる幾つかの検査によって発見され訂正を受けて、結果に影響せずに済むものもある。しかし狂いを引き起す原因が作業過程から全く取り除かれないう限り、必ず修正を受けるとの保証は何もないから、すべてここでの分析の対象として。

かような分析に当たってまず心得て置くべきは、調査には企画（planning）と実地作業（field-work）との質的に違う二つの面があり、このそれぞれに由来する狂いは非常に性格を異にする事である。それゆえ、これらは分けて扱うべきである。前者に由来する狂いは、普通後者の作業中には発見し難い。そればかりか、狂いであるか否かの判定すら下しかねる場合が多い。これに反して後者の段階で生ずる狂いは、現状でも科学的に管理することが可能である。ゆえに今は分析の重点を後者に置く。ただし前者の狂いの方が一層根本的であつ致命的であるから、その追求は損失函数の研究として今後に残された大きな課題だという事を強調して置きたい。

さて、ある調査が良い調査だと言えるためには、その調査が次の五つを備えなくてはならない*。

*たとえば林知己夫：社会科学の統計数理、「数学」Ⅲ，3（昭26）。





- 妥当性 知ろうとしているまさにそのものをゆがみなく突く調査であること。
- 信頼性 測定の結果が、調査を繰り返したとしても、大きく揺れるものでないこと。
- 客観性 調査者の主観が測定に影響しないこと。
- 適応性 測定が実際に無理なく行われ、かつ妥当性を満たすこと。
- 再現性 得られた測定の結果から一義的に現実の姿が求められること。

これらを皆兼ね備えた調査なら、狂いは実際上無視出来る程度にとどまり、従って危険函数もきわめて小さくなる。これらのうち企画の段階と特に密接なのは、妥当性、適応性、再現性であり、残りの二つがそれ以後の段階で正面に現れる。

企画の段階で生ずる狂いの種類としては、次の二つがおもなものであろう。第一に、妥当性、適応性、再現性を欠く調査計画。これは、現在の科学の水準の低さ、着眼点がよくないかまたは準備不足かで行われる問題設定、予備知識の不足などが原因である。第二に、調査完了時まで生ずる時のずれ（が問題になる場合は、それ）を無視した作業日程の立案。これも着眼点のよくないかまたは準備不足が原因となる。場合によっては調査力の評価が正しくないため、ペーパー＝プランを作ってしまうという事もある。（この第二の狂いは適応性を欠くものと見てよい。）更にこの二つほど本質的ではないが、第三として、得られた予備知識に存する狂いが考えられる。その原因は、予備知識を与える資料の収集不足とか評価の誤りとか、または資料そのものが含む狂いなどである。しかしここでの狂いが後々まで響くのは、たとえばそれが問題設定を誤らせる因子として働くような、間接的なしかたに限ると思う。

次に実地作業の段階であるが、これを 枠の設定 標本の抽出 リプリント（採集カード用紙の作成） 採集 整理 集計 製表 に分けて、狂いの種類などを第1表に示そう。ただし個々の狂いの型は、それが具体的に現れる最初の段階に懸けて述べることにする。またそういう型の狂いが生ずる原因については改めて取り上げる。

第1表 調査実施の諸段階に生ずる狂いの種類

第4欄で 誤：正しくはAとあるべきをaとしたもの 衍：標本のその箇所にない

のにあるようにしたもの 脱：標本のその箇所にあるのに落したもの 算：計算違い
 失：紛失 他：その他の狂い の意である。

(1) 作業段階	(2) 番号	(3) 狂いの種類	(4) 狂いの類型	(5) 訂正の 困難さ
枠の設定	101	対象外の単位の混入	衍	容易ならむ
	102	対象内の登録漏れ	脱	〃
	103	重複した登録	衍	〃
	104	所属させる層の判定の誤り(質的)	誤	やや困難
	104'	〃 〃 (測定を要するもの)	(誤衍脱算)	困難
	105	記載事項の誤り	誤	やや困難
	105	母集団の大きさの合計の誤り	算	容易
標本抽出	201	allocationの不適當		他 至って困難
	202	サンプリングにおけるランダム性の喪失	誤	他 不定
	203	指定通りの大きでないサンプリング	衍脱	容易
	204	指定された抽出単位の取り落とし	脱	〃
	205	指定されない抽出単位の取りそこない	衍	〃
	205	標本番号の打ち違い	誤	〃
リプリント 校正	301	割付の不備		他 やや困難
	302	採集カード用紙の記載違い	誤衍脱	〃
	303	印刷の不鮮明		困難
	304	校正しそこない	誤(衍脱)	〃
採集 検査	401	調査単位の分割しそこない	誤衍脱	相当困難
	402	採集違い	誤衍脱	やや容易
	403	採集後検査前のカードの紛失	失	〃
	411	検査の際の訂正しそこない	誤(衍脱)	困難
	412	検査後整理前のカードの紛失	失	〃
整理 検査	501	見出し形の誤認	誤	やや容易
	502	カードを排別する順の誤り	誤	〃
	503	作業後のカードの紛失	失	困難
	504	カードの単純な勘定違い	誤(衍)脱	やや容易
	505	見出し形の誤認によるカードの勘定違い	誤	〃
	505	集計票に記入する場所の間違い	誤衍脱	〃
	507	勘定中における採集カードの紛失	失	〃
	508	整理検査前の採集カード・集計票の紛失	失	〃
	511	検査の際の訂正しそこない	誤(衍)脱	困難

(1) 作業段階	(2) 番号	(3) 狂いの種類	(4) 狂いの型類	(5) 訂正の 困難さ
	512	検査中における採集カード・集計票の紛失	失	困難
	513	検査後集計前の採集カード・集計票の紛失	失	〃
集計	601	単位ごとの集計の誤り	算	容易
	602	集計中の集計表の紛失	失	困難
	603	標本の大きさの合計の誤り	算	やや容易
	604	使用率推定方式の不備	他	至って困難
	605	抽出誤差	他	*
	606	推定方式によっては生ずる片寄り	他	**
	607	推定の際の計算違い	算	容易
	608	推定の際の丸めの誤差	他	*
	609	集計結果を他欄に転写する間違い	誤行脱	やや容易
	600	集計後検算前の集計票の紛失	失	〃
検算	611	検算の誤りにより訂正しそこない	算	困難
	612	検算中の集計票の紛失	失	〃
	603	検算後製表分の集計表の紛失	失	〃
製表	701	集計票の排列替えの間違い	誤	やや容易
	702	表に記入する場所の間違い	誤	〃
	703	単純な転写の間違い	誤行脱	〃
	704	製表中の集計票の紛失	失	〃
	705	製表後引き合せ前の集計票の紛失	失	〃
	706	製表後引き合せ前の表の(の一部)の紛失	失	容易
引き合せ	711	引き合せの際の訂正しそこない	誤行脱(算)	困難

(5)の欄で*は誤差の評価が統計的に可能なもの、また**は推定方式によっては0に出来るが、われわれが今考えている方法では幾分あり(一般的に小さいが)、しかもその程度がどのくらいか今のところ評価出来ないものである。なおこの欄に「容易」とあっても、その訂正に労力を注ぐことが費用の点で引き合わない場合もある。

4. 狂いの種類と原因と(各論)

4・0 狂いを生ずる原因の類型 前の節で見たように、狂いの種類は普通考えられるだけでも五十余りある。しかしながらそれを生ずる原因となれば、はるかに減じて数個の類型にまとめられよう。ここでは試みに次のようにまとめる。

作業者の責任に帰する原因	1 作業者の不注意*
作業管理者の責任に帰する原因	2 管理の不十分
調査首脳部の責任に帰する原因	3 調査用紙の設計の不備・不適切
	4 作業の指導の不備・不適切
	5 その他

4・1 枠の設定 枠とは、抽出という操作の基礎に使う帳簿とカード＝ファイルとがあって、そこには調査対象を形作るところの抽出単位が記載してあるものと言う。われわれの語彙調査では、既存の枠は何もない。そこでこれをその都度作らなければならない。この段階で生ずる狂いを分析した結果を第2表に示す。

なお第2表～第8表の原因の欄で、数字は§4・0に述べた原因の類型、また

◎ ○ は、この狂いを生じさせる大きな原因、◎は特に重大なもの；

△ は、前者に比べれば軽く見てよいもの；

* は、便宜上類型5の欄に書くが、調査の実施に当って除き得ないけれど、普通はその程度を企画の際に制御出来るものを意味する。

第2表 枠の設定の段階における狂い

番号	狂いの種類	狂いの原因				
		1	2	3	4	5 その他
101	対象外の単位の混入	◎			◎◎	◎調査対象・抽出単位の定義の不備
102	対象内の登録漏れ	◎			◎◎	" " "
103	重複した登録	◎			○	
104	所属させる層の判定の誤り(質的)	◎			◎	◎層の定義の不備
104'	" "(測定を要するもの)	◎				* 測定誤差
105	記載事項の誤り	◎	○	◎		
106	母集団の大きさの合計の誤り	◎	△	△		

これらの狂いは、われわれの調査の規模なら、調査台帳作成後の検査でほとんど訂正出来る。(ただし104, 104', 105では狂いを根絶するまでの訂正は見込めない。)

4・2 標本抽出 決定した抽出方式によって実際に標本を抜き取り、ぬきばり**を作るまでの段階である。

* その場その場の偶発的な不注意と、作業指導が作業者の集団に対しては適切に行われたのに、ある個人が不注意で手引を誤解したり忘れたりした場合を含む。未熟は2°, 4°, 5°の複合と考えられる。

第3表 標本抽出の段階における狂い

番号	狂いの種類	狂いの原因					
		1	2	3	4	5	その他
201	allocationの不適當						○抽出設計の不備 * 理論的抽出比とのずれ
202	サンプリングにおけるランダム性の喪失	◎	◎			△	
203	指定通りの大きさでないサンプリング	◎	◎				
204	指定された抽出単位の取り落とし	◎	◎				
205	指定されない抽出単位の取りそこない	◎	◎				
206	標本番号の打ち違い	◎	◎				

この段階も、201 を設計上の工夫によって処理し、202 を作業者の十分な理解によって切り抜ければ、狂いをほとんどすべて除くことが出来る。

4.3 リプリント 採集カード用紙を作る段階である。用紙の設計に当っては適応性をもつことに努めるべきだが、それは企画に属する仕事であり、かつその影響がこの段階に直ちには反映しないから、考察からはずす。

第4表 リプリントの段階における狂い

番号	狂いの種類	狂いの原因					
		1	2	3	4	5	その他
301	割付の不備	◎	△		◎		
302	採集カード用紙の記載違い	◎		△	◎		* 底本における不備
303	印刷の不鮮明	△				◎	◎印刷技術上の制約
311	校正しそこない	◎	△				

作業の順序としては校正が印刷に先立つ。またわれわれの現状では、割付・校正の作業員は所員であって、臨時筆生や所外アルバイトではない。

4.4 採集 調査単位の句切りの指定から整理に移される直前までの段階である。

第5表 採集の段階における狂い

番号	狂いの種類	狂いの原因					
		1	2	3	4	5	その他
401	調査単位の分割しそこない	◎	△				◎調査単位の定義の不備
402	採集違い	◎	◎	◎	◎		
403	採集後検査前のカードの紛失	◎	◎				○設備の不十分
411	検査の際の訂正しそこない	◎	◎	◎	◎		
412	検査後整理前のカードの紛失	◎	◎				○設備の不十分

** 「ぬきばり」とは、採集することに決った箇所を雑誌から「抜き」として、一箇所ごとに一枚の台紙に「はり」つけ、標本番号とか作業進行上の指示とかを書き込んだる(国研報告4の35ページ)。

4・5 整理 整理・集計・製表の段階は実際には反復して行われるが、ここでは採集の段階を経て来たカードをまず五十音順排列法によって分類排列すること、その排列済カードを個々の話（調査単位）ごとに勘定して集計票に記録すること、および以上の結果を検査することという三つの操作を整理と呼ぶ。

第 6 表 整理の段階における狂い

番号	狂いの種類	狂いの原因					
		1	2	3	4	5	その他
501	見出し形の誤認	◎	○	△	◎		◎見出し形の定義の不備
502	カードを排列する順の誤り	◎	○	△	◎		◎排列法の定義の不備
503	作業中作業後のカードの紛失	◎	◎				
504	カードの単純な勘定違い	◎	△		○		
505	見出し形の誤認によるカードの勘定違い	◎	○	△	◎		
506	集計票に記入する場所の間違い	◎	○	○	◎		
507	勘定中における採集カードの紛失	◎	△				
508	整理後検査前の採集カード・集計表の紛失	◎	◎				
511	検査の際の訂正しこない	◎	○	○	◎		
512	検査中における採集カード・集計票の紛失	◎	△				
513	検査後集計前の採集カード・集計表の紛失	◎	◎				

この中で 502 は、それ自体は使用率に響かない。しかしこの狂いが誘発する狂いを予想の方が安全なので、特にあげる次第である。

4・6 集計

第 7 表 集計段階における狂い

番号	狂いの種類	狂いの原因					
		1	2	3	4	5	その他
601	調査単位ごとの集計の誤り	◎	○	○	◎		
602	集計中の集計票の紛失	◎	△				
603	標本の大きさの合計の誤り	◎	◎		◎		
604	使用率推定方式の不備						◎抽出設計の不備
605	抽出誤差						* 推定法に伴う必然的な誤差
606	推定方式によっては生ずる片寄り						* " " 片寄り
607	推定の際の計算違い	◎	◎		◎		
608	推定の際の丸めの誤差						* 数値計算に伴う必然的な誤差
609	集計結果を他欄に転写する間違い	◎	○	○	◎		
600	集計票の紛失	◎	◎			○	○設備の不十分

611	検査の誤りによる訂正しそこない	◎○●○	
612	検査中の集計票の紛失	◎△	
613	検査後製表前の集計票の紛失	◎◎	設備の不十分

4・7 製表 便宜上この段階に、別種の語彙表を作るための集計票排列替え——
実質においては整理——を含めて扱う。

第 8 表 製表の段階における狂い

種類	狂いの種類	狂いの原因				
		1	2	3	4	5 その他
701	集計票の排列替えの間違い	◎	○	○	◎	
702	表に記入する場所の間違い	◎	○	○	◎	
703	単純な転写の間違い	◎	△			
704	製表中の集計票の紛失	◎	△			
705	製後引き合せ前の集表の紛失	◎	◎			○設備の不十分
706	製表後引き合せ前の表(の一部)の紛失	◎	◎			○ "
711	引き合せの際の訂正しそこない	◎	◎	○	○	

なおこの節のような考察には、アメリカで management の能率化のために行った WF (working faactor) の分析法のアイデア* が参考となろう。

5. 補説——狂いの種類の評価——

§ 3 と § 4 にあげた五十余りの狂いは種類であって、実際にこれが皆同程度に起る訳ではない。そこでまず、個々の狂いの平均発生率を知る必要がある。しかしそれらが一定の信頼度で推定出来たとしても、狂い A と狂い B とが独立に発生するとは限らないから、単にそれらを加え合わせただけでは、結果に残る平均的な狂いを評価した事にはならない。またある種類の狂いはその作業に続く検査を経てある程度まで修正されるし、ある種類の狂いは語彙表に影響を及ぼさない**。そこで結果における狂いの程度を評価するには次のような課題に答えが出ていなければならない。

1° 統計的な error と bias との評価

* この紹介や日本での研究は色々あろうが、簡潔なのはたとえば「マネジメント」Ⅺ (昭27), 50~52 ページ。

** たとえば前記301番の型とか漏形の認知こさしつかえない程度の転写の誤りとかあげられる。

- 2° 検査を経てしかも残る mistake の評価——原作業で生じた mistake と関係づけて
- 3° 企画における mistake の影響の評価
- 4° 個々の狂いの間の相関の分析

このうち 3° は、現状では科学的検討がほとんど出来ない。(将来、語彙調査における「危険」論が進歩すれば、可能となる。)次に 2° と 4° とも、今の所、互いからみ合ったままでしか評価出来ないが、結果にまで残る狂いの程度を知るには一往それでもよからう。

こういう評価のための努力は、記述の精密さの保証という意味でも必要であるが、それにも増して予言法則の樹立を目ざす語彙調査の将来のためには、本質的な研究と言える。測定誤差を無視した科学的推論はあり得ないからである。また一方調査法の向上のためにも、現在の水準での狂いを計量的につかむ必要のあることは、言うを待たない。しかるにかような研究は今日全く未開拓の状態である。従って評価の方法論そのものから考えて行かなければならない。ここではそれに関する報告を割愛して、別の機会に譲りたい。ただしそうした計量的研究をふまえない限り調査の着実な前進が期待し難いことを、繰り返し強調して置く。

6. 狂いを減らす対策の原則

作業の各段階における技術上の対策は、上記の計量的研究の結果と考え合わせて大いに工夫すべき所である。しかしそういう個々の工夫も、ある原則に沿った線で行わなければならない。そこでその原則を列挙する。

- I 作業手順の単純化
- Ⅰ 組織化されたフィードバック*の促進
- Ⅱ 調査者の士気 (morale) の高揚
- Ⅳ 無理のない標準仕事量の設定による作業管理の促進
- V 管理事務の重視

このうちⅠとⅡとは特に企画の際によく検討する必要がある。ⅢないしⅤは運営

* この概念の解説は、N. Wiener : The Human Use of Human being, 1949, 池原訳「人間機械論」, 昭29, を見よ。

上の問題と言える。更に、簡単な注釈を加えよう。Ⅰについては、語彙表が出来上がるまでに経なければならぬ段階の数をなるべく減らすこと、および主観的な判定を要するような作業の部分を少なくすることが大切である。転写を何回も繰り返すようなスケジュールは最も不利である。また機械力の利用も、その正確さに魅せられる余りかえって手順を複雑にするなら、引き合わないとも見られる。Ⅱは後のⅣと関係するが、単なる読み合せ程度の原始的な検査でなく、作業のどの段階にどんな検査を置いて狂いを早く修正するかの観点から、十分考慮すべきである。狂いの発見が遅れたため修正に思い掛けない費用と時間とを使わざるを得なかった経験がある。Ⅲは言うまでもない。Ⅳは結局「無理な仕事はさせず、水準を一定に保つ」ことである。調査者の全般について、ことに作業者について、能力を上回る仕事を課してはならない。特に調査補助者の能力の評価が大切である。これに照らして標準仕事量を定め、無理ではなくゆるくもないように作業を進める。この原則を貫くには、作業管理に伴う様々な事務を端仕事とは見ず、調査全体とのつり合いのもとに相当重視すべきである。これがⅤである。もし管理事務の専門担当者が置ければ、最も望ましい。これを置くという前提に立つフィードバックの強化は、考えるに価する。

調査技術のための具体案は、話が細かくなり過ぎるし、また狂いに関する計量的研究の結果をも必要とするので、今は述べない。しかし今年度の準備調査から得た情報を活用することによって、次年度の調査では、従来よりよい方法がとれると信ずる。

当用漢字の実施によって生じた問題と その解決法の研究

当用漢字表に従って各種の文章を書こうとする場合、どのような、またどれほどの障害があるか、その障害をとりのぞくのに、どんな対策がたてられるかを明かにする。この研究は、昭和28年度文部省科学試験研究費補助金の交付を受けて行ったもので、調査に携ったものは、次の通りである。

岩淵悦太郎 林 大 村尾 力 永野 賢 斎賀秀夫
水谷 静夫 石綿敏雄

調査対象および調査方法

調査対象として、当用漢字表に従って実行した場合、最も多くの問題が生ずると思われる総合雑誌を、まず取り上げることとした。

総合雑誌は、発行部数の多い四つの雑誌（文芸春秋、中央公論、改造、世界）とし、昭和27年7月号から28年6月号にいたる一年間のものについて、その中で、本文と認められるもののページに使われているすべての漢字を対象とした。

全数調査をとらないで、ページ単位に、全体の約十分の一の標本を抽出して調査した。（層別確率比例二段抽出法。推定は比推定による。）

調べようとしたこと

- (1) 表外字は、使用された漢字の総数に対して、どれほどの比率を占めるか。
- (2) その比率は、記事の種類によって、どれほどの動きがあるか。
- (3) どのような表外字が用いられているか。
- (4) それぞれの表外字は、どういう語に用いられているか。
- (5) 表外字で比較的使用率の高いもの、表外字を用いた語で使用率の高いものに、どんな言いかえや書きかえが可能であるか。

(注) ここで表外字というのは、当用漢字表の漢字1850字以外の漢字をさす。当用漢字音訓表・当用漢字字体表および人名用漢字別表は、表外字の判定規準にしない。

結果

- (1) 使用された漢字の総数に対して、表外字の占める比率は、3.17% (95%の信頼度のもとで信頼区間 2.90~3.44%, 精度 3.3%) と推定される。言い換えれば、すべての漢字の使用度数の 96.83%は、当用漢字によってまかなわれているわけである。

(注) 精度とは、推定量の平均二乗誤差平方根を用いた変異係数を意味する。

- (2) その比率は、記事の種類によってかなりの動きがある。

		推定値(%)	信頼度95%のもとでの信頼区間(%)
署名のある 文章	文芸家の文章	5.46	4.6E—6.27
	非文芸家の 文章	2.79	2.33—3.24
署名のない 文章	座談会記事	2.14	1.42—2.85
	翻訳もの	1.59	1.06—2.12
	社内記事	2.18	0.94—3.43

- (3) 標本度数7以上の表外字は、別表のとおりである。
- (4) 表外字を用いた語の言い換え、書きかえの可能性については、昭和29年3月現在、資料整理中で、将来「言い換え・書きかえ語彙表」の形でまとめられる予定である。

表外字度数表 (標本度数7以上)

- (A)——固有名詞以外に使われた度数
(B)——固有名詞に使われた度数

* をつけたものは、当用漢字表補正のための資料として昭和29年3月、国語審議会から発表された字に該当するもの

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
1	云	736	0	736	1
2	僕*	462	0	462	2
3	誰	308	0	308	4

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
4	頃	293	0	293	5
5	或	252	0	252	6
6	廻	147	0	147	9
7	此	143	0	143	10
8	賈	139	0	139	11
9	嫌	112	0	112	13
10	於	105	0	105	17
11	管	102	0	102	18
12	其	101	1	102	18
13	勿	97	0	97	21
14	馱	79	1	80	25
14	殆	79	0	79	26
16	俺	72	0	72	29
17	戾*	65	0	65	31
18	甚	63	1	64	32
19	僮	61	0	61	35
19	迄	61	0	61	35
21	之	59	52	111	14
21	註	59	0	59	37
21	眺	59	0	59	37
24	智	57	7	64	32
25	吾	52	47	99	20
25	尙*	52	7	59	37
27	且	50	3	53	42
28	喰	49	0	49	44
29	乃	48	7	55	40
30	窟	47	0	47	46

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
30	坐	47	0	47	46
32	泥*	46	0	46	48
33	鹿	45	61	106	16
34	偵*	44	0	44	50
34	慾	44	0	44	50
36	頁	43	0	43	52
36	椅	43	0	43	52
38	噲	42	0	42	56
39	遙	41	2	43	52
39	尻	41	1	42	56
39	恰	41	0	41	58
42	逢	40	0	40	60
42	戢	40	0	40	60
42	靴	40	0	40	60
42	乞	40	0	40	60
46	貌	39	0	39	64
47	那	38	32	70	30
47	珉	38	0	38	66
47	頰	38	0	38	66
50	謂	37	0	37	72
50	訊	37	0	37	72
52	蔭	35	6	41	58
52	隅	35	3	38	66
52	勃	35	0	35	74
52	輯	35	0	35	74
52	噓	35	0	35	74
52	叩	35	0	35	74

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
52	乍	35	0	35	74
59	蒙	34	48	82	24
59	忽	34	0	34	80
59	廿	34	0	34	80
62	頑	33	0	33	84
62	稀	33	0	33	84
62	狙	33	0	33	84
65	痔	32	0	32	88
65	儲	32	0	32	88
65	汎	32	0	32	88
65	揆	32	0	32	88
65	喧	32	0	32	88
70	讚	31	1	32	88
70	駮	31	0	31	96
72	遣	30	0	30	99
72	劃	30	0	30	99
74	亭*	29	10	39	64
74	蛇	29	0	29	102
74	噸	29	0	29	102
77	宛	28	0	28	106
77	潑	28	0	28	106
79	聯	27	25	52	43
79	沙	27	8	35	74
79	儲	27	0	27	109
79	綜	27	0	27	109
79	昂	27	0	27	109
79	叱	27	0	27	109

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
79	籠	27	0	27	109
79	簞	27	0	27	109
79	秆	27	0	27	109
88	漢	26	4	30	99
88	霧	26	0	26	118
88	涯*	26	0	26	118
88	撈	26	0	26	118
88	挨	26	0	26	118
88	瞭	26	0	26	118
88	闍	26	0	26	118
88	叛	26	0	26	118
96	吞	25	0	25	128
96	蔑	25	0	25	128
96	柚	25	0	25	128
96	臼	25	0	25	128
96	嘩	25	0	25	128
96	厭	25	0	25	128
102	諛	24	0	24	138
102	斯	24	0	24	138
102	狼	24	0	24	138
102	蓋	24	0	24	138
102	撥	24	0	24	138
102	捕	24	0	24	138
102	膝	24	0	24	138
109	亘	23	2	25	128
109	稼	23	1	24	138
109	只	23	1	24	138

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
109	凄	23	0	23	150
109	尢	23	0	23	150
109	嬉	23	0	23	150
109	喋	23	0	23	150
109	焰	23	0	23	150
117	溝	22	10	32	88
117	顛	22	0	22	156
117	剝	22	0	22	156
117	戴	22	0	22	156
117	杵	22	0	22	156
117	鑿	22	0	22	156
123	湧	21	1	22	156
123	稽	21	0	21	169
123	枕	21	0	21	169
123	棟	21	0	21	169
123	拭	21	0	21	169
123	屬	21	0	21	169
123	賑	21	0	21	169
123	睨	21	0	21	169
131	曾	20	6	26	118
131	屯	20	1	21	169
131	汰	20	0	20	179
131	淋	20	0	20	179
131	溜	20	0	20	179
131	糊	20	0	20	179
131	賭	20	0	20	179
131	屢	20	0	20	179

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
131	鉢	20	0	20	179
131	煽	20	0	20	179
141	管	19	5	24	138
141	懸	19	3	22	156
141	亦	19	0	19	193
141	妄	19	0	19	193
141	扉	19	0	19	193
141	洩	19	0	19	193
141	昧	19	0	19	193
141	馳	19	0	19	193
141	皿	19	0	19	193
141	鼠	19	0	19	193
141	釣*	19	0	19	193
141	尖	19	0	19	193
153	鍵	18	1	19	193
153	諒	18	0	18	208
153	伍	18	0	18	208
153	莫	18	0	18	208
153	苛	18	0	18	208
153	摺	18	0	18	208
153	捲	18	0	18	208
153	飄	18	0	18	208
153	唇	18	0	18	208
153	肌	18	0	18	208
163	阿	17	66	83	23
163	呂	17	2	19	193
163	鑷	17	1	18	208

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
163	碗	17	0	17	222
163	俄	17	0	17	222
163	悠	17	0	17	222
163	遮	17	0	17	222
163	裡	17	0	17	222
163	尨	17	0	17	222
163	摒	17	0	17	222
163	挑*	17	0	17	222
163	擻	17	0	17	222
163	臆	17	0	17	222
163	悶	17	0	17	222
163	瓶	17	0	17	222
178	洪*	16	47	63	34
178	虎	16	11	27	109
178	蒲	16	6	22	156
178	頓	16	6	22	156
178	曹	16	2	18	208
178	麓	16	1	17	222
178	雀	16	1	17	222
178	響	16	0	16	242
178	倅	16	0	16	242
178	儘	16	0	16	242
178	俸*	16	0	16	242
178	逞	16	0	16	242
178	溢	16	0	16	242
178	焚	16	0	16	242
178	拋	16	0	16	242

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
178	弗	16	0	16	242
178	嚙	16	0	16	242
178	躄	16	0	16	242
178	骸	16	0	16	242
178	馴	16	0	16	242
178	輿	16	0	16	242
178	傘	16	0	16	242
200	廠	15	0	15	263
200	迪	15	0	15	263
200	茲	15	0	15	263
200	殼*	15	0	15	263
200	戚	15	0	15	263
200	捉	15	0	15	263
200	呆	15	0	15	263
200	曖	15	0	15	263
200	蹴	15	0	15	263
200	躡	15	0	15	263
200	吻	15	0	15	263
200	厄*	15	0	15	263
200	眉	15	0	15	263
200	餌	15	0	15	263
214	齊*	14	1	15	263
214	袖	14	1	15	263
214	而	14	0	14	283
214	仔	14	0	14	283
214	匄	14	0	14	283
214	淫	14	0	14	283

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
214	汲	14	0	14	283
214	斬	14	0	14	283
214	把	14	0	14	283
214	搔	14	0	14	283
214	嘲	14	0	14	283
214	蹂	14	0	14	283
214	屑	14	0	14	283
214	股	14	0	14	283
214	隙	14	0	14	283
214	恢	14	0	14	283
230	蒼	13	12	25	128
230	庄	13	5	18	208
230	癒	13	0	13	301
230	謗	13	0	13	301
230	視	13	0	13	301
230	伎	13	0	13	301
230	黻	13	0	13	301
230	侶	13	0	13	301
230	汝	13	0	13	301
230	潰	13	0	13	301
230	巾	13	0	13	301
230	猫	13	0	13	301
230	鞞	13	0	13	301
230	輻	13	0	13	301
230	呪	13	0	13	301
230	髭	13	0	13	301
230	餅	13	0	13	301

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
250	灯*	13	0	13	301
230	惧	13	0	13	301
249	紐	12	8	20	179
249	脇	12	8	20	179
249	粟	12	7	19	193
249	朴*	12	2	14	283
249	牽	12	1	13	301
249	瘦	12	0	12	323
249	諱	12	0	12	323
249	塾	12	0	12	323
249	謎	12	0	12	323
249	歪	12	0	12	323
249	醒	12	0	12	323
249	纏	12	0	12	323
249	俘	12	0	12	323
249	綻	12	0	12	323
249	滯	12	0	12	323
249	渦*	12	0	12	323
249	茫	12	0	12	323
249	惹	12	0	12	323
249	据*	12	0	12	323
249	撫	12	0	12	323
249	贅	12	0	12	323
249	貼	12	0	12	323
249	瞞	12	0	12	323
249	喝	12	0	12	323
249	毀	12	0	12	323

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
249	惚	12	0	12	323
275	岡	11	98	109	15
275	釜	11	10	21	169
275	檀	11	1	12	323
275	詣	11	0	11	350
275	瓦	11	0	11	350
275	玩	11	0	11	350
275	斑	11	0	11	350
275	耐	11	0	11	350
275	已	11	0	11	350
275	悉	11	0	11	350
275	頰	11	0	11	350
275	綺	11	0	11	350
275	塞	11	0	11	350
275	牢	11	0	11	350
275	憑	11	0	11	350
275	襟	11	0	11	350
275	泡	11	0	11	350
275	抵	11	0	11	350
275	蔽	11	0	11	350
275	狽	11	0	11	350
275	挿	11	0	11	350
275	拗	11	0	11	350
275	挾	11	0	11	350
275	挫	11	0	11	350
275	扮	11	0	11	350
275	咳	11	0	11	350

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
275	雖	11	0	11	350
275	吊	11	0	11	350
275	蹟	11	0	11	350
275	噲	11	0	11	350
275	糞	11	0	11	350
306	藤	10	349	359	3
306	磨	10	4	14	283
306	痕	10	0	10	382
306	塵	10	0	10	382
306	詮	10	0	10	382
306	璃	10	0	10	382
306	弄	10	0	10	382
306	脊	10	0	10	382
306	乎	10	0	10	382
306	些	10	0	10	382
306	頻	10	0	10	382
306	魄	10	0	10	382
306	禦	10	0	10	382
306	傲	10	0	10	382
306	麟	10	0	10	382
306	漬	10	0	10	382
306	套	10	0	10	382
306	頗	10	0	10	382
306	妓	10	0	10	382
306	鬱	10	0	10	382
306	棉	10	0	10	382
306	翰	10	0	10	382

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
306	檜	10	0	10	382
306	檜	10	0	10	382
306	擾	10	0	10	382
306	托	10	0	10	382
306	揉	10	0	10	382
306	撒	10	0	10	382
306	瞳	10	0	10	382
306	唄	10	0	10	382
306	喉	10	0	10	382
306	肛	10	0	10	382
306	駁	10	0	10	382
306	脆	10	0	10	382
306	羨	10	0	10	382
306	煉	10	0	10	382
342	杉*	9	76	85	22
342	糲	9	13	22	156
342	洞	9	8	17	222
342	牡	9	1	10	382
342	狸	9	1	10	382
342	暢	9	1	10	382
342	拳	9	1	10	382
342	誹	9	0	9	427
342	謳	9	0	9	427
342	聘	9	0	9	427
342	璫	9	0	9	427
342	崖	9	0	9	427
342	兇	9	0	9	427

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
342	仇	9	0	9	427
342	脊*	9	0	9	427
342	瀕	9	0	9	427
342	遁	9	0	9	427
342	凌	9	0	9	427
342	袂	9	0	9	427
342	棲	9	0	9	427
342	娼	9	0	9	427
342	棍	9	0	9	427
342	趨	9	0	9	427
342	斡	9	0	9	427
342	曳	9	0	9	427
342	掠	9	0	9	427
342	搭	9	0	9	427
342	顛	9	0	9	427
342	腑	9	0	9	427
342	彪	9	0	9	427
342	厩	9	0	9	427
342	牙	9	0	9	427
342	肢	9	0	9	427
342	爺	9	0	9	427
342	釘	9	0	9	427
342	錮	9	0	9	427
342	箸	9	0	9	427
342	憧	9	0	9	427
380	垣	8	30	38	66
360	燕	8	12	20	179

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
380	昌	8	7	15	263
380	庵	8	4	12	323
380	窪	8	3	11	350
380	菩	8	2	10	382
380	齋	8	0	8	467
380	訣	8	0	8	467
360	頸	8	0	8	467
380	縹	8	0	8	467
380	綴	8	0	8	467
380	聳	8	0	8	467
380	洒	8	0	8	467
380	溺	8	0	8	467
380	祀	8	0	8	467
380	垢	8	0	8	467
380	妖	8	0	8	467
380	葡	8	0	8	467
380	葡	8	0	8	467
380	杖	8	0	8	467
380	猥	8	0	8	467
380	鴛	8	0	8	467
380	柵	8	0	8	467
380	夷	8	0	8	467
380	畏	8	0	8	467
380	哩	8	0	8	467
380	嘔	8	0	8	467
380	唵	8	0	8	467
380	腎	8	0	8	467

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
380	卿	8	0	8	467
380	玆	8	0	8	467
380	饒	8	0	8	467
380	憐	8	0	8	467
413	辻	7	38	45	49
413	羅	7	24	31	96
413	蘇	7	17	24	138
413	淵	7	11	18	208
413	彌	7	10	17	222
413	猿	7	4	11	350
413	斐	7	2	9	427
413	膳	7	2	9	427
413	濤	7	1	8	467
413	廓	7	0	7	508
413	褒	7	0	7	508
413	詫	7	0	7	508
413	訛	7	0	7	508
413	誦	7	0	7	508
413	焉	7	0	7	508
413	霸	7	0	7	508
413	碼	7	0	7	508
413	嵐	7	0	7	508
413	僑	7	0	7	508
413	佗	7	0	7	508
413	牒	7	0	7	508
413	傀	7	0	7	508
413	儼	7	0	7	508

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
413	穿	7	0	7	508
413	滲	7	0	7	508
413	汁*	7	0	7	508
413	遡	7	0	7	508
413	帖	7	0	7	508
413	鞭	7	0	7	508
413	狐	7	0	7	508
413	卅	7	0	7	508
413	菟	7	0	7	508
413	萎	7	0	7	508
413	蔓	7	0	7	508
413	巷	7	0	7	508
413	藉	7	0	7	508
413	猜	7	0	7	508
413	槌	7	0	7	508
413	椒	7	0	7	508
413	桎	7	0	7	508
413	檣	7	0	7	508
413	梯	7	0	7	508
413	漸	7	0	7	508
413	蛙	7	0	7	508
413	擲	7	0	7	508
413	啼	7	0	7	508
413	唾	7	0	7	508
413	嘶	7	0	7	508
413	呎	7	0	7	508
413	哨	7	0	7	508

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
413	闍	7	0	7	508
413	屁	7	0	7	508
413	愈	7	0	7	508
413	馘	7	0	7	508
413	錫	7	0	7	508
413	纂	7	0	7	508
413	怯	7	0	7	508
413	憚	7	0	7	508
413	蝥	7	0	7	508
472	須	6	21	27	109
472	駒	6	17	23	150
472	鍾	6	15	21	169
472	杜	6	9	15	263
472	濠	6	6	12	323
472	桶	6	5	11	350
472	蜂	6	4	10	382
472	兜	6	4	10	382
472	壺	6	2	8	467
472	挺	6	2	8	467
472	畢	6	2	8	467
483	韻(韻*)	5	29	34	80
483	鶴	5	19	24	138
483	磯	5	17	22	156
483	毅	5	15	20	179
483	奈	5	14	19	193
483	薩	5	14	19	193
483	壤*	5	4	9	427

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
483	洛	5	3	8	467
483	胡	5	3	8	467
483	播	5	3	8	467
483	鄭	5	2	7	508
494	鳩	4	172	176	7
494	仙	4	22	26	118
494	鯉	4	16	20	179
494	幡	4	13	17	222
494	也	4	12	16	242
494	隈	4	11	15	263
494	瓜	4	9	13	301
494	蘭	4	8	12	323
494	嶺	4	5	9	427
494	銚	4	5	9	427
494	鷹	4	4	8	467
494	啄	4	4	8	467
494	巖	4	3	7	508
494	叡	4	3	7	508
494	哉	4	3	7	508
509	猪	3	76	79	26
509	芥	3	28	31	96
509	鴨	3	26	29	102
509	蠟	3	11	14	283
509	辰	3	8	11	350
509	霞	3	7	10	382
509	邁	3	7	10	382
509	笠	3	7	10	382

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
509	湛	3	6	9	427
509	綾	3	5	8	467
509	薇	3	5	8	467
509	蕎	3	5	8	467
521	李	2	36	38	66
521	堀*	2	36	38	66
521	弘	2	27	29	102
521	巴	2	14	16	242
521	鵜	2	14	16	242
521	熊	2	13	15	263
521	祿	2	6	8	467
521	惣	2	5	7	508
521	陸	2	5	7	508
521	鍋	2	5	7	508
531	伊	1	77	78	28
531	鎌	1	25	26	118
531	菱	1	24	25	128
531	亀	1	21	22	186
531	芦	1	21	22	156
531	堺	1	15	16	242
531	淀	1	12	13	301
531	輔	1	7	8	467
539	洲	0	153	157	8
539	崎	0	131	131	12
539	蔣	0	55	55	40
539	韓	0	49	49	44
539	汪	0	43	43	52

(A)順位	漢字	(A)度数	(B)度数	(A)+(B)	(A)+(B)順位
539	阪	0	34	34	80
539	彦	0	33	33	84
539	塚	0	32	32	88
539	鮎	0	28	28	106
539	劉	0	25	25	128
539	宋	0	20	20	179
539	趙	0	18	18	208
539	侯	0	17	17	222
539	汀	0	17	17	222
539	樺	0	17	17	222
539	碯	0	16	16	242
539	桂	0	16	16	242
539	菅	0	14	14	283
539	華	0	13	13	301
539	槻	0	13	13	301
539	嘉	0	12	12	323
539	葵	0	12	12	323
539	甫	0	10	10	382
539	晋	0	9	9	427
539	梨	0	9	9	427
539	隴	0	9	9	427
539	焚	0	7	7	508
539	幌	0	7	7	508
539	楊	0	7	7	508

地方言語の敬語に関する調査Ⅰ

昭和27年度地方調査員に対する委託調査

A. ま え が き

この調査の目的、計画、実施状況、昭和28年6月までに行った結果の整理については、昭和27年度国立国語研究所年報（33～37ページ）においてそのあらましを報告した、以下はひきつづいて本年度に行った結果の整理分析の経過とその成果の一端とである。

B. 結果の整理

1. 調査報告の回収

昭和28年7月まで待つて（しめきり昭和27年12月31日）調査報告の回収を打ち切った。この調査の報告は、（1）調査票、（2）「調査票による調査」の実施状況と調査についての所感、（3）終助詞による敬意の表わし方、（4）「これからの敬語」についての所感、の4種類であるが、回収状況は以下のようである。

（1）調査票： 計画では、被調査者は全国で329地点658人（1地点2人）であるが、調査票が回収されたのは、300地点600人であって、計画の約91%である。回収できなかったのは、北海道4地点8人、神奈川県、山梨県、奈良県それぞれ7地点14人、愛知県3地点6人、三重県1地点2人、計29地点58人である。

（2）調査の実施状況と調査についての所感： 調査員47人中提出したものの39人、未提出8人、

（3）終助詞による敬意の表わし方： 提出したものの36人、未提出11人、

（4）「これからの敬語」についての所感： 提出したものの43人、未提出4人、

以上のうち、本年度はもっぱら調査票による調査の結果の分析を行った。

2. 調査地点

調査票が回収された 300 地点は、次のようである。

調査地点一覧表

府県別	地点No.	地名	府県別	地点No.	地名	
北海道 (01)	1	岩見沢市	宮城 (05)	1	伊具郡筆甫村	
	2	網走市		2	刈田郡宮村	
	3	樺戸郡月形村		3	宮城郡秋保村	
	(02)	1		余市郡余市町	4	宮城郡松島町
		2		寿都郡壽都町	5	加美郡小野田町
		3		太櫛郡太櫛村	6	登米郡米谷町
		4		松前郡福島町	7	本吉郡鹿折町
5		亀田郡戸井村	秋田 (06)	1	北秋田郡七座村	
6		茅渚郡鹿渚村		2	山本郡沢目村	
7		上川郡多寄村		3	南秋田郡大川村	
青森 (03)	1	南津軽郡黒石町		4	雄勝郡明治村	
	2	北津軽郡中里村		5	仙北郡横沢村	
	3	西津軽郡深浦町		6	河辺郡豊島村	
	4	東津軽郡小湊町		7	由利郡岩谷村	
	5	下北郡大畑町	山形 (07)	1	東田川郡狩川町	
	6	上北郡七戸町		2	最上郡菰野村	
	7	三戸郡三戸町		3	北村山郡田麦野村	
岩手 (04)	1	東磐井郡大原町		4	西村山郡七軒村	
	2	胆沢郡衣川村		5	東村山郡大郷村	
	3	稔貫郡大迫町		6	東置賜郡金山村	
	4	岩手郡磐石町		7	南置賜郡中津川村	
	5	下閉伊郡小川村	福島 (08)	1	伊達郡太田村	
	6	九戸郡軽米町		2	田村郡中郷村	
	7	二戸郡浄法寺町		3	西白河郡信夫村	

府県別	地点No.	地 点 名	府県別	地点No.	地 点 名
	4	河沼郡勝常村		5	北足立郡大門村
	5	南会津郡檜沢村		6	北埼玉郡樋遣川村
	6	石城郡草野村		7	北葛飾郡八代村
	7	相馬郡石神村	千 葉 (13)	1	海上郡旭町
茨 城 (09)	1	多賀郡籙形村		2	印旛郡六合村
	2	那珂郡瓜連町		3	東葛飾郡富勢村
	3	東茨城郡竹原村		4	長生郡新治町
	4	稲敷郡鳩崎村		5	夷隅郡布施町
	5	結城郡宗道村		6	君津郡天神山村
	6	西茨城郡北那珂村		7	安房郡九重村
	7	鹿島郡波野村	新 潟 (15)	1	北蒲原郡京ヶ瀬村
栃 木 (10)	1	那須郡小川町		2	東蒲原郡三川村
	2	芳賀郡逆川村		3	西蒲原郡烏上村
	3	塩谷郡片岡村		4	三島郡岩塚村
	4	河内郡瑞穂野村		5	南魚沼郡城内村
	5	上都賀郡今市町		6	中頸城郡和田村
	6	下都賀郡家中村		7	佐渡郡加茂村
	7	安蘇郡田沼町	富 山 (16)	1	下新川郡泊町
群 馬 (11)	1	利根郡桃野村		2	中新川郡滑川町
	2	吾妻郡中之条町		3	上新川郡上滝町
	3	甘楽郡富岡町		4	射水郡小杉町
	4	多野郡藤岡町		5	東礪波郡庄川町
	5	伊勢崎市		6	西礪波郡石動町
	6	山田郡毛里田村		7	氷見郡氷見町
	7	邑楽郡赤羽根村	石 川 (17)	1	江沼郡矢田野村
埼 玉 (12)	1	秩父郡横瀬村		2	能美郡根上町
	2	大里郡岡部村		3	石川郡安原村
	3	比企郡西吉見村		4	河北郡浅川村
	4	入間郡鶴瀬村		5	羽咋郡河合谷村

府県別	地点No.	地 点 名	府県別	地点No.	地 点 名
	6	鹿島郡笠師保村		7	浜名郡新居町
	7	鳳至郡門前町	愛 知 (23)	1	葉栗郡木曾川町
福 井 (18)	1	坂井郡本荘村		2	中島郡今伊勢町
	2	吉田郡下志比村		3	丹羽郡古知野町
	3	今立郡眼間村		4	名古屋市瑞穂区
	4	大野郡下穴馬村	三 重 (24)	1	桑名郡木曾岬村
	5	南条郡今庄村		3	一志郡八ツ山村
	6	敦賀郡愛発村		4	多気郡三瀬谷村
	7	速敷郡三宅村		5	志摩郡御座村
長 野 (20)	1	下伊那郡伊賀良村		6	北牟婁郡長島町
	2	西筑摩郡日義村		7	南牟婁郡有井村
	3	諏訪郡下諏訪町	滋 賀 (25)	1	高島郡高島町
	4	東筑摩郡本城村		2	滋賀郡堅田町
	5	小県郡浦里村		3	粟太郡瀬田町
	6	更級郡稲里村		4	甲賀郡甲南町
	7	下高井郡穂波村		5	神崎郡八日市町
岐 阜 (21)	1	海津郡今尾町		6	彦根市
	2	揖斐郡久瀬村		7	長浜市
	3	郡上郡彌富村	京 都 (26)	1	何鹿郡豊里村
	4	土岐郡土岐津町		2	天田郡下川口村
	5	益田郡馬瀬村		3	船井郡上和知村
	6	吉城郡古川町		4	南桑田郡宮前村
	7	大野郡白川村		5	北桑田郡周山町
静 岡 (22)	1	賀茂郡下河津村		6	久世郡富野荘町
	2	駿東郡深良村		7	相楽郡中和東村
	3	富士郡鷹岡町	大 阪 (27)	1	南河内郡道明寺町
	4	志太郡岡部町		2	中河内郡堅下村
	5	小笠郡掛川町		3	三島郡清水村
	6	磐田郡二俣町		4	泉北郡忠岡町

府県別	地点No.	地 点 名	府県別	地点No.	地 点 名
	5	泉北郡東陶器村		6	西伯郡名和村
	6	泉南郡熊取町		7	日野郡根雨町
	7	南河内郡長野町	島 根 (33)	1	能義郡飯梨村
兵 庫 (28)	1	多紀郡城北村		2	八東郡講武村
	2	加東郡大部村		3	飯石郡東須佐村
	3	三原郡阿那賀村		4	邇摩郡湯里村
	4	津名郡中田村		5	邑智郡布施村
	5	赤穂郡矢野村		6	浜田市
	6	飾磨郡谷内村		7	美濃郡北仙道村
	7	武庫郡良元村	岡 山 (34)	1	和氣郡伊里町
(29)	1	美方郡温泉町		2	赤磐郡高月町
	2	城崎郡奈佐村		3	児島郡山田村
	3	出石郡賀母村		4	小豆郡小田町
	4	養父郡宿南村		5	阿哲郡神代村
	5	朝来郡山口村		6	真庭郡勝山町
	6	神崎郡豊富村		7	勝田郡勝岡田町
	7	宍粟郡富栖村	広 島 (35)	1	比婆郡西城町
和歌山 (31)	1	伊都郡学支路村		2	世羅郡津久志村
	2	那賀郡龍門村		3	沼隈郡鞆町
	3	海草郡安原村		4	高田郡甲立町
	4	有田郡生石村		5	呉市仁方町
	5	日高郡湯川村		6	安佐郡飯室村
	6	田辺市		7	佐伯郡四和村
	7	東牟婁郡高池町	山 口 (36)	1	大津郡日置村
鳥 取 (32)	1	八頭郡丹比村		2	阿武郡奈古町
	2	八頭郡杜村		3	豊浦郡西市町
	3	岩美郡津ノ井村		4	佐波郡八坂村
	4	気高郡末恒村		5	厚狭郡小野村
	5	東伯郡由良町		6	都濃郡鹿野町

府県別	地点No.	地 点 名	府県別	地点No.	地 点 名
	7	熊毛郡田布施町	福 岡 (41)	1	京都郡豊津村
徳 島 (37)	1	那賀郡坂野町		2	田川市
	2	海部郡三岐田町		3	鞍手郡宮田町
	3	那賀郡平谷村		4	粕屋郡香椎町
	4	阿波郡土成町		5	筑紫郡水城村
	5	麻植郡中枝村		6	三井郡宮ノ陣村
	6	美馬郡江原町		7	山門郡三橋町
	7	三好郡辻町	佐 賀 (42)	1	三養基郡田代町
香 川 (38)	1	大川郡引田町		2	神崎郡三田川村
	2	小豆郡四海村		3	佐賀郡東川副村
	3	木田郡十河村		4	杵島郡武内村
	4	香川郡下笠居村		5	藤津郡大浦村
	5	綾歌郡羽床村		6	東松浦郡久里村
	6	丸亀市		7	西松浦郡伊万里町
	7	三豊郡財田村	長 崎 (43)	1	北松浦郡中野村
愛 媛 (39)	1	宇摩郡小富士村		2	諫早市
	2	周桑郡楠河村		3	西彼杵郡神浦村
	3	越智郡桜井町		4	東彼杵郡 下波佐見村
	4	伊予郡中山町		5	佐世保市
	5	東宇和郡宇和町		6	南高来郡南有馬町
	6	北宇和郡松丸町		7	南松浦郡福江町
	7	南宇和郡城辺町	熊 本 (44)	1	五冬郡伊倉町
高 知 (40)	1	幡多郡橋上村		2	菊池郡菊池村
	2	高岡郡窪川町		3	阿蘇郡古城村
	3	吾川郡伊野町		4	飽託郡中緑村
	4	土佐郡地藏寺村		5	人吉市
	5	長岡郡東豊永村		6	水俣市
	6	香美郡佐古村		6	葦北郡津奈木村
	7	安芸郡室戸町		7	天草郡棚底村

府県別	地点No.	地 点 名	府県別	地点No.	地 点 名
大 分 (45)	1	下毛郡中耶馬溪村	鹿児島 (47)	5	東諸県郡綾町
	2	宇佐郡糸口村		6	北諸県郡高城町
	3	東国東郡竹田津町		7	西諸県郡加久藤村
	4	北海道郡津久見浜町		1	出水郡大川内村
	5	南海部郡蒲江町		2	薩摩郡水引村
	6	大野郡合川村		3	日置郡郡山村
	7	玖珠郡東飯田村		4	鹿児島郡西桜島村
宮 崎 (46)	1	宮崎郡広瀬町	5	川辺郡西南方村	
	2	児湯郡西米良村	6	姶良郡吉松村	
	3	東臼杵郡北浦村	7	肝属郡佐多町	
	4	西臼杵郡高千穂町			

3. 被調査者の文化的条件の検討

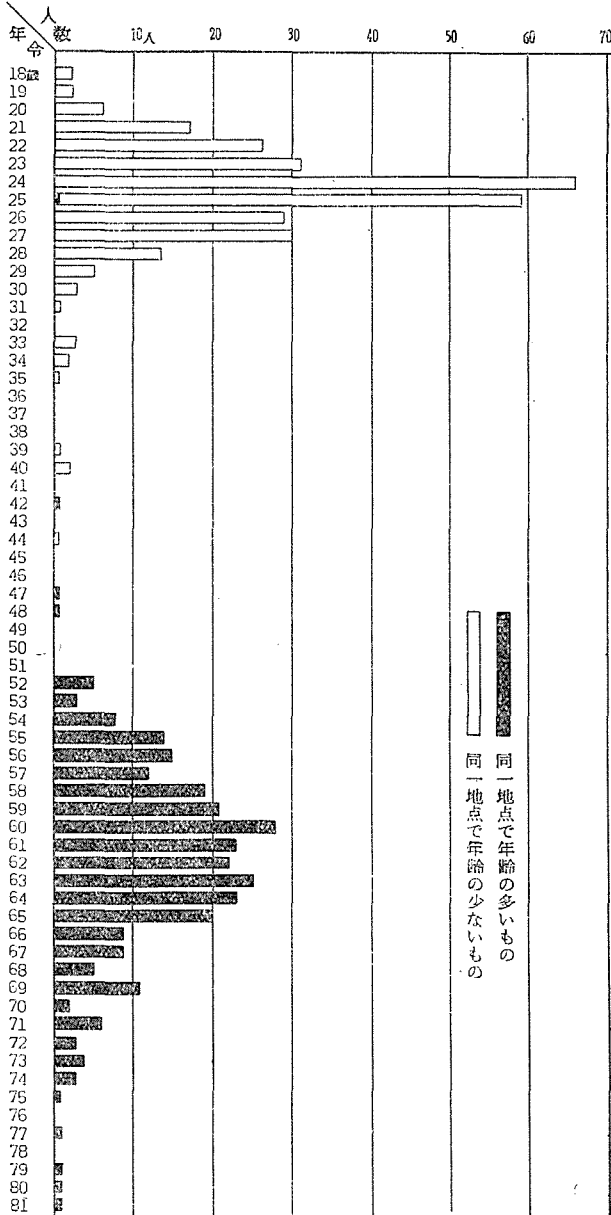
調査目標に従って、あらかじめ被調査者の文化的条件を性、年齢、居住経歴、職業、階層の6項目について指定した。結果の分析に先立って、調査票が回収された600人の被調査者の文化的条件を検討し、被調査者の人数を考慮しながら、一項目でも指定の条件と著しく異なるものは、条件の不明なものとともに分析の対象から除外した。この作業は7月中旬に終了した。検討の結果は以上のとおりである。(カッコ内は指定の条件を示す)

(1) 性(男)：男599人，女1人，女1人は除外。

(2) 年齢(同一地点で，1人は60歳前後，1人は25歳前後)：同一地点で年齢の多いものと少ないものとに分け，それぞれの年齢別分布を図示すると，図1のようになる。その結果，年齢の少ない層(青年層)は30歳以上，年齢の多い層(老年層)は51歳未満，75歳以上を除外した。

(3) 居住経歴(調査地点で生まれ，成長したもの)：指定条件を備えているものは600人中429人(71.5%)であるが，その他のものについて，移住

〔図 1〕



の年齢，期間，移住地，移住の理由などをひとりひとり検討し，調査地点外の地域の言語的影響があると思われるものは除外した。

(4) 学歴(25歳前後のものは旧制高等小学校，60歳前後のものは旧制小学校卒業程度)：集計の結果は表1のようである。検討の結果，青年層，老年

(表1)

	同一地点で年齢の多いもの	同一地点で年齢の少ないもの
ナシ	1	
寺小屋	2	
小退	4	
小	3	1
小卒	174(58%)	15(5)
高小退	4	
高小		2
高小修		1
高小卒	95(31.7)	249(83)
青		1
青卒		3
新中卒		1
定高退		1
商業退		2
農林退		1
新高卒		1
高卒		2
記入もれ	17(5.6)	20(6.7)
(計)	300	300

層ともに旧制小学校，旧制高等小学校卒業あるいはそれに準ずるものとし，学歴なし，寺小屋，小学校中退，新旧制高等学校卒業を除外した。

(5) 職業(農耕に従事している人。兼業として役場の書記などの事務的職業，商業などに従事しているものを除く)：集計の結果は表2のようになって，その結果，農業のみのもの，農業を本業あるいは兼業としているものを以外は除外した。

(6) 階層(中流)：調査票の文化的条件に関する項目中，階層判定のための項目を設けなかったため，階層については，とくに検討しない。

検討の結果，以上の除外例の一項目以上に該当するもの，条件の不明なものを除外した498人(青年層250人，老年層248人)を分析の対象とした。したがって，分析にあたり，被調査者は地点別のほか年齢による二つの層の区別だけに注目し，性，居住経歴，学歴，職業などの条件については一応等質であると考えた。

4. 整理カードの作成

集計の便宜と，調査票を資料として保存するために，調査票に記入された

〔表 2〕

本業	兼業	人数	本業	兼業	人数	本業	兼業	人数
農	な し	487	農	綿 打	2	果 樹	農	1
"	漁	12	"	筏 師	1	石 工	"	2
"	牧 畜	1	"	出 稼	1	林 産 (炭焼)	"	1
"	屋根葺	2	"	林 業	12	屋 根 屋	"	1
"	野菜引売	1	"	ぶどう栽培	1	工 事 員	"	1
"	製板製炭	1	"	炭 焼	4	農 業 試 験 場 員	"	1
"	荷馬車引	1	"	材木切出	1	作 業 漁	な し	5
"	山林酪農	1	"	野鍛冶製造	2	商	"	1
"	凍豆腐製造	1	"	製 茶	1	公 民 館 事 務 員 (村役場吏員)	"	2
"	日 備	2	"	煙 草	1	米 屋	"	1
"	日備(土工)	1	"	果樹栽培	1	農 具	"	1
"	養 蚕	6	"	畜産林業	1	竹 材 工	"	1
"	桶 職	1	"	養 豚	1	桶 職	"	1
"	大 工	4	"	家 畜 商	1	会 社 員	"	2
"	小 運 送	1	"	県 電 話 局	1	消 防 士	"	1
"	宿 泊 業	1	"	下 男	1	大 工	"	1
"	織 子	1	漁	農	11	な し な し	し	4
"	土木道具	1	馬車屋	"	1	記 入 な し 記 入 な し		2
"	瓦 屋 根	1	建 築	"	1	計		600

反応形とそれに対する調査員の注記を、被調査者、問題ごとに一枚の整理カードに書字した。この作業は9月下旬に終了した。

D. 分析の経過とその結果

1. 分析の目標

問題1, 2(親族呼称に関する問題)を除く他の20問はすべて5種類の話し相手, すなわち(1)近所のよくつきあっている同じ年ごろのもの(略号A), (2)近所の顔見知りの年下のもの(B), (3)近所の顔見知りの年上のもの(C), (4)小学校の校長先生(D), (5)見知らない同じ年ごろのもの(E), のそれぞれに対し, 同じ場面においてどのような言い方をするかを調査した。(調査票実例参照)

調 査 票 実 例 (問題7)

- 7~1 近所のよくつきあっている、あなたと同じ年ごろの男の人が、あなたの家に立ち寄って、帰るとき、「いま、何時ですか?」と聞きました。それに対して、「ちょうど5時です」と答える場合、「5時です」というところをどのように言いますか? とは言いませんか?

1
1'
2

- 7~2 では、それが近所の顔見知りのあなたよりも年下の男の人だったら「ちょうど5時です」と答える場合、「5時です」というところをどのように言いますか?

1
1'
2

- 7~3 もし、相手が近所の顔見知りの、あなたよりも年上の男の人だったら「ちょうど6時です」とあなたが答える場合、「5時です」というところをどのように言いますか?

1
1'
2

- 7~4 では、相手が小学校の校長先生だったら「5時です」と答える場合、どのように言いますか?

1
1'
2

- 7~5 また、まったく見知らない、あなたと同じ年ごろの男の人が、あなたの家に道を聞きに立ち寄って、帰るとき「どうもありがとう、ところでいま何時ですか?」と聞きました。それに対して「ちょうど5時です」と答える場合、どのように言いますか?

1
1'
2

本年度は調査目標の第一「一定の場面(話し相手を除く)において、話し相手によってどのように言い方が使われているか」を明らかにするために、まずA, B, C, D, Eそれぞれに対する言い方の全体を単位とし、問題ごと、被調査者ごとに反応した言い方の型(反応型)を決定し、どのような型が多いか、型の種類と年齢層、地域との関係など、型の構造を分析の目標とした、作業は10月から始め、現在進行中である。

2. 反応型の種類とその記号

集計、分析の便宜上反応型を次のように記号で表わした。(実例は問題7指定の言い方:「5時です」に対応する言い方)

A, B, C, D, E全部に同じ言い方をした: aaaaa型

(実例): 福島県今立郡服間村(老年)

A: ゴジデス

B: ゴジデス

C: ゴジデス

D: ゴジデス

E: ゴジデス

AB, CDEにそれぞれ同じ言い方をした: aabbb型

(実例): 秋田県山本郡沢目村(老年)

A: ゴジダデァ

B: ゴジダデァ

C: ゴジダス

D: ゴジダス

E: ゴジダス

AB, DEにそれぞれ同じ言い方, Cにはそのどちらとも異なる言い方をした: aabcc型

(実例): 京都府久世郡富野荘町(老年)

A: ゴジヤデ

B : ゴジヤデ

C : ゴジドッセ

D : ゴジデス

E : ゴジデス

A B C D Eのそれぞれに異なる言い方をした : abcde型

(実例) : 福岡県鞍手郡宮田町 (老年)

A : チョート コヂタイ

B : モー, コヂ!

C : イマ, ゴジデスバイ

D : モウ, ゴヂ (デ) ゴザイマス バイ

E : ゴヂデスタイ

このようにして決定される型はaaaaa型からabcde型まで次の 52 種類が考えられる。

a	a	a	a	a	a	b	b	a	c
a	a	a	a	b	a	b	b	b	a
a	a	a	b	a	a	b	b	b	b
a	a	a	b	b	a	b	b	b	c
a	a	a	b	c	a	b	b	c	a
a	a	b	a	a	a	b	b	c	b
a	a	b	a	b	a	b	b	c	c
a	a	b	a	c	a	b	b	c	d
a	a	b	b	a	a	b	c	a	a
a	a	b	b	b	a	b	c	a	b
a	a	b	b	c	a	b	c	a	c
a	a	b	c	a	a	b	c	a	d
a	a	b	c	b	a	b	c	b	a
a	a	b	c	c	a	b	c	b	b
a	a	b	c	d	a	b	c	b	c
a	b	a	a	a	a	b	c	b	d
a	b	a	a	b	a	b	c	c	a
a	b	a	a	c	a	b	c	c	b
a	b	a	b	a	a	b	c	c	c
a	b	a	b	b	a	b	c	c	d
a	b	a	b	c	a	b	c	d	a
a	b	a	c	a	a	b	c	d	b
a	b	a	c	b	a	b	c	d	c
a	b	a	c	c	a	b	c	d	d
a	b	a	c	d	a	b	c	d	d
a	b	b	a	a	a	b	c	d	e
a	b	b	a	b	a	b	c	d	e

〔表 3〕 年齢層別・問題別反応型分布表 青年層(250人)

反応	問題											
	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
1	aaaaa	1	2	7	8	1		3			6	
2	aaaaab	1	1		1			1			1	
3	aaaba	2	1	5	7	6	5	9	10	1	2	
4	aaabb	6	10	25	24	20	10	2	22		19	
5	aaabc	5	4	8	12	5	4	14	5	14	8	
6	aabaa											
7	aabab											
8	aabac											
9	aabba	1		2		1			5		1	
10	aabbb	18	29	29	33	56*	27	6	55*	1	42*	
11	aabbc	6	10	7	5	7	5	5	9		8	
12	aabca			1	3	1		3		1	1	
13	aabcb	14	8	8	10	12	23	45	10	1	8	
14	aabcc	51*	46*	54*	40*	37	60*	4	50		40	
15	aabcd	29	16	16	16	20	25	78*	13	144*	30	
16	abaaa					2	1		2		3	
17	abaaab											
18	abaaac											
19	ababaa					1						
20	ababb											
21	ababc											
22	abaca		1		1	1	3	4				
23	abacb											
24	abacc	1	4	2	4	4	4	5	5		5	
25	abacd	3	1	3		2	3	5	1	8	1	
26	abbaaa			1		1						
27	abbbab											
28	abbbac				1							
29	abbbba											
30	abbbbb				1		1		1		1	
31	abbbcb					1						
32	abbbca			1						1		
33	abbbc								1		1	
34	abbbc		4	3	3	2	2		3		3	
35	abbbc		4	3	3	2	2		3		3	
36	abbbc	2	2	1	1	1	1	5		1	1	
37	abcaaa					1						
38	abcab											
39	abcac											
40	abcad											
41	abcba							1				
42	abcbb											
43	abcbb											
44	abcbb											
45	abcca			2		1			1		1	
46	abccb				1				1		1	
47	abccc	15	12	8	9	21	13	4	12	2	13	
48	abccd	6	10	6	3	4	7	1	3	1	7	
49	abccd	3			1	1	1	1			3	
50	abccb			1	2	1			1		4	
51	abccc	10	10	8	7		9	21	3	1	4	
52	abccc	38	35	25	28	22	28	2	22		13	
	abcde	34	40	25	23	16	15	26	10	66	27	
	×	5	4	2	6	2	2	14	1	8	1	

* は問題ごとでもっとも多い型 ×は5種類の話し相手全部に対する

13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	計		
										実数	順位	
5	14	8	43*	5	2	4	1	3			114	12
1	2	20	3								31	17
13	5	1	5	8	4	5		2			91	13
14	15	14	17	23	7	24	3	6			261	7
1	6	42	4	2	4	8		4	7		157	10
			2								2	28
4		2	1	1							18	21
43*	26	9	32	44	36	65*	35	48	3		637	3
9	10	43	9	12	14	6	14	5	1		185	9
1			2	3		2		1	3		22	20
17	3	4	5	11	22	13	11	18	32		275	6
37	30*	8	23	52*	62*	45	68*	60*	5		772	1
6	26	48*	23	22	37	16	31	20	107*		723	2
2	4		4	2			2	1			23	19
				1				1			2	28
						1					1	29
							1				1	29
1			1	1		2	1				16	23
4	3	1	3	6	2	1	1	5			1	29
3	1	2	5	1	2	1	4	1	3		59	15
											50	10
											2	28
											1	29
	2		3								9	24
		2	1								4	26
											2	28
1				1	1						5	25
						3					23	19
1	4	1	1	2	1	1		3	1		29	18
			1								2	28
											1	29
			2					1			3	27
	2		1		1		1				9	24
			1								4	26
25	7	2	11	11	4	10	12	12	4		207	8
5	4	5	2	3	5	8	8	2			90	14
1		1	2	1		1	1				17	22
			2	1							9	24
1	3	1	1	5	5	4	6	8	12		119	11
10	14	1	13	14	17	13	29	25	6		355	5
10	19	30	17	16	20	8	20	21	65		508	4
35	50	5	10	2	4	3	2	3	1		160	

反応を記入してないため型を決定しなかったもの

(5000)

年齡層別・問題別反應型分布表 老年層 (248人)

反應型	問題											
	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
1	aaaaa	3	8	8	9	5	5	3	9			17
2	aaaab		1		1	3						2
3	aaaba	1	2	7	1		6	9	8	1		3
4	aaabb	11	18	39*	33	32	18	13	34	2		26
5	aaabc	7	5	8	15	7	4	16	4	38		10
6	aabaa											
7	aabab					1						
8	aabac											
9	aabba	2						1	2			
10	aabbb	15	14	3	41*	41*	28	13	48*	1		28
11	aabbc	2	6	32	4	8	6	5	10	2		8
12	aabca			10				2		3		2
13	aabcb	5	5		5	5	11	34	8			7
14	aabcc	26	23	5	34	30	36*	5	34	3		19
15	aabcd	19	17	36	15	18	15	42*	13	87*		23
16	abaaa	4	8	16	1	2	6	4	6			4
17	abaab			3								
18	abaac	2			1	2		1	1			
19	ababa											
20	ababb				1							
21	ababc									1		
22	abaca	2			1	2	1	3	6			2
23	abacb											
24	abacc	8	13	5	5	8	12	12	5			5
25	abacd	5	6	3	3	5	7			26		3
26	abbaa											1
27	abbab											
28	abbac											
29	abbba											
30	abbbb	3			3	2	1		1			2
31	abbbc		1	1					1			1
32	abbca											
33	abbcb	1							2			1
34	abbcc	5	8	3	3		2	2	3			2
35	abbcd	9	1	2	1	3	2	3		4		1
36	abc aa	1		1			1		1			
37	abc ab											
38	abc ac											
39	abc ad		1									
40	abc ba											
41	abc bb						1		1			
42	abc bc											
43	abc bd											
44	abcca		2		1	2	2		2			1
45	abccb			1					1			1
46	abccc	18	14	9	18	14	22	5	18			14
47	abccd	13	8	9	10	11	5	7	5	1		4
48	abc da	2	1		2	1	2	3				2
49	abc db	1			1	1	1	1		1		1
50	abc dc	12	15	4	6	3	11	19	4	3		4
51	abc dd	28	13	15	13	20	22	3	11	1		18
52	abc de	39*	38*	27	18	19	19	31	9	68		35*
	x	4	2	1	2	3	2	11	1	6		1

										計		
13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	突	数	順位
14	21	1	41*	10	2	5	5	4	2	172	10	
2	2	16	2	2						31	21	
13	3		6	4	4	2	2	2	2	76	16	
26	21	10	19	27	24	33	22	23	7	438	5	
9	12	40	10	10	4	8	5	8	21	241	8	
1			2							3	33	
	2									3	33	
1										1	35	
8			4	5			1			26	22	
31*	20	12	12	44*	39*	69*	41*	46*	10	585	1	
3	4	48*	10	10	8	7	9	10	3	173	9	
			2						1	10	28	
4	8	1		10	13	3	8	9	14	155	11	
20	16	10	9	34	37	35	31	43	20	501	3	
14	20	32	24	8	26	14	21	24	52	500	4	
7	2	2	5	2	3	5	4	5	1	74	17	
		4	3							14	26	
			1							1	35	
	1									1	35	
5	1			1	2	1	1	2	3	33	20	
	1		1	1					1	4	32	
4	7	1	4	10	5	10	6	2		122	14	
5	3	5	6		7		2	2	5	93	15	
										1	35	
			3									
			1							15	25	
1	1	2								8	29	
			1							1	35	
1	1		1							7	30	
1			1	5	1		1	2	3	42	19	
		4	2	4	2			2	3	43	18	
			1					1		6	31	
										1	35	
										2	34	
1		1				2	2	2	1	19	24	
1			1		1					7	30	
15	1	7	11	14	11	20	16	15	12	262	7	
6	8	17	6	3	7	12	4	4	7	147	12	
1	4		1	3	1					23	23	
1	1		1		1					11	27	
2	4	1	2	7	5	4	5	4	8	123	13	
11	17	2	9	13	21	8	29	20	13	305	6	
19	33*	28	39	20	21	10	33	18	56*	580	2	
21	25	4	8	1	3				3	98		

なお、1人の被調査者が1人の話し相手に対して2種類以上の言い方で反応した場合は調査員の注記によってふだん、より多く使っていると認められる言い方をとり、注記のない場合は最初に反応した言い方をとって型を決定した。上にも述べたように問題1, 2は他の20問と問題の構成が異なるから、反応型の分析からは除外した。

3. 年齢層別・問題別反応型分布表

はじめに、問題別・被調査者別（同時に府県別）反応型分布表（省略）を作成し、その表から年齢層別・問題別反応型分布表（表3）を作成した。

型の現われ方の問題による違いは、個々の問題の内容、すなわち反応に現われる語形と関連させて解釈しなければならないから、その分析は来年度に譲る。年齢層による違いは表3をさらに整理した4～6において述べよう。

4. いく通りの使いわけが多いか

反応型を1通りの使いわけ（aaaaa型）、2通りの使いわけ（aとbを含む型）3通りの使いわけ（a, b, cを含む型）、4通りの使いわけ（a, b, c, dを含む型）、5通りの使いわけ（a, b, c, d, e型）に区別し、表3を整理した。

〔表4〕

	(老)	(若)	(計)
1 通り (aaaaa型)	172	114	286
2 " (abを含む)	1254	1076	2330
3 " (abc ")	1610	1780	3360
4 " (abcd ")	1246	1392	2638
5 " (abcde 型)	580	508	1088
	4862	4840	9702

(×型は除く)

表4によると、青年層・老年層ともに、5種類の話し相手に三通りの言い方を使いわける場合（a, b, cを含む型）がもっとも多い。年齢層別では異なる特徴は見られない。

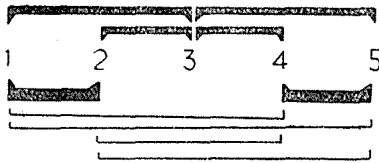
5. どの話し相手とどの話し相手に同じ言い方をするか

5種類の話し相手A, B, C, D, Eのどれとどれに同じ言い方をすることが多いか, その一致度を集計すると表5のようになる。

〔表 5〕

老	1	2	3	4	5
1		2915	1302	306	448
2			1075	239	337
3				1533	1503
4					2532
5					

若	1	2	3	4	5
1		3288	807	175	320
2			807	166	279
3				1331	1497
4					2470
5					






- {  : 同じ言い方をすることがひじょうに多い
 {  : やや多い
 {  : ひじょうに少ない

表5によると青年層, 老年層の間に特徴的な差は見られない。したがって, 表5は図2のような簡単な図に示すことができる。すなわち, AとB, DとEにはそれぞれ同じ言い方をする

ことがきわめて多いのに対し, ABとDEに同じ言い方をすることはきわめて少ない。Cに対してはABに対する言い方と同じ言い方をすることもあり, DEに対する言い方と同じ言い方をすることもある。

6. どのような型が多いか

4, 5よりa2bcc型がもっとも多く現われる型であると言えるが, 表8から多く現われる型十位までと, 1人も反応しなかった型を抽出すると次のようである。

よく現われる型と現われない型は表5の一致度によって大体説明される。年齢層別では著しい差は見られない。青年層, 老年層を通じて, aabcc型が支持されるが, その理由は, AとB, DとEにそれぞれ同じ言い方をする型

〔表 6〕 多い型 (10位まで)

順位	老		若		計	
	型	No. 実数	型	No. 実数	型	No. 実数
1	a a b b b (10)	585	a a b c c (14)	772	a a b c c (14)	1273
2	a b c d e (52)	580	a a b c d (15)	723	a a b c d (15)	1223
3	a a b c c (14)	501	a a b b b (10)	637	a a b b b (10)	1222
4	a a b c d (15)	500	a b c d e (52)	508	a b c d e (52)	1088
5	a a a b b (4)	438	a b c d d (51)	355	a a a b b (4)	699
6	a b c d d (51)	305	a a b c b (13)	275	a b c d d (51)	660
7	a b c c c (46)	262	a a a b b (4)	261	a b c c c (46)	469
8	a a a b c (5)	241	a b c c c (46)	207	a a b c b (13)	430
9	a a b b c (11)	173	a a b b c (11)	185	a a a b c (5)	398
10	a a a a a (1)	172	a a a b c (5)	157	a a b b c (11)	358
11	a a b c b (13)	155				
12			a a a a a (1)	114		

〔表 7〕 まったく現れない型

型	No.	老	若
a a b a b (7)			○
a a b a c (8)			○
a b a a b (17)	○	○	
a b a b c (21)			○
a b b a b (27)	○	○	
a b b a c (28)	○		
a b b b a (29)	○	○	
a b c a b (37)	○	○	
a b c a c (38)	○	○	
a b c a d (39)			○
a b c b a (40)	○		
a b c b c (42)	○	○	
a b c b d (43)	○	○	

であることであろう。1人も反応しない型は AとD, AとE, BとD, BとEのいずれかに同じ言い方をする型である。

7. 問題別地域別反応型分布

次に地域によって型の現われ方にどのような特徴があるかを分析した。

県別集計では、調査員個人の傾向と地域別の特徴とを識別できないと考えられるので、東条操編：「日本方言学」(32, 33ページ)によって、全国を東部方言(北海道方言, 東北方言, 関東方言, 東海東山方言), 西部方言(北陸

方言, 近畿方言, 中国方言, 雲伯方言, 四国方言), 九州方言の三つの方言区割に大きく分け、その間の違いを検討した。一例として、問題(5)(形容詞の結び方: 「おもしろい」に対応する言い方), 問題(10)(自分に關する事がらの報告: 「あります」に対応する言い方), 問題(17)(自分をさすことばと指定の言い方: 「わたしのです」), 問題(18)(相手の動作につ

〔表 8〕 問題別・地域別反応型の一例

反応型	問題 地域	5			10			17			18		
		東	西	九	東	西	九	東	西	九	東	西	九
1	aaaaa	6.2%	1.8		4.1	4.5		6.2	2.7	2.4	1.0	0.9	
2	aaaab								1.8				
3	aaaba	5.2	1.8		3.1	3.6	2.4	1.0	2.7		1.0	2.7	
4	aaabb	17.5	16.4	9.8	19.6	10.9	7.3	14.4	10.0	4.9	12.4	9.1	4.9
5	aaabc	1.0	4.5	4.9		3.6		2.1	6.4	2.4		2.7	2.4
6	aabaa												
7	aabab												
8	aabac												
9	aabba	1.0	1.8		2.1			3.1	0.9	2.4			
10	aabbb	20.6	8.2	7.3	23.7	19.1	9.8	21.6	19.1	4.9	19.6	14.5	9.8
11	aaabc	6.2	1.8	4.9	2.1	5.5	4.9	3.1	5.5	2.4	2.1	2.7	7.3
12	aabca												
13	aabcb	1.0	2.7	2.4	4.1	2.7	2.4	3.1	3.6	7.3	4.1	5.5	7.3
14	aabcc	10.0	18.2	14.6	11.3	12.7		14.4	11.8	17.1	12.4	16.4	17.1
15	aabcd	2.1	9.1	9.8	2.1	7.3	7.3	1.0	3.6	7.3	12.4	10.9	4.9
16	abaaa	1.0	1.8		4.1	0.9	2.4	2.1			3.1		
17	abaaab												
18	abaaac				1.0								
19	ababaa												
20	ababbb												
21	ababcb												
22	abacaa				4.1	1.8				2.4	1.0	0.9	
23	abacab							1.0			3.1	0.9	2.4
24	abaccc	3.1	1.8		3.1	0.9	2.4	3.1	4.5	4.9	1.0	3.6	4.9
25	abaccd	1.0	1.8										
26	abbaaa												
27	abbab												
28	abbac												
29	abbba												
30	abbbb					0.9							
31	abbbcb	1.0				0.9							
32	abbbca												
33	abbbcb				1.0		2.4						
34	abbbcc	2.1	0.9		1.0	1.8		2.1	2.7		1.0		
35	abbbcd		0.9	2.4				2.1	0.9	2.4		0.9	2.4
36	abcbaa		0.9			0.9							
37	abcab												
38	abcac												
39	abcad												
40	abcba												
41	abcbb				1.0								
42	abcbb												
43	abcbb												
44	abccaa					0.9	2.4						
45	abccb		0.9			0.9							2.4
46	abccc	4.1	3.6	2.4	8.2	6.4	7.3	7.2	4.5	4.9	3.1	5.5	4.9
47	abccd	3.1	2.7	7.3	2.1	2.7		1.0	0.9	2.4	4.1	1.8	2.4
48	abcda							1.0	0.9	2.4	1.0		
49	abcdb												2.4
50	abcdc	1.0		7.3		0.9	7.3	1.0	1.8	9.8		2.7	4.9
51	abcd	4.1	7.3	7.3	1.0	3.6	14.6	2.1	6.4	9.8	9.3	8.2	7.3
52	abcde	8.2	10.0	19.5	1.0	5.5	4.9	7.2	8.2	9.8	6.2	9.1	12.2
	x		0.9			0.9			0.9			2.1	0.9
	総計	97	110	41	97	110	41	97	110	41	97	110	41

いての言い方：「読みましたか」)の老年層についての集計の結果を示すと表8のようである。

4間を通じて比較的多く現われる型は区画別の現われ方によって、次の三種類に分けることができる。

- (1) 三区画(すなわち全国)共通してよく現われる型：a a b c c型
- (2) 東部に多く九州に少ない型：a a a b b型、a a b b b型
- (3) 九州に多く、東部に少ない型：a b c d e型

西部は東部と九州の中間的な性質を持っており、概略的に、東から西へ移るに従って、使いわけの多い型(dを含む型、abcde型など)が多いのに対し、東部は単純な型(aaaaa型、bを含む型)が多いと言えよう。

8. 結 び

以上本年度は、調査目標の第一「話し相手によって言い方をどのように使いわけるか」について、1人の話し相手に対する言い方に含まれる個々の語形を一応考慮しないで、反応した言い方の全体を単位として反応型を決定し型の構造を分析したが、その結果としては、反応型のうちa a b c c型が年齢層、地域に関係なく、比較的多くの場面でよく現われる型であることがもっとも注目される。

来年度は、さらに語形と反応型との関係を問題別に分析し、同じ語形の地域による待遇上の差、共通語の使用の程度、敬語形の地理的分布など、他の調査目標をも順次明かにしていくつもりである。

(北 村)

地方言語の敬語に関する調査Ⅱ

昭和28年度地方調査員に対する委託調査

A. 調査の目的

地域社会における日常の社会生活の言語を、特に敬語問題との関連のもとに全国的に調査し、その実態を明らかにして敬語問題の解決のための基礎資料を得ることを目的とする。

なお、この調査は昭和28年度に行われたものであって、昭和27年度に行われた同じ題名の調査——地方言語の敬語に関する調査1——とは別のものである。

B. 調査機構

1. 調査員

調査員は昭和28年度地方調査員47名である。

地方調査員氏名

県名	氏名	勤務先	住 所
北海道	五十嵐三郎	北海道大学文学部	札幌市北28条東3丁目
北海道	石垣 福雄	札幌北高校	札幌市北2条西12丁目
青 森	此島 正年	弘前大学教育学部	弘前市袋町20
岩 手	小松代融一	岩手県立杜陵高校	盛岡市加賀野久保田95
宮 城	堀籠 敬蔵	宮城県警察学校	宮城県亶理郡亶理町字新井町65
秋 田	北条 忠雄	秋田大学学芸学部	秋田市保戸野原町 秋田大学学芸学部内
山 形	斎藤義七郎	川崎市立川崎商業高校	東京都墨田区吾嬬町東3ノ44 鈴木善之助方
福 島	一谷 清昭	福島女子高校	福島市松木町52
茨 城	田口 美雄	茨城県立土浦第二高校	茨城県新治郡田余村大字上玉里

栃木	多々良銀男	宇都宮大学学芸学部	宇都宮市住吉町1ノ45
群馬	上野 勇	沼田女子高校	群馬県沼田市810
埼玉	大久保忠国	埼玉大学文理学部	埼玉県北足立郡与野町大戸576
千葉	大岩 正伸	千葉大学文理学部	東京都練馬区東大泉941
神奈川	日野 資純	弘前大学文理学部	弘前市富田町富野69—46福士いね方
新潟	剣持華一郎	柏崎高校	柏崎市本町2ノ873
富山	大田栄太郎		富山市大町富山高枚裏
石川	岩井 隆盛	金沢大学教育学部	石川県河北郡津幡町宇清水水313
福井	佐藤 茂	福井大学学芸学部	福井市湊新町66
山梨	清水 茂夫	山梨大学学芸学部	山梨県中巨摩郡白根町百々3062
長野	青木千代吉	信濃教育会教育研究所	長野県更級郡稲里村中氷鉤1089
岐阜	笈 五百里	岐阜大学学芸学部	滋賀県東浅井郡湯田村山添
静岡	望月 誼三	静岡大学教育学部	静岡市小鷹1
愛知	野村 正良	名古屋大学文学部	名古屋市中千種区徳川山町3ノ44
三重	堀田 要治	亀山高校	三重県鈴鹿郡亀山町南野村851
滋賀	井之口 有一	西京大学女子短期大学	京都市上京区紫野南舟岡町84ノ24
京都	奥村 三雄	京都学芸大学	京都市左京区北白川西町81
大阪	前田 勇	大阪学芸大学	大阪市東住吉区田辺西之町6ノ34
兵庫	和田 実	神戸大学文学部	神戸市垂水区西垂水町神田122
兵庫	岡田荘之輔	温泉町立温泉小学校	兵庫県美方郡温泉町湯
奈良	西宮 一民	帝塚山学院短期大学	大阪府中河内郡繩手町河内920
和歌山	村内 英一	和歌山大学学芸学部	和歌山市真砂町 和歌山大学内教官住宅
鳥取	広戸 惇	島根大学文理学部	出雲市元宮町
島根	岡 義重		島根県簸川郡伊波野村大字富村
岡山	虫明吉治郎	岡山県立操山高校	岡山県上道郡高島村新屋敷
広島	村岡 浅夫	五日市中学	広島県佐伯郡観音村大字屋代121
山口	渡辺 保	山口市白石中学	山口市上金古曾2ノ75
徳島	宮城 文雄	徳島大学学芸学部	徳島県那賀郡今津村島尻952ノ2

香川	近石 泰秋	香川大学学芸学部	丸亀市土器町3936
愛媛	杉山 正世	愛媛県立今治工業高校	今治市松本通2丁目
高知	土居 重俊	高知大学教育学部	高知市彌生町52
福岡	都築 頼助	福岡学芸大学	福岡市原1241
佐賀	小野志真男	佐賀大学教育学部	佐賀市赤松町中館
長崎	西島 宏	長崎大学学芸学部	長崎県大村市植松
熊本	秋山 正次	熊本大学教育学部	熊本市健軍町県営住宅406号
大分	糸井 寛一	大分大学学芸学部	大分県臼杵市海添190
宮崎	岩本 実	宮崎大学学芸学部	宮崎市下水流町190ノ1
鹿児島	上村 孝二	鹿児島大学文理学部	鹿児島市武町965

2. 担当研究室

調査の計画，実施上の事務的連絡，結果の処理は研究第1部第6研究室において次の5人の所員が担当した。

柴田 武 北村 甫 野元菊雄 上村幸雄 山之内り

C. 調査の計画

1. 調査の方法と内容

一定の調査票により，全国で47地点，940人の被調査者について，調査員がひとりひとり面接して，調査票の質問形式に従って調査した。

この調査は，昭和27年度に地方調査員に委託して行った「地方言語の敬語に関する調査I」とは，別の観点から敬語を調査しようとしたもので，昭和27年度に第6研究室の行った「三重県上野市に於ける敬語の調査」におけるフィールド・サーヴェイ（field survey）の方法を部分的に採用した。

そして調査の結果を「三重県上野市における敬語の調査」および，その後ひきつづき第6研究室によって行われた「愛知県岡崎市における敬語の調査」の二つの調査の結果と直接比較できるように，調査の計画の際に配慮されている。（国立国語研究所年報4，地方言語の敬語に関する調査，33ページ以下およ

び、三重県上野市における敬語の調査、38ページ以下参照)

2. 調査項目——調査票の構成

調査票は次の五つの部分に分かれる。

(1) 文化的条件についての調査項目

氏名、性、住所、居住経歴、年齢、本人および世帯主の職業、世帯主との関係、学歴。

(2) 敬語を話す場合の調査項目

日常の社会生活においてだれもが経験しやすいと思われる場面で、敬語をどのように用いて話をするかを調査するもので、絵を見せて場面を示し、絵の中の人物に話すように答えさせる。内容は「三重県上野市における敬語の調査」に用いたものとほとんど同じもので、それと結果を直接比較することができる。13問。

(3) 敬語を聞く場合の調査項目

聞き手として、ひとの使う敬語をどう受けとるかを調査したもので、上野市で幻灯、録音器を用いて集合調査の方法で調べたものと同じ内容のものを絵を見せ、文字を読ませて調査したもの。4問。

(4) 人称代名詞に関する調査項目

敬語使用の一つの指標として、人称代名詞の使用状態を調べることを目的としたもので、一人称代名詞、二人称代名詞の使用の種類、状況を調査したものの。

(5) 敬語その他に対する意見・態度についての調査項目

敬語に対する知識・態度、共通語に対する態度、そのほか言語以外の社会的問題に対する意見・態度を調査したもので、これらが実際の敬語を使う言語行動とどのような関係をもっているかを知ることが目的としている。この種の選択肢法による質問11問。

これら5種類の質問からなる調査(調査票にして半紙半裁12ページ, ほか
に, 調査用の絵と文章)は大体一時間以内で調査することができるものであ
る。また, 調査の実施の細目を定めた調査実施要領(半紙半裁17ページ)を
別に作成した。

3. 調査地点

各府県1地点(ただし, 北海道, 兵庫県は2地点)で, 全国計47地点であ
るが, そのうち大部分の32地点が三重県上野市と同程度の小都市, 10地点が
農村, 5地点が大都市である。地点選定の規準のおおよそは次の通りである。

- (1) 小都市 人口3万~7万。産業別就業人口の全人口に対する百分比, 商
業3~6%, 製造工業7~14%
- (2) 農村 都市との交渉のあまり激しくない普通の農村
- (3) 大都市 人口30万以上の大都市内の小数の町

調査地点名

(a) 小都市

青森県弘前市	千葉県成田市	三重県桑名市	山口県光市
秋田県能代市	新潟県柏崎市	京都府宇治市	徳島県小松島市
山形県米沢市	石川県七尾市	大阪府池田市	香川県丸亀市
福島県白河市	福井県敦賀市	兵庫県豊岡市	愛媛県今治市
茨城県水戸市	長野県飯田市	和歌山県田辺市	佐賀県佐賀市
栃木県栃木市	岐阜県高山市	鳥根県出雲市	長崎県島原市
群馬県伊勢崎市	静岡県焼津市	岡山県倉敷市	熊本県八代市
埼玉県川越市	愛知県春日井市	広島県福山市	大分県臼杵市

(b) 農村

北海道上川郡多寄村	山梨県中巨摩郡百田村	高知県長岡郡大篠村
岩手県紫波郡煙山村	滋賀県愛知郡稲枝村	宮崎県児湯郡新田村
富山県旧上新川郡太 田村(現富山市内)	奈良県磯城郡川東村	鹿児島県揖宿郡今和泉村
	鳥取県西伯郡光徳村	

(c) 大都市

札幌市 仙台市 横浜市 神戸市 福岡市

4. 被調査者

1地点につき20人、全国で合計940人で、被調査者選定の条件はおおよそ次の通りである。

性・年齢・居住経歴・社会的階層の四つの条件を設けた。

性的階層	性別		計
	男	女	
上	5	5	10人
下	5	5	10
計	10	10	20

(1) 年齢 20～29歳まで、敬語問題を問題的に、かつ小規模の調査で効果的につかむために、被調査者を若い層だけに限定した。

(2) 居住経歴 生え抜きのその土地出身者。

(3) 性と社会的階層 一地点20人の被調査者

について、性と社会的階層の条件を右のように組み合わせた。社会的階層の上下は、本人あるいは世帯主の職業的地位の上下(農村では経営規模の大小)および本人の学歴によって定めた。

5. その他

そのほかに調査地点の環境調査を一定の調査票(半紙半裁6ページ)によって行った。これには調査地点の自然環境、社会的環境の調査、方言、敬語の特徴などの簡単な記述などが含まれている。また、調査員は調査実施にともなう所感・申送り事項などを提出した。

D. 調査の実施

1. 計画の立案と準備

昭和28年3月から7月までに、担当所員が計画を立案し、いろいろな準備をした。調査票に盛られた質問はほとんど前年度の「三重県上野市における敬語の調査」などで検討済みのものである。

また、6月12日に研究所において第一回地方調査員全国協議会が行われ、その席で計画の検討がなされた。

2. 調査の実施

昭和28年7月、各地方調査員に調査票その他の調査用資材を配布した。調査は同月より、同年12月までに、全国各地で実施された。

E. 結果の整理

1. 結果の分析

調査票のうち、(2) 敬語を話す場合の調査項目については、その調査結果の分析の一部を地方調査員の手によって行った。それは得られた反応形を敬語のていねいさの段階に従って分類する作業で、「三重県上野市における敬語の調査」で得られた資料などを参考にして行った。

2. 調査票の回収と整理

昭和29年3月20日現在、二つの県を除くすべての調査票および報告書類の回収を終り、調査結果の集計・分析を始めようとしている。

(上 村)

三重県上野市における 敬語調査の集計・分析

A. 集計・分析の経過および担当者

前年度から引きつづき7月まではもっぱら「上野市における敬語調査」の集計・分析に当たったが、8月からは、「岡崎市における敬語調査」の準備および実施の合間に集計・分析をつづけ、10月末に一応の作業を終えた。

今後は「岡崎市における敬語調査」の集計・分析の途次、必要に応じて、補足的な集計を行う予定である。年度を通じて随時下記の担当者が打合わせのために集まり、検討を加えながら、集計・分析を進めた。

担当者は次の通り。

岩淵悦太郎、柴田武、北村甫、野元菊雄、上村幸雄、山之内るり（以上国立国語研究所第6研究室）；林知己夫、西平重喜（以上統計数理研究所）；鳥崎稔（高崎市立大学）；鳥津一夫（横浜市立大学）

B. 分析結果の概要

1. 場面による敬語行動の差

面接調査（昭和27年度国立国語研究所年報—4—。39ページ参照）では、14の場面を設けて、「こういう場合に、あなただったらどう言いますか」というように質問し、反応を全部記録してきた。この各場面の記録された反応形に、一定の基準で、「ていねい」と考えられる順に、段階1、2、3という段階点を与えた。各場面について、段階1が何人、段階2が何人、と出るので、段階点の平均が出せるわけである。今これを、「ていねい」の順に並べると次のとおりである。（平均点の低い方が「ていねい」なわけである。）

順位	問	題	平均点
1	医者に往診を頼む		1.397
2	乗物で席をゆずられてことわる		1.733
3	郵便局で電報用紙をもらう		1.804
4	談事堂に行く道をたずねる		1.837
5	津市で県庁に行く道をたずねる		1.843
6	買いつけの店で荷物をあずける		1.861
7	昔の先生に子供のことについて答える		1.871
8	乗物で傘を忘れて降りて行きかけた人に注意してやる		1.878
9	買いつけの店でもらったおつりが間違っていることを言う		1.958
10	間違って2度電灯料を取りに来た集金人に言う		1.975
11	少し知っている人になにか雨のとき傘を貸す		2.038
12	知らない旅行者から道を聞かれたとき教える		2.103
13	物売りの子にその父親のことを聞く		2.342
14	友人に今夜遊びに来るように誘う		2.401

順位の1と2との間、12と13との間にそれぞれ有意の差がある。

順位14の、友人に遊びに来るように誘う場合を除くと、順位7の、昔の先生に、自分の子供について答える場合を境に、下には、心理的に優位（強い立場）に立つと思われる場面（相手が間違っている場合や、こちらが相手に恩恵をほどこす場合など）が並んでおり、上には、心理的に劣位（弱い立場）に立つと思われる場面（物を頼む場合や、恩恵を受けた場合など）が並んでいる。すなわち、弱い立場に立つとき、ていねいな言いかたが現われ、その逆の場合には、比較的乱暴な言いかたが現われると言いうる。

なお、順位14の、友人に対する誘いの場面は、場面を示す絵が使えず、また「友人」の条件を明らかにしなかったためであろうが、被調査者が、どのような人を頭に画いて反応しているのか、親しい人を想定しているのか、それほど親しくない人を想定しているのか、必ずしもはっきりせず、個人によ

って、相当の差があると考えられるので、以下の集計においては省くことにした。

以下、「順位 i の場面」と言うときは、この順位による場面であることを指すこととする。

2. 社会的要因別の敬語行動の差

各場面で最も多く現われた段階を 0 とし、それよりも「ていねい」と考えられる段階を +1, 「乱暴」と考えられる段階を -1 として、13 場面を、いろいろの要因別に合計して平均を出すと次のようである。

性	男	-0.153
	女	2.825
年齢	15~29	1.485
	30~39	1.339
	40~	1.598
学歴	なし・小学	0.985
	高小・新中	1.205
	旧中・新高以上	2.392
階層	下	0.738
	中	1.220
	上	1.879

以上のうち、男と女との間にだけ有意の差がある。すなわち、有意の差をもって、女は男よりていねいなことばを使うと言える。年齢別には差はあまりなく、ていねいなことばを使うことは、年齢に関係はないと言って差支えない。学歴別・階層別では、有意の差は見られないけれども、傾向的な差はある。すなわち、学歴、階層ともに低い者よりも高い者がていねいなことばを使っている。（ここでは、1と違って、数値の高いほどていねいであることを示す。これを「標準点」と呼ぶことにする。

3. 敬語についての知識

面接調査ではまた、敬語についての知識を調べるために、いくつかの短文について、そのどの部分が敬語であるかを指摘させた。その短文は次の五つである。

- 1 人を尊敬しなければならない。
- 2 一つお待ちください。
- 3 きょうはお野菜が安い。
- 4 ここにあります。
- 5 これはいただいたものだよ。

正しく答えた者に2点、半分答えた者（たとえば2番で、「お待ち」だけを敬語とした者）に1点を与えて、要因別に集計して平均点を出すと次のようである。ただし、全部を「敬語なし」と答えた者には、機械的に1番「人を尊敬しなければならない」によって2点が与えられてしまうので、この者合計24人は集計から省いた。満点は10点である。

性	男	5.158
	女	4.903
年齢	15～19	6.238
	20～29	5.333
	30～39	4.904
	40～	3.991
学歴	なし・小学	3.563
	高小・新中	5.080
	旧中・新高以上	6.203
階層	下	4.533
	中	5.279
	上	5.100

どこの間にも有意の差は見られないけれども、常識を裏書きするある傾向は見られる。年齢別・学歴別がどちらかといえばきいているようである。

4. 敬語についての意見・内省

面接調査のときに、敬語についての意見・内省をいくつか尋ねた。その答のうち、社会的要因内のグループによって分布に差のあるような間についてその答の分布を次にあげておく。(数値は%)

○お宅では家族のかたの間で、敬語を使うことがありますか。それとも家族どうしでは、敬語は使いませんか。

		使う・ときに使う	使わない
性	男	37.7	60.8
	女	43.4	56.6
年齢	15~19	38.1	61.9
	20~29	47.7	52.3
	30~39	29.3	70.7
	40~59	35.7	64.3
	60~	60.0	35.0
学歴	なし・小学	29.6	67.6
	高小・新中	39.4	60.6
	旧中・新高以上	51.9	48.1

○あなたは「貸して(い)だあこ」のように「だあこ」と言うことがありますか。

(「だあこ」「いだあこ」は「ください」ということの上野市独特の方言形)

		ある	ない
性	男	61.5	38.5
	女	65.4	34.6
年齢	15~19	42.9	57.1
	20~29	55.4	44.6
	30~39	74.1	25.9
	40~59	65.5	34.5
	60~	80.0	20.0
学歴	なし・小学	77.5	22.5

高小・新中	65.7	34.3
旧中・新高以上	46.8	53.2

○東京の女の人のなどは、このごろ何にでもオをつけるようです。たとえば、人参のことをオ人参、目鏡のことをオ目鏡と言っています。上野でもこのようにオをつける方がいいでしょうか。それともこのようにオをつけるのはよくないでしょうか。（「ものによる」「どちらでもいい」を省いたので合計は100.0にならない）

		つけた方がいい	つけない方がいい
性	男	17.7	57.7
	女	20.1	40.3
年齢	15～19	19.1	47.6
	20～29	10.8	53.9
	30～39	20.7	58.6
	40～59	26.2	42.9
	60～	15.0	35.0
学歴	なし・小学	29.6	37.0
	高小・新中	19.0	49.6
	旧中・新高以上	10.1	55.7

○家の中でも、年上の人や目上の人には敬語を使わなければならないでしょうか。それとも家の中では使わなくてもいいでしょうか（中間的な「時・場合・相手による」というのは省いた）

		使うべきだ	使わなくていい
性	男	54.6	30.0
	女	64.8	19.5
年齢	15～19	47.6	33.3
	20～29	50.8	27.7
	30～39	53.5	34.5
	40～59	73.8	19.1
	60～	70.0	5.0

学歴	なし・小学	70.4	16.9
	高小・新中	57.7	32.9
	旧中・新高以上	54.4	16.5

○日本語では、場合によって、自分のことを「わたくし」とか「わたし」「ぼく」などと言います。また相手の人のことは「あなた」「あんた」「君」などと使いわけます。しかし、英語ではどんな場合でも自分はI、相手の人のことはyouとさえいいそうです。あなたは日本語も、場合や相手によって使いわけないですむ方がいいと思いますか。それとも、場合や相手によって使いわけた方がいいと思いますか。（「どちらでもいい」というものは省いた）

		使いわけた方がいい	使いわけない方がいい
性	男	55.4	39.2
	女	56.0	37.7
年齢	15～19	38.1	61.9
	20～29	53.8	43.1
	30～39	53.5	41.4
	40～59	67.9	27.4
	60～	55.0	20.0
学歴	なし・小学	54.9	32.4
	高小・新中	62.0	34.3
	旧中・新高以上	46.8	49.4

5. 敬語についての意見と敬語行動との関係

敬語について、ある意見を持っている者が、敬語行動ではどのくらいでいいいさで話すか、ということをも、2のところで述べた意味での平均点（「標準点」）で示してみる。

○家族の間で敬語を	{ 使う 使わない }	1.419
		1.341

○敬語を使うと話が長くなる	{ から減らすべきだ	0.885
	{ が減らせとは一概に言えない	1.348
	{ がかえって増やすべきだ	1.807
○オを	{ つけた方がいい	0.889
	{ ものによってはつけた方がいい	2.562
	{ つけない方がいい	1.244
○敬語は上品だ	{ から使った方がいい	1.369
	{ が使えとは一概に言えない	1.767
	{ が使わない方がいい	-2.000
○人称代名詞は使いわけ	{ るべきだ	1.363
	{ ない方がいい	1.393

意見・内省が行動に反映していると思われるものもある（たとえば、上の「家族の間で敬語を使うか」「敬語を使うと話が長くなるから減らすべきか」「敬語は上品だから使うべきか」）が、中にはかえって逆の関係に立つと思われるものもある（たとえば、上の「オをつけた方がいいか」）。

6. 敬語についての知識と意見との関係

上と同じようにして同じ項目について、意見と知識との関係を見る。数値は、3で述べたものと同じ意味である。

○家族の間で敬語を	{ 使う	5.037
	{ 使わない	5.071
○敬語を使うと話が長くなる	{ から減らすべきだ	4.745
	{ が減らせとは一概に言えない	4.888
	{ がかえって増やすべきだ	5.875
○オを	{ つけた方がいい	4.740
	{ ものによってはつけた方がいい	5.348
	{ つけない方がいい	5.352
○敬語は上品だ	{ から使った方がいい	4.637
	{ が使えとは一概に言えない	5.705
	{ が使わない方がいい	6.545

○人称代名詞は使いわけ	$\left\{ \begin{array}{l} \text{るべきだ} \\ \text{ない方がいい} \end{array} \right.$	4.745
		5.911

前の意見と行動との関係よりも、関係している度合が薄いと思われる。「敬語は上品だから使うべきか」では、使うべきだという意見を引き出すように問題に故意にゆがみを与えてある。そのゆがみに抗して強い自分の意見を出した者が、知識の点でも高くなっていることは注目される。

7. 敬語についての知識と敬語行動との関係

敬語行動である点（2で述べた意味の点）をとった者が、知識の点では平均何点をとっているかを示してみる。

合計標準点	知識平均点
-2	4.783
-1	4.783
0	4.765
1	5.000
2	5.913
3	6.114
4	5.458

わずかながらていねいな表現をする者が知識が高いという傾向が認められるが、これも有意の差を持つほどではない。

8. 敬語段階と表現方法

1で述べた問題のうちいくつかについて、表現方法によって、段階点の平均を出してみると次のようである。

順位6の場面で、アズカッテクダサイのようにクダサイを使うか、チョーダイを使うか、(イ)ダーコを使うか、イタダクを使うか、あるいはこれらを使わないかによって段階点に差が現われるのであろうか。

イタダク	1.183
クダサイ	1.931

チャーダイ	2.000
(イ)ダーコ	1.864
使わない	2.223

ここの段階点は、1のところの意味である。以上のうち、イタダクは、他のものより有意に*ていねい*であり、「使わない」は他のものより有意に乱暴である。「使わない」というのは、コノニモツオチョット、のように言い切ってしまうものであるから、乱暴な点が現われるのも当然であろう。

順位8の場面で、アナタノトチガイマスカのように、チガイマスカを使うのと、アナタノデワアリマセンカのように、アリマセンカを使うのとでは、どちらが段階点が高いであろうか。

アリマセンカ	1.647
チガイマスカ	1.964

アリマセンカの方が有意の差をもっていて*いねい*である。

順位1の場面、順位9の場面において、たとえば、オツリマチガッテイマスのように肯定形で言うのと、オツリマチガッテイマセンカのように否定形で言うのと、どちらが段階点が高いであろうか。

順位1の場面	否定形	1.171
	肯定形	1.650
順位9の場面	否定形	1.717
	肯定形	2.022

どちらも、有意の差をもって、否定形の方が*ていねい*であり、遠まわしな言いかたの方が*ていねい*であるという通説が立証されたわけである。

9. 反応文節数と敬語段階との関係

同じことを言うのにも、短く言うよりも長く言った方が*ていねい*であろうという仮説があるが、この仮説が真であるかどうかを検討してみよう。いくつかの問題ごとに、ある段階点をとった者が、その反応文でどういう平均文節数を示しているかを見ることにする。

順位6の場面

段階点1	5.171文節
2	4.758
3	3.500

順位4の場面

段階点1	7.604文節
2	6.493
3	3.333

順位9の場面

段階点1	5.966文節
2	4.839
3	3.783

順位11の場面

段階点1	5.900文節
2	5.441
3	4.056

ていねいに言った者の反応文節数は、乱暴に言った者の反応文節数よりも多いということは確かに言えるようである。以上の引例の各段階点の平均文節数の間には、どこにも有意の差が見られる。

なお参考のために、性別、年齢別文節数をあげよう。

順位2の場面

性	男	5.406
	女	6.174
年齢	15~19	5.500
	20~29	5.333
	30~39	5.698
	40~	6.383

女は男よりも文節数が有意の差で多い。このことは、この問題だけでなくすべての問題に傾向的に見られる。女の方がおしゃべりである、と言えるわけである。年齢別では、この順位2の場面では40歳以上は他のすべてと有意の差が見られる。すべての場面を通じて、若い者の方が文節数が少ない、という傾向が見られる。

10. 集合調査の結果と面接調査の結果との関係

集合調査（年報—4—、39ページ参照）では、幻灯を見せて場面を与え、録音器でその場面におけることばを聞かせて、そのことばについていろいろ答を求めた。問の種類は大きくわけて三つある。

- 1) その場面でのことばを、その場面にかかわりのない第三者として判断する場合。
（「第三者判断」と称する）
- 2) 幻灯の画面中の人物から言われたときの感じ。（「受ける感じ」と称する）
- 3) ステレオタイプ。後述

1), 2) にはそれぞれいろいろの間の形式がある。以下、この集合調査の結果と面接調査の結果との関係について述べる。

(a) 敬語行動について

上京して議事堂に行く道を聞くのに「ちょっとおたんねしますけど、議事堂はどう行ったらよろしいでっしゃろ」という方言形を使うのは適当か適当でないか、という集合調査の問に対して、適当あるいは不適当と答えた者が、順位4の場面ではどのような平均段階点（1で述べた意味の）をとったかを見してみる。

適 当	2.000
不適当	1.744

有意の差はないけれども、方言形を不適当とした者の方が、同じような場面ではいいねいに言っていることがわかる。

物売りの子に父親のいる、いないを聞くのに、「あなたお父さんいるの」「あんたお父さんいるの」「君お父さんいるの」のうち、どの言いかたが適

当か、という集合調査の間に対する答と、順位13の場面の平均段階点との関係を見よう。

「あなた」が適當	2.273
「あんた」が適當	2.231
「君」が適當	2.486

買いつけの店で荷物をあずけるのに「すみませんけど、あずかっといっていただけませんか」と言うのと「すみませんけど、あずかっといして下さい」と言うのとどちらがていねいか、という集合調査の間への答と、順位6の場面の平均段階点との関係。

「いただけませんか」がていねい	1.852
「下さい」がていねい	1.923

一度払った電灯料をまた取りに来たとき「電灯料だったら、もう払ってありますけど調べて下さい」と言うのと「電灯料でしたら、もうお払いしてありますけど調べて下さい」と言うのとどちらがていねいか、という集合調査の間に対する答と、順位10の場面の平均段階点との関係。

「だったら——払って」がていねい	2.438
「でしたら——お払いして」がていねい	1.964

乗物で席をゆずったとき、その人から辞退されるのに「ありがとうございますですが、次で降りますからいいです」と言われるのと「ありがとうございますですが、次で降りますからよろしいです」と言われるのと、どちらがていねいに感じられますか、という集合調査の間に対する答と、順位2の場面の平均段階点との関係。

「よろしいです」がていねい	1.702
「いいです」がていねい	1.333

乗物で傘を忘れて降りて行きかけて、乗り合わせた中年の見知らぬ男からそのことを注意される場合「あなた、忘れましたよ、この傘」というのと、「あんた、忘れましたよ、この傘」というのと、あなただったらどちらで言

ってもらいたい、という集合調査の問に対する答と、順位8の場面の平均段階点との関係。

「あなた」を言ってもらいたい	1.814
「あんた」を言ってもらいたい	2.133

以上、どれもお互いの間に有意の差はないが、それでも、すべて常識を裏書きする結果が出ているのは注目されよう。

(b) 表現方法について

父親に市役所に行くように言われて行く途中、目上の人からどこに行くか聞かれて答える場面、面接調査で「お父さん」あるいは「父」と反応した者が、集合調査で「父が市役所へ行けと言いました」と「お父さんが市役所へ

面接調査 \ 集合調査	お父さん 父		計	行けと言いました」とのどちらを 適当としているかを見る。両方で同 じ表現を選んだ率を「一貫率」とす ると、一貫率は、 $\frac{9+24}{52}=0.615$ と なる。
	お父さん	父		
お父さん	9	11	20	
父	8	24	32	
計	17	35	52	

同じ問題に、面接調査で「父親が言う」の下線のところを「申しました」「言いました」「おっしゃいました」とそれぞれ言った者が、集合調査で目下の人から言われるのには「父がこちらに来るように言いました」「父がこちら

面接調査 \ 集合調査	申しました	言いました	おっしゃいました	計	こちらに来るようにおっしゃいました」「父がこちらに来るように申しました」のうち どれで言ってもらいたいと思 っているかを見てみた。
	申しました	言いました	おっしゃいました		
申しました	6			6	
言いました	23	9	10	42	
おっしゃいました			3	3	
計	29	9	13	51	

一貫率は0.358で大分低くなっている。

順位7の場面で自分のことを「わたくし・わたし・あたし」「ぼく」「じぶん」と答えた者が、集合調査で「ぼくの子供です」「わたしの子供です」

面接調査 \ 集合調査		集合調査			計
		わたし	ぼく	じぶん	
わたしなど		34	7	5	46
ぼく		4		2	6
じぶん		3	1		4
	計	41	8	7	56

「自分の子供です」のうちどれをていねいと答えたかを集計してみる。

一貫率は 0.607 である。

順位 1 の場面で表現方法として

否定形あるいは肯定形を選んだ者が、集合調査の医者の方で先に医者に言う「お薬いただけますか」と「お薬いただけませんか」とのどちらをていねいなものとして選んだかを見る。

面接調査 \ 集合調査		集合調査		計
		いただけませんか	いただけますか	
否定形		40	6	46
肯定形		20	6	26
	計	60	12	72

一貫率は 0.639 である。

順位 13 の場面で、物売りの子供に対して「あなた」「あんた」「きみ」を使った者が、集合調査で、「あなた、お父さんいるの」「あんた、お父さんいるの」「君、お父さんいるの」のうち、どれを適当としたかを示してみよう。

面接調査 \ 集合調査		集合調査			計
		あなた	あんた	君	
あなた		6	3	5	14
あんた		14	7	17	38
君				5	5
	計	26	10	27	57

一貫率は 0.316 である。

順位 8 の場面で「あなた」「あんた」を使った者が、「あなた、忘れましたよ、この傘」「あんた、忘れましたよ、この傘」のどちら

で言ってもらいたいと答えたかを調べてみる。

面接調査 \ 集合調査		集合調査		計
		あなた	あんた	
あなた		23	3	26
あんた		16	5	21
	計	39	8	47

一貫率は 0.596 である。

上のそれぞれを通じて言えることは集合調査では、ことばをいくつか出してその一つを選ぶというような判断をさせるので、かなり自由な反応を求め

ている面接調査におけるよりも、ていねいと思われる言語形式の方を選択する傾向があるということであろう。

(c) 意見について

目下の人に物を頼むとき、敬語を使うべきか、という面接調査での間に對

面接調査	集合調査		計
	ていねいが適	乱暴が適	
使うべきだ	22	22	44
時・場合・相手による	8	2	10
使わなくていい	7	9	16
計	37	33	70

して、「使うべきだ」「時・場合・相手による」「使わなくていい」とそれぞれ答えた者が、集合調査で社長が社員に物を頼むのに、ていねいに言うのと乱暴に言うのと

どちらを適當としているかを示す。

一貫率 0.443, 矛盾率 0.414

面接調査での、お人參、お眼鏡のようにオをつけるのはいいかどうかという問への返事と、集合調査での、「お人參」という語を入れた会話に対する適

面接調査	集合調査		お三年生		計
	適	不適	いい言いかた	いい言いかたでない	
つけた方がいい	10	4	9	5	14
ものによる	8	3	5	6	11
どちらでもいい		3	2	1	3
つけない方がいい	22	20	19	23	42
計	40	30	35	35	70

当か不適當かの答、および「お嬢ちゃま」「お学校」「お三年生」という語の入っている言いかたが、いいか悪いかの答の關係を見よう。

「お人參」一貫率 0.429

矛盾率 0.371, 「お三年生」一貫率 0.457, 矛盾率 0.343

(d) 要因別について

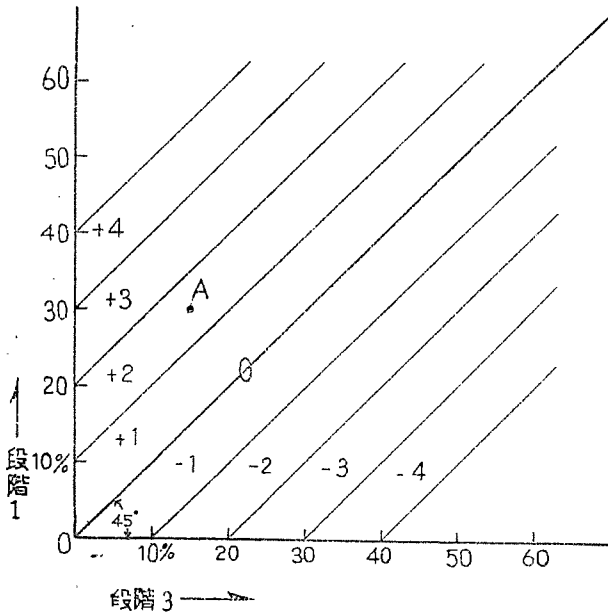
性、年齢、學歷、階層のそれぞれを二つのグループに分ける。たとえば、性は言うまでもなく男・女、年齢等は上・下というように。集合調査の問題の一つ一つの選択肢について、グループの何%がそれを選んだかを見て、二つのグループの間の差を出した。この差が10%以下であれば1とし、以下10%

ごとに、2, 3……とし、6までの code をつけた。選択肢の数は合計75である

	性	年齢	学歴	階層
1	50	35	40	40
2	21	18	19	16
3	3	13	8	15
4	1	4	8	4
5		3		
6		2		

1に1点,以下6に6点までそれぞれ点を与えて計算すると,点の高いものから順に,年齢153,学歴134,階層133,性105となる。この場合は,数値の高いものほど要因としてきいていることになるから,ことばを聞いての判断は,年齢の差で最も左右され,性の違いではそれほど影響を受けないという

ことが言えよう。



面接調査の敬語行動を調べる各問について段階1, 3の占める%によって縦軸に1, 横軸に3をとり, 要因ごとに, グループごとに座標を定める。縦横軸に, 45°に線を引くと座標がこの線の上に乗れば段階1と3とが同じ%を占

めることを示す。この場合を0とし, 上下にこの45°の線と平行に図のように

10%ごとに線を引き、 45° の線から上に10% $> > 0\%$ を+1とし、順に+2……とし、同様に下に-1……とする。ある要因内のあるグループで、段階1をとった者が30%、段階3をとった者が15%だったとすれば、その座標は図の点Aの位置となり、区域は0の線から上に二つ目、つまり+2のところとなる。ある要因内のグループのうち、最大・最小の区域指数(+1, 0, -2など)の差の数値を出し、これを幅と言うことにする。各要因・各問ごとに幅が出るから、各問の幅を各要因ごとに合計すると、要因間の幅の比較ができる。今高い数値の順に、上の集合調査であげた要因だけを見ると性43、学歴36、階層29、年齢27となる。すなわち、要因としては性がきいており、年齢がきいていないことになる。(2のところでも述べたことを別の角度から見たわけである)

整理方法に違いはあるが、以上の二つの調査で、性と年齢との要因としてのききかたが全く逆であることがここに明らかになったことは注目される。このことは、敬語行動では、男女の差の方が決定的であるのに対して、ことばを聞いての判断——これは、ことばについての規範・ノルムを示すもので敬語意識と言おう——では、性による差はなく、年齢で決定されることを示している。常識としては大体認められていたことを実証したと言えよう。

11. 集合調査の結果

(a) 要因内のグループによって差のある問題について

集合調査は、被調査者が少ないので、面接調査でのように要因内をいくつかに分けず、大きく二つに分けた。以下どう分けたかを表示する。

年齢	上	40歳以上
	下	39歳以下
学歴	上	新制高・旧制中以上
	下	新制中・高小以下
階層	上	面接調査できめた上・中階層
	下	面接調査できめた下階層

さて、二つのグループ間で分布の非常に違っているのは、次の 12 問である。(数値は%)

(1) 第三者判断としてこれは適当か。

○ちょっとおたんねしますが、議事堂はどう行ったらよろしいでっしゃる。

	年 齢		階 層	
	上	下	上	下
適	58.3	26.3	36.4	57.9
不適	41.7	73.7	63.6	42.1

○ちょっとおたんねしますが、県庁はどう行ったらよろしいでっしゃる。

	年 齢		階 層	
	上	下	上	下
適	58.3	36.8	45.5	52.9
不適	41.7	63.2	54.5	47.3

県庁ぐらいなら方言形で聞いてもいいと言う者が幾人かいることを示している。

○「お人参」についての会話

	年 齢		学 歴	
	上	下	上	下
適	69.4	44.7	33.3	70.2
不適	30.6	55.3	66.7	29.8

学歴が高いとやたらにいろいろなものにオをつけることに対して批判的である。

(2) 第三者判断としてどちらが適当か。

○イ. 父が市役所へ行けと言いました。

□. お父さんが市役所へ行けと言いました。

学 歴

上

下

イが適	81.5	51.1
ロが適	18.5	42.6

○遅く帰って来た子供を叱る母親のことば。

イ. お前、今ごろまでどうしてたの。もっと早くお帰り。

ロ. あなたは今ごろまでどうしてましたの。もっと早くお帰りなさいね。

学 歴

	上	下
イが適	33.3	10.6
ロが適	66.7	85.1

○社長が社員に仕事を命ずる場面。

イ. 社長のことばが乱暴・社員のことばがへりくだり。

ロ. 社長のことばがていねい・社員のことばが普通の敬語。

	年齢		学歴		階層	
	上	下	上	下	上	下
イが適	19.4	68.4	59.3	36.2	49.1	31.6
ロが適	80.6	31.6	40.7	63.8	50.9	68.4

(3) 第三者判断としてどちらがていねいか。

○イ. 傘持って行きなさい。

ロ. 傘持って行きなはれ。

学 歴

	上	下
イがていねい	55.6	85.1
ロがていねい	40.7	10.6

○急病人が出て医者を呼びに行く場面，医者に頼むことばが，

イ. 短いもの

ロ. 長いもの

	年齢		学歴		階層	
	上	下	上	下	上	下

イがていねい	22.2	52.6	51.8	29.8	41.8	26.3
ロがていねい	72.2	47.4	48.2	66.0	58.2	63.2

○イ. 電灯料だったら、もう払ってありますけど調べて下さい。

ロ. 電灯料でしたら、もうお払いしてありますけど調べて下さい。

年 齢

	上	下
イがていねい	36.1	7.9
ロがていねい	58.3	92.1

(4) 受ける感じとしてこれは適當か。

○東京で道を開いたときに、東京の人が教えてくれたことば——「ここをまっすぐ行けばいいね」

	性		年 齢		学 歴	
	男	女	上	下	上	下
適	22.2	44.7	44.5	29.0	29.6	40.4
不適	77.8	55.3	55.5	71.0	70.4	59.6

○「お嬢ちゃま」「お学校」「お三年生」が入っている文。

	年 齢		学 歴		階 層	
	上	下	上	下	上	下
適	19.5	79.0	74.1	36.2	60.0	21.1
不適	80.5	21.0	25.9	63.8	40.0	78.9

(5) 受ける感じとしてどちらが適當か。

○上野市で旅の者が駅へ行く道を聞くことば。

イ. 長い文

ロ. 短い文

	年 齢		階 層	
	上	下	上	下
イが適當	61.1	42.1	45.5	68.4

ロが適当 38.9 57.9 54.5 31.6

以上に挙げた以外の要因・問題では、要因内のグループの選択傾向が互いに似ているので、ここでは省略することにした。

(b) ステレオタイプについて

ここでいうステレオタイプは、性・年齢・階層を組み合わせて、二人ずつの組を作り、一方が他方に話しかけることばのどれがこの場合適当であるかを答えさせる。たとえば、男・下層・若年の者が、女・上層・老年の者に、男・中層・老年の者が、女・中層・若年の者に、男・上層・中年の者が、女・下層・中年の者に話しかけるという三つの問題で、共通の部分は、「男から女に話す」というところである。そこで上の三つの場面での反応を合計すると他の要因は、それぞれ階層が上中下層、年齢が老中若年の一つずつであるから消去されて、男が女に話すときの状態を示すものが現われる。問題は九つあり、これを組み合わせて、同じようにして下の六つの結果が出て来る。刺激文は九つとも

イ。どちらへおいでますのか。

ロ。どこへおいでんのか。

ハ。どこへいくんか。

であり、どれが適当であるかを選ばせる。なお、 $A \rightarrow B$ で、 A が B に話す、ということを示す。(数値は%)

		イが適当	ロが適当	ハが適当
性	女→男	84.2	14.9	0.9
	男→女	72.8	21.1	6.1
年齢	若→老	79.8	17.6	2.6
	老→若	65.8	22.8	11.4
階層	下→上	86.0	12.3	1.7
	上→下	51.8	40.3	7.9

要因の中で、上段(性で言えば女→男)の分布と下段(同じく男→女)の

分布との分布型が違えば違うほど、その要因が判断の規準としてきいていることになる。その観点から上の表を見ると、階層の上段・下段の差が最も著しく、ついで年齢、性の順になる。すなわち、第三者として、A、B二人の話批判するときは、そのA、B二人の属する階層（その人が上流の人か、下流の人か）がどうであるかということ、ことばに対する批判の規準として最も強く考える、ということである。

12. ま と め

以上のうち、主なものをまとめると、

- (a) 心理的に優位にあるときの方が劣位にあるときより乱暴なことばを使う。
- (b) 敬語行動では、性が最もきいている。
- (c) 10. の (d) で述べた「敬語意識」では、年齢が最もきいている。
- (d) 二人の間の話しかたを最も強く規定するのは階層であるはずだ、と考えられているようだ。

ということになる。敬語はこのように関係するところが非常に複雑である。どの面から敬語を見るかによって、要因のききかたが違うわけである。そこで、岡崎市の調査で、この複雑な敬語の解明を更に徹底的に行おうとした。

これらに比べると、敬語についての知識、敬語についての意見などは、あまりきわ立った結果が出ていない。この点については、あるいは方法を検討する必要があるかも知れない。岡崎市の調査は、この点も考慮して計画が立てられた。

(野 元)

愛知県岡崎市における敬語の調査

A. 目 的

昭和27年度の三重県上野市における敬語調査と同じように、地域社会における敬語行動・敬語意識の実状を明らかにすることによって、敬語行動を複雑にしている原因を社会心理学的に追及し、敬語行動を簡素化する方策を考えるための科学的資料を得ることを目的とする。

B. 調 査 の 機 構

昭和27年度に引き続いて、文部省の科学研究費交付金（総合研究）の交付を受け、（敬語の社会心理学的研究——代表者：西尾実）第1部第6研究室を中心に、所外の社会学者・心理学者・統計学者と共同研究の形で調査した。現地の調査に実際に参加した者は次の通りである。

岩淵悦太郎，柴田武，北村甫，野元菊雄，上村幸雄，山之内るり（以上，国立国語研究所），島崎稔（高崎市立短期大学），島津一夫（横浜市立大学），林知巳夫，西平重喜（以上，統計数理研究所）

C. 調 査 地

調査地として愛知県岡崎市を選んだおもな理由は次の通りである。

- (1) 被調査者のサンプリング，集合調査などを含むこの種の調査を行うのに適当な大きさの都市である。ちなみに，旧市内の15歳以上の男女（これがわれわれの調査対象）は4,730であった。
- (2) 予備知識がなくても理解しがたいほどではない方言の行われている地域である。

- (3) 特に市民の協力が得られやすく、集合調査が成功しそうな地点である。ちなみに「日本人の読み書き能力調査」のときの集合率は96.3%であって、この程度の大きさの都市の集合率としてはきわめて高い。

D. 課題と仮説

場面による敬語行動の変異はどのように複雑であり、そして、それは社会的諸条件とどのような関係を持っているか。

昨年度の調査から、われわれは次のような仮説をたて、これを今年度の調査によって検証することを考えた。

- (1) 一般に、「ていねい」と認められる敬語行動を規定する社会心理的条件として最も著しいのは性であって、それに比べて、学歴、階層、年齢はそれほど著しくない。
- (2) それに対して、敬語意識を規定する条件としては、年齢が最も強く働き、それに比べて学歴、階層、性はそれほど強くない。
- (3) 一般に、心理的に劣位（弱い立場）に立つと思われる場面ほど「ていねい」と認められる敬語行動が見られる。
- (4) 一般に、「ていねい」過ぎると思われる敬語行動に抵抗を感ずることはあまりない。

以上のことから、敬語行動と敬語意識とのくい違いというものに焦点を置いて、その実状をさらに明らかにすることを目指し、また、敬語行動・敬語意識を規定する条件を個人だけでなく、集団（グループ）全体がかもし出すものにも求めようとした。

E. 調査の計画と方法

1. 敬語行動の観察調査

地域社会（コミュニティ）における敬語行動を主として観察したが、アソ

シエーションについても二、三観察を試みた。

地域社会における敬語行動については、まず、昨年度とほぼ同じ13の場面（「友人に今夜遊びに来るように誘う」場面を除いた13の場面）について、一定の質問を発して、口頭による回答を求めるという方法で、話し手としての言語行動を観察した。250人のサンプルを戸別に訪ねて、面接によって調べた。面接者による被調査者の言語行動の違いを考慮して、面接者の性・年齢・服装などをできるだけ一定にするとともに、なお、面接者を変えるという意味で、現地の大学生（愛知学芸大学）に依頼して、200人のコントロール・サンプルについても調べた。＜面接調査＞

面接調査で記録される言語行動（言語形式）はかなり意識されたもので、純粋な言語行動とは言いにくいので、同じ場面でも可能な限り、純粋な言語行動を観察することを計画した。その第1は、完全に純粋な言語行動で、たとえば、電信電話局の窓口で終日張り込んでいて、「電報用紙をもらう」ときの言語行動を気づかれぬように録音した。＜張り込みの場面録音調査＞

張り込みでは、話し手の条件はそこから見えるものしか記録できないし、張り込みの可能な場面は13場面のうちの2、3でしかないので、あらかじめ定めた条件（性、年齢、階層を組み合わせた12種の条件）に合う市民12人に依頼して、やはり指定の場面に来て、指定の言語行動を演じてもらい、それを気づかれぬように録音した。この場合も、電信電話局の窓口がその場面としてとりあげられた。＜引き回しの場面録音調査＞

上の調査の妥当性を確かめるために、面接調査によって得られた資料を分析して、同じ場面における二つないし四つの言い方を、スライドで場面を示しつつ、録音の再生によって与え、「あなたならどの言い方をするか」という教示のものに反応を求めた。これは一定の会場に、面接調査と同じサンプル250人の集合を求め、調査票に記入するという方法によって調べた。なお、集合率69.2%。＜集合調査＞

集合調査では、さらに、スライドの画面の人から話しかけられるとして、「あなたならどの言い方で言ってもらいたいか」という教示のもとに反応を求めた。これも面接調査と同じ 13 場面のうち、調査可能な 8 場面について調べた。また、面接調査と同じ 13 場面のうち、調査可能な場面について、スライドの画面のなかの対話を、第三者として、「あなたならどう感ずるか」を調べた。

以上は、地域社会における敬語行動が調査の対象になっているが、アソシエーションにおける敬語行動についても次のようなことを調べた。まず、市役所、工場、大商店などにおける上役と下役との対話を、敬語行動の観点から録音し（張り込み）、さらに、集合調査において、社長と社員との対話、教室での先生と生徒の対話などを、敬語行動の観点から第三者としての適・不適の判断を求めた。

以上は、いわゆる13場面を種々の角度と種々の方法とによって調べたものであるが、この他に、話線における抵抗がどこにあるかということを手掛り言にして敬語意識を調べてみた。たとえば、敬語について問題となるような方を含む 2 人の対話を、スライドで場面を示しつつ聞かせて、「おかしいと感ずる」箇所の反応をアナライザー（反応分析機）を使って調べた。〈アナライザー・テスト〉

2. 対話の実験的調査

敬語行動を規定すると考えられる諸条件（社会的地位の上下関係、社会心理的距離、年齢差、性別関係など）の一つだけ違って、あと全部同じような 2 人ずつのグループを 28 組実験的に作って、互に対話をさせ、それを録音し、また、特別の装置によって非言語行動も観察・記録した。これによって、社会・心理的条件の違いが敬語行動（非言語行動を含めて）のどのような違いに対応するか、どの社会・心理的条件が敬語行動の最も著しい違いをひき起こすかを明らかにすることを考えた。また、2 人の対話を途中で他の 1 人を

加えた3人の会話にして、グループの変化が言語行動のどのような変化として現れるかなどを究明することも考えた、〈グループ・ダイナミックス〉

3. 言語的条件, 社会・心理的条件, 敬語に対する見解・知識・意識の調査

面接調査のサンプル250人を得る前に、1000人のサンプルについて、戸別に調査票を留め置いて、基礎的な社会・心理的条件（職業と職業上の地位・学歴・階層帰属意識・交際とコミュニケーション・社会的態度など）を調べ、実は、その結果によって250人をサブ・サンプルした。〈社会生活調査〉

面接調査の際には社会意識とともに敬語に対する見解・知識・意識を面接によって調べ、さらに、集合調査では、主として記入法によって、いわゆるパーソナリティを調べた。別に、税額などの調査とともに、町総代などに依頼して社会階層の判定調査を行うなど、このようにして、被調査者個人個人の社会・心理的条件を調べあげるように努めた。〈パーソナリティ調査・階層調査〉

グループ・ダイナミックス、場面録音のそれぞれの被調査者たちについても、上と同じ調査をできうる限り行った。

さらに、面接調査の結果得られた言語形式を「ていねいさ」の順に順序付けることを有識者について試みて、敬語の段階意識を明らかにする資料を得、また、今度の調査の最初に、岡崎方言の敬語形式を体系的に明らかにしておいた。〈敬語の段階調査〉〈方言調査〉

F. 調査の経過

以上の諸調査は、調査担当者の5回にわたる現地出張によって行われた。現地では、愛知学芸大学、岡崎市役所の協力を得た。

第1回 9月1日～11日（86人日——調査担当者の実働出張人日、以下同じ）方言調査、被調査者のサンプリング、場面録音調査、グループ・ダイナミックス

第2回 10月5日～10日（12人日）社会生活調査、場面録音調査

第3回 10月23日～30日（52人日）面接調査

第4回 2月16日～20日（20人日）階層調査，グループ・ダイナミックス

第5回 3月6日～16日（31人日）集合調査，アナライザー・テスト

G. 集計・分析

3月末現在，集計を開始したばかりである。アナライザー・テストの集計だけは完了した。

（柴田）

文字言語の学習負担についての研究

A. 前年度の調査研究の概要

前年度は小・中学校の正常な児童生徒を対象に、児童生徒の示す読み（特に音読）への抵抗、困難、欠陥の種類および推定される原因の調査を研究目的として調査を実施した。そのため、

- 1 調査表による全国調査
- 2 録音器による実験調査

を合わせおこなった。

調査表による全国調査は、調査表を各都道府県につき中学校1校、小学校2校の割合で郵送し、児童生徒の実態を「読みの不振の種類」「読みへの態度」「読みの困難の種類」「読みの欠陥または不正な習性」の各項目ごとにあげられた傾向にチェック式に記入してもらい、その傾向をみた。

録音器による実態調査では、さしあたり対象を小学校1年生から6年生までにかぎり、音読の障害の種類をできるだけあまさず発見することを目的とした。このため、東京都内9校の小学校と地方2校の小学校を協力校として依頼し、一学級を大まかに国語学力の点で上、中、下の3グループに分け、各グループごとに2～3名から4～5名ずつを選び出して被調査者とし、調査をおこなった。学校と被調査者の人数は次のとおりである。（表1）

録音した児童生徒の音読を再生しながら、あらかじめプリントしてある調査用紙に、いちいちの読みあやまりに対して所定の符号を記入した。（表2に1録音テープを聞いて調査用紙に記入する符号と記入の実例を示す。）

このようにして調査された読みあやまりは、読みあやまりの種類別にいちいちカードに転記して整理した。

〔表 1〕

協力学校および被調査児童数

略号学 校 名	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	計
a 東京都 戸塚 第三小	15						15人
b " 落合 第二小				6			6
c " 高井戸第四小	8	8	8	8	14	8	54
d 千葉県市川市真間小			6				6
e 東京都 真土 小		8					8
f " 四谷 第六小	8				15		23
g " 東戸山 小				15		8	23
h " 桃井 第一小		15					15
i " 淀橋 第一小			15				15
j 山梨県甲府市相生小					27		27
k 長野県長野市城山小			30		23		53
計 11 校	31	31	59	29	79	16	245人

B. 本年度の研究目標

本年度は前年度に引きつづいて、児童の音読へ示す抵抗、困難、欠陥の種類および推定される原因をみつけるため、次のような目標をたてた、

カード化された材料と録音テープを用いて、音読にあらわれた各種の障害の原因分析をおこなう。つづいて、見出された諸原因の妥当性を検定するために、それらの原因の組合わせによる音読材料をつくり、実験的調査をする。

C. 調査研究の担当者

平井昌夫

上甲幹一

寺島 愛

D. 調査研究の実施概要

原因分析のためには前年度に引きつづいて、なお一層読みあやまりの種類、の整理や推定される原因について検討をする必要があることを認め、カード化した材料約 6,000 枚と録音テープ 30 分巻き 29 テープ、それに観察表を

〔表 2〕

1. 文字の読みがわからない…………… ×
2. とぼし読みをする…………… □ □
3. おきかえ読みをする…………… 具体的に記入
4. つけ加え読みをする…………… (具体的に記入) \wedge $<$
5. くりかえし読みをする…………… } ~~~~~
6. ひろい読みをする…………… | ---
7. 意味を無視して休止する…………… — |
8. 途中でためらう…………… || =
9. 句読点を無視して読む…………… \wedge $>$
10. アクセントがちがう…………… ,
11. はじめまたは終りの発音がはっきりしない…………… ?
12. 読みが著しく速くなったり遅くなったりする…………… f または S
13. はじめ読みまちがえ、のち正しく読みなおす…………… (具体的に記入)
14. 唇読みをしたあとで普通に発音する…………… } K K
15. 記入のひらがなは表音的に用いる。ただし促音が読めない場合は つ、促音に読んだ場合は ツ とする。

(記号が二つ並んでいるばあいは、左がわは横書き、右がわはたて書きのものに用いる。)

めだかすくい
 まさおさんが すくいまし
 た。 \wedge $<$
 めだかが いっぴき
 はらってました。
 はいりました。
 「はいった、はいった。」
 と、ゆきこさんが いいまし
 た。
 みちおさんが
 すくいました。
 めだかは すうつと
 にげました。
 「にげた、にげた。」
 と、すみこさんが
 いいました。

参考にして、こまかい分析や考察を加えた。その結果の概要は以下に述べるとおりである。

E. 調査研究の整理

1. 音読にあらわれた障害の種類

音読にあらわれた障害の事例を類型に整理するにあたって、あらかじめどのような類型を立てるかということが問題になる。読みの障害の事例を見出すために、いちおうの種類分けすなわち分類の基準を仮定して作業をすすめたが、具体例をいちいちぎんみしてみると、幾多の点で分類の基準に修正をおこなう必要を感じた。

これまでの研究を調べると、音読を手がかりとする読みの障害の調査研究では、アメリカなどではだいたい次の項目が分類の中心をなしている。

- (1) 音読の速さ
- (2) 発声、発音、調子の不自然
- (3) 文字、語句、行の省略
- (4) 文字、語句、行の挿入
- (5) 文字、語句、行のくりかえし
- (6) 文字、語句、行のおきかえ
- (7) ひろい読み
- (8) 文字、語句の読めないこと
- (9) 音読の不自然な休止
- (10) 音読の全般的な態度

これらの項目を参考にして、事例を集めるための障害の種類として、次のような項目をあらかじめ決定のうえ、調査研究を実施した。(昭和27年度国立国語研究年報—4—, 59p.)

1. 具体的な障害の種類

- (1) 似かよった文字発音のときに、ちがった語音に読みちがえる

- (2) 同じ文字, 単語を繰返して読む
- (3) あともどりして読む
- (4) 別な単語や句で読みかえる (全く別のもの)
- (5) 行, 文字, 単語をとばして読む
- (6) 活用する語尾を読みちがえる
- (7) 意味を無視して音節や単語で切る
- (8) むずかしい語句を読もうとしてその前でためらう
- (9) 句読点を無視して読む
- (10) 語句の始めや終りがはっきりしない
- (11) 余分な単語をつけ加える
- (12) 部分的に読む調子が早くなったりおそくなったりする
- (13) アクセントのはっきりした誤り
- (14) ひろい読みをする
- (15) 始め読みちがえ, 繰返し読みで正しく読む
- (16) 読めなかった文字, 語句 (漢字)
- (17) " " " (ひらがな)
- (18) 似かよった語句で読みちがえる
- (19) 格をあらわす助詞をよみちがえる
- (20) 全く別の語音で読みちがえる
- (21) むずかしい発音の語句を読みちがえる
- (22) 漢字を他の音または訓で読む
- (23) 何度も読みちがえ, 最後は正しく読む
- (24) 音節を入れかえて読む
- (25) はじめ唇読をして, 次に発音する
- (26) 特に音便が正しく読めない

2. 総合的な考察において表われた障害の傾向

- (1) 休止したりためらったりすることが多い

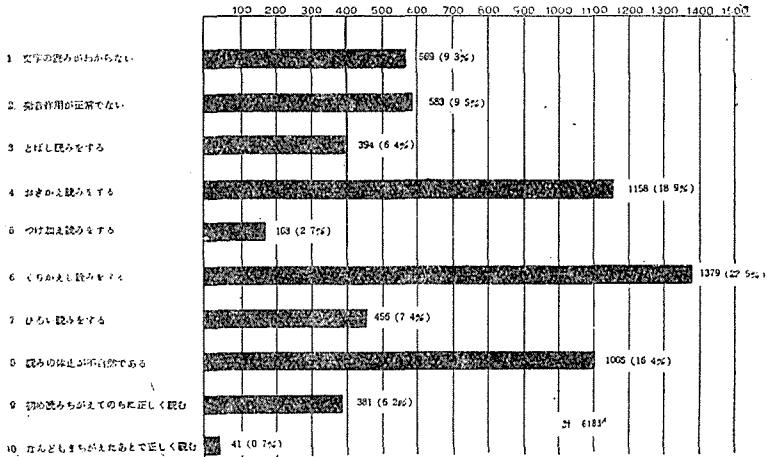
- (2) 内容にそぐわない調子や抑揚で読む
- (3) 呼吸の仕方が不正である
- (4) 声が高すぎる
- (5) 声が低すぎる
- (6) やさしい単語を読みちがえる
- (7) 意味に関係のうすい単語を読もうとしない
- (8) むずかしい単語を読もうとしない
- (9) むずかしい単語にであうと声が急に小さくなる
- (10) 読みが速すぎる
- (11) 読みがおそすぎる
- (12) 区切りが多い
- (13) 特に繰返し読みが多い
- (14) 特に読みかえ読みちがえが多い
- (15) 発音が不明瞭である
- (16) 特にとぼし読みが多い
- (17) 自信のない読みぶりである
- (18) 内容を理解しながら読んでいかない

このような基準で集めた事例を一つ一つ検討しながら、基準そのものを修正する必要を認め、第1次の修正をした基準によって事例の分類がえをおこなった。しかし、その結果もさらに修正する必要を認め、第2次の修正を加えて、次のような11の大項目にわけた。そしてなるべく障害の原因が推定されやすいような分類にしたいと考えて、それぞれの大項目のなかのこまかい分類は、機械的に一律にすることをやめた。

また、同じ種類の事例があまり多すぎる場合には、見やすいということを考えて、こまかい分類をした部分もある。

新しい分類基準による大項目と、それぞれの事例類(事例総数 6, 151)を表示すると、次のようになる。(表3)

〔表〕 音読の障害の種類と事例数



2. 音読にあらわれた障害の種類と具体例

最後の分類によって、音読の障害の種類とそれぞれの具体例を次に一つあてかかげる。カギカッコでかこんである項目は、この調査研究では事例が見出せなかったが、今後の研究のために項目だけかかかけておいたものである。

音読にあらわれた障害の種類と具体例（各一例ずつ）

{ A, B, C——は学校名の略号
 上, 中, 下は国語能力の程度
 1, 2, 3は児童数

(注) 印刷の都合上、記録した際のいちいちの符号はつけない。——の部分か、読み誤りの個所である。ただし119頁(表2)の3, 4, 13, 15は具体的に記入した。たてに入っている棒は、その個所から別行になっていることを示す。

1. 文字の読みがわからない。

(1) ひらがな

めだかが いっぴき | はいりました。 (C下2) 1年

(2) かたかな

「トン, トン トン」 | (E下1) (C下1) 2年

(3) 漢字

ゆきだるまの | 形が できました (C上2) (C中4) (D中2)
 (C下2) (D下1) 3年

2. 発音作用が正常でない

〔(1) 不自然な音声で読む〕

(2) 訛音で読む。

(a) 「ひ」を「し」で

わたくしをひざのうえにのせた。(K上1) (K中2) (K下2) 5年

(b) その他の訛音で読む。

いっしょうけんめい、練習を～(K中1) 3年

(3) 幼児音で読む。

すみこさんが いました。(A下2) 1年

(4) アクセントがちがう。

のどを見たりしていられましたが、(C中1) (C下1) 4年

〔(5) イントネーション(口調)がちがう〕

(6) 初めまたは終りの発音がはっきりしない。

(a) 抵抗を感じる文字が

母からおそった。(J中1)(J下2) 5年

(b) 抵抗を感じる単語が

かいばおけを たたきました。(H上1) (E中1) 2年

(c) 助詞が

はくしゅが、おこりました。(C下2) 4年

(d) 文末が

うしを 見に いきました。(H下1) (E下1) 2年

(e) その他が

いっぴき はいりました。(F下2) 1年

(7) 唇読をしたあとで普通に発音する。

めだかは すうっと にげました(C中4) 1年

(8) 読みが著しく速くなったり、遅くなったりする。

(a) 読みが速くなる。

口をうごかしています。(E下1) (C下1) 2年

(b)読みが遅くなる。

ぼくは、いちろうさんと、(C中1) 2年

(9) 音節の発音が正しくない。

(a)長母音を表記する「う」をそのまま機械的に読む。

ちちを、おいしうそうに (C中2)(H下4)(E下3)(C下1) 2年

(b)つまる音を不正に読む。

「はいった、はいった。」(C中1)(A下1)(C下1)(F下1) 1年

(c)はねる音を不正に読む。

「シュン。シュン。」(C中2)(G下4) 4年

(d)よう音を不正に読む。

こうしは、きょんととして、(C中3)(H下2)(C下1) 2年

(e)清音と濁音を反対にして読む。

ひとりはかけられるぐらいあ ~ (C上1) 6年

(f)その他の音節を不正に読む。

「はいった、はいった。」(C下1)(F下1) 1年

3. とぼし読み(省略)をする。

(1) 文字をとぼして読む。

(a)抵抗のある単語のうちの文字を

あちらからも こちらからも (K中1)(I中1)(I下1) 3年

(b)抵抗のある漢字を

これから 学芸会を します (C下1) 4年

(c)ほかの単語を読もうとして

「わたくしたちは、これから…… (K下3)(I下1) 3年

(d)接頭辞「お」を

「では、お荷物を持ちましょう。」(C上1)(C下1) 6年

(e)発音しにくい部分の文字を

と、おっしゃいました。(G下1) 4年

(f)接尾辞「さん」「たち」などを

まさおくんたちは、(K中3)(I中1)(K下2) 3年

(g)つまる音の「つ」を

大空を飛び去っていった。(J上1)(J中1)(J下3)(K下1)(F下1) 3年

(h)口調で機械的に

足が しっかり しないので しょう。(H上)(C中2)(E中) 2年

(i)行かえの部分の文字を

わたくしのおさない心にし みこませた。(K下1) 5年

(j)文末の文字を

できないのもあります。(K下1) 3年

(2) 単語をとばして読む。

(a)文の意味を変えない単語を

「ワアッ」という声が聞こえた。(C上1)(C中1)(C下1) 5年

(b)文の意味を変える単語を

たかしくんは、元気な 声で いいました。(C下1) 4年

[(c)文の意味は変わらないが、ほかの単語に読もうとして]

(d)文の意味が変わって、ほかの単語に読もうとして

うしを 見に いきました。(H下1) 2年

(e)抵抗のある単語を

今度こそはと、全力をつくした。(C中1) 5年

(f)助詞を

あちらからも ちこらからも (I上1)(I中1)(K下1) 3年

(g)文末の単語を

「トン、トン トン。」と (E上1)(C中1)(H下1) 2年

(3) 文節をとばして読む。

かるい気持で歌をうたう時ですら、(J上1)(F下1) 5年

(4) 句をとばして読む。

しろもうれしそうに ゆきの上を～(C中1) 3年

(5) 行をとばして読む。

まさおさんが すくいまし た。めだかが～(F下1) 1年

4. おきかえ読み(代置)をする。

(1) 別の音節で読む。

(a) 発音の似かよった音節で

ゆきだるまの形が〜(D上1) 3年
で

(b) 文字の形の似かよった音節で

「よく見てごらん」(H中1)(C下1) 2年
し

(c) 全く無関係な音節で

ささやかなすまいからすがであった。(K下1) 5年

(d) 漢字を他の音または訓で

「庭の千草」(F上2)(F中1)(J中1)(F下1) 5年
せん

(e) 音節の順をおきかえて

あわただしく大空を飛び去っていった。(J上1)(F中1) 5年
だた

(2) 別の単語で読む。

(a) 発音の似かよった単語で

あわただしく大空を飛び去っていった。(K上1)(J下1) 5年
あお

(b) 漢字の形の似かよった単語で

相手は五年酉組である。(C上1)(C下1) 5年
酉

(c) 文字群の形の似かよった単語で

みちおさんが(A上1)(A中1)(A下1)(F下1) 1年
みちこ

(d) 修飾語の語尾を変えて

ひとつ大きく息をしました。(G上1)(G下1) 4年
な

(e) 動詞の語尾を変えて

ひざの上にのせた。そして(F中1)(F下1)(K下1) 5年
て

(f) 助詞を別の助詞で

おじさんが、トン トン〜(H上3)(H中1)(H下1) 2年
は

(g) 意味が似かよった単語で

「にげた、にげた。」(C上1)(F中1)(F下1) 1年
にげました

(h) 全く無関係な単語で

まさおくんの 顔 を見るなり (G中1) (G下1) 4年

(i) 単語の順をおきかえて

場所を こうたい して, (C下1) 5年

(j) 別の行の音節や単語で

目 を小さくして, (E上) 2年

おや (前の行の初めの文字)

〔(3) 前の行全部を読む。〕

5. つけ加え読み (挿入) をする

(1) 音節をつけ加えて読む。

(a) ほかの単語のつもりで読もうとして

きょ と んとして, こちらを見ました。 (C中) (H中2) (H下5) 2年

(b) 機械的な言いちがい

空気は すみ, (F中) 5年

エー

(c) ていねいな「お」をつけて

「みちおくんが, お 友だちと, (I中1) (I下1) 3年

(2) 単語をつけ加えて読む。

(a) 助詞を

どうしてもかけようと は しません。 (C中1) 6年

(b) 間投詞を

おどる ところが え かわいいね。」 (K下2) (I下1) 3年

(c) 文脈に関係のある単語を

それが わたり 鳥である (K下1) 5年

わたくし は

(d) 機械的な言いちがいを

という, と 歌を 読みました。 (C下) 4年

6. くりかえし読み (くりかえし) をする。

(1) 文字をくりかえして読む。

(a) 単語の初めの文字を

す みこさんが いました。 (C中1) (F中1) (C下1) (F下1) 1年

(b) 単語の中間の文字を

と、かいばおけを たたきました。(E中1)(E下1) 2年

(c) 単語の終りの文字を

めだかは すうとにげました。(F下1) 1年

(d) 前の単語の終りの文字とあとの単語の文字を

あちらからも、こちらからも(K下1) 3年

(e) 単語とその前後の文字または単語を

かるい気持て歌をうたう時ですら (J中1)(K中1) 5年

(2) 単語をくりかえして読む。

(a) 文の初めの単語を

まさおさんが すくいました。(C中1) 1年

(b) 文の中間の単語を

夕暮れの庭にいすを 出してすわり(J中1)(J下1)(F下1)(K下1) 5年

(c) 文の終りの単語を

会場はいっぱいになりました。(I下1) 3年

(d) 助詞を

まさおくんはねむりからさめました。(G上1) 4年

(3) 文節や句をくりかえして読む。

(a) 漢字ではじまる文節や句を

数わの鳥があわただしく～(K中1)(F下1) 5年

(b) ひらがなではじまる文節や句を

ねえさんがまゆげや 目をいろいろに～(C中1)(D上1) 3年

〔(4) 同じ行をくりかえして読む。〕

〔(a) 行の初めの部分を〕

〔(b) 行の終りまでを〕

7. ひろい読みをする。

(1) 固有名詞を

ゆきこさんが いいました。(F下1)(A下1) 1年

(2) 文字を

かい**ば**おけを たたきました。(H中1)(H下1) 2年

(3) 単語を

まさおくんは ねむりからさめました。(G下1) 5年

(4) 文節を

母は学校のころに習った歌だといって (F下1) 5年

(5) その他

わたくしを**ひ**ざの上**に**のせた。(J下1) 6年

8. 読みの休止が不自然である。

(1) 意味を無視して休止する。

(a) 単語のなかで

みちおさんが すくいました。(A中1)(A下1) 1年

(b) 文節のなかで

足がしっかりしないので しょう。(C上1)(H上3)(E上3)(C中1)(H中2)
(C下2)(H下7)(E下4) 2年

(d) その他

みんなでおどるところが (C中3) (C下1) 4年

(2) 抵抗のある単語の前でためらう。

(a) 漢字ではじまる単語の前で

母は学校のころに習った歌だといって (J上2)(J下2)(F下2) 5年

(b) 固有名詞の前で

いいました。みちおさんが (A上1) 1年

(c) その他

ささやかなすまいであった。(J上2)(F上1)(J中1)(F中1)(J下3) 5年

(3) 句読点を無視して読む。

(a) 「とめ」を無視して

～では、これから 始めます。」たかしくんは、元気な 声で いました
(I上1)(I下4) 3年

(b) 「くぎり」を無視して

「おじさん、こうしは」と、ききました。(H中1)(H下1)(C下1)(E下4) 2年

9. 初め読みちがえてのちに正しく読む。

- (1) 正常でない発音作用のあとで

あたたかくしてねていたらよくなるよ。(G下1) 4年

- (2) とぼし読みのあとで

かいばおけを たたきました。(H中1) (E下1) 2年

- (3) おきかえ読みのあとで

あちらからも こちらからも はくしゅ (B中1) 4年
あちらこちらもこちらも

- (4) つけくわえ読みのあとで

声をそろえて送っていただきました。(G上1) 6年

- (5) くりかえし読みのあとで

たかしくんは、元気な声でいいました。(B下1) 4年

- (6) ひろい読みのあとで

こっこくと自然は色をかえ (F中1) 5年

- (7) 不自然な休止のあとで

どうしてもかけようとしません。(G下1) 6年

10. なんどもまちがえたあとで正しく読む。

と、かいばおけを たたきました。(C中1) 2年

3. 音読にあらわれた障害の推定される原因

以上の具体例から、児童生徒が文字言語を学習する場合の抵抗、困難、欠陥に対する原因はさまざまに予想されるし、一つの障害に対して一つの原因があるとは限らない。多くはいくつかの原因がかさなって具体的な事例があらわれる。それぞれの事例について予想される原因を推定し、その結果を

- (a) 児童生徒自身の側の原因
- (b) 文字言語の側の原因
- (c) 学習指導の側の原因

の三つに大きくわけて整理した。

なお、それぞれの事例と、推定される原因との関係についての分析には、

さらに検討を加える必要があるので、次の機会に報告する予定である。

音読の障害の予想される原因

1. 児童生徒の側の原因

- (1) 視力が弱い
- (2) 視野がせまい
- (3) 声音器管に欠陥がある
- (4) 呼吸のしかたが不正である
- (5) 字形を見分ける力がとぼしい
- (6) 眼球運動がなめらかでない
- (7) 眼球運動と発音作用との調節ができない
- (8) 知能が低い
- (9) 知能が高すぎる
- (10) ことばと思想とを結びつける力がとぼしい
- (11) 求知心に欠けている
- (12) 記憶力が弱い
- (13) 語いが不足している
- (14) 単語の発音を不正確に記憶している
- (15) 集中力がない
- (16) 神経過敏のためあがってしまう
- (17) 落ちつきに欠けている
- (18) 自信がない
- (19) 読むことの経験が少ない
- (20) よく知っている使いなれたことばで読む
- (21) 一字一字読む習慣がある
- (22) 幼児音、訛音が残っている
- (23) 経験がとぼしい
- (24) 読む力が全般的におくれている
- (25) 前日の睡眠不足

2. 文字言語の側の原因

- (1) 未習得の文字である
- (2) 発音しにくい文字である
- (3) むずかしい字体の文字である
- (4) 似かよった字形をもつ文字である
- (5) 似かよった発音をもつ文字である
- (6) 似かよった意味をもつ文字である
- (7) 二つ以上の漢字が重なってできた熟語である
- (8) 生活語とかけはなれた単語（特殊な修飾語、敬語、文語）である
- (9) 新しく提出する字数が多すぎる
- (10) 新しく提出する語数が多すぎる
- (11) 表現が不自然または不足な単語、文節、文である
- (12) 文字および単語の自然なくりかえしがすくない
- (13) 固有名詞（特に人名、地名）である
- (14) ひらがなばかりが長く続く単語、文節または句である
- (15) 次の行にまでわたっている単語である
- (16) つまる音、よう音、よう長音、長音など特殊な表記である
- (17) 見なれない擬音語、擬声語、擬態語をいきなり提出する
- (18) 接頭語、接尾語（またはそれらのついた単語）をいきなり提出する
- (19) 助詞のまぎらわしい使いかたである
- (20) 行間がせますぎる
- (21) 行間がひろすぎる
- (22) 一行がながすぎる
- (23) 句読点の使いかたが多すぎ、またはすくなくすぎる
- (24) 文型が複雑すぎる
- (25) 文が長すぎる
- (26) 文の内容がむずかしすぎる
- (27) 文の内容がつまらない

3. 学習指導の側の原因

- (1) 文字、単語を熟知させる指導が不十分である
- (2) 文字は発音をあらわすものだと考えて、意味をあらわすことばの記号として教えない
- (3) 語いをひろげ、豊富にする指導がなされていない
- (4) 文脈に適した単語の読みの指導がなされていない
- (5) 漢字の音訓両読みの指導がなされていない
- (6) 漢字の指導練習がなされていない
- (7) 動詞、形容詞などの変化形についての指導が不十分である
- (8) 文節や句で読む指導が不十分である
- (9) 読書指導が不十分である
- (10) 幼児音を早くのぞく指導ができていない
- (11) アクセントの指導がなされていない
- (12) 方言音の矯正指導がよくできていない
- (13) 音読技術の指導ができていない
- (14) 活用語尾をはっきりさせる指導ができていない
- (15) 句読点の指導がなされていない
- (16) 正しい「いき」のつぎかたの指導がなされていない
- (17) 意味を理解しながら音読する指導がなされていない
- (18) 不正確な黙読の速読みをさせすぎた
- (19) 目と声とのひろがりをひろげる指導がなされていない
- (20) 学習準備の指導ができていない
- (21) 動機づけがよくできていない
- (22) 読みの個人差に応じた個別指導がとられていない
- (23) 教具の利用が不十分である
- (24) テストによってつねにあやまりの原因を知ることがなされていない
- (25) 読むことに興味をおこさせない

また、音読実験の現場で総合的に観察したときにとらえた児童生徒の全般

的な態度にあらわれた障害の特長的な傾向を、人数であらわすと次のようになる。(表4)

〔表4〕 音読の全般的な態度にあらわれた障害の傾向 (小学校正常児)

障害の種類	学年						合計
	一年	二年	三年	四年	五年	六年	
	人 31	人 31	人 59	人 29	人 79	人 16	人 245
1 休止したりためらったりすることが多い	5	2	1	1	2	4	15
2 内容にそぐわない調子や抑揚で読む	4	4	2		3	3	16
3 呼吸のしかたが不正である	3	3	3	1	4	2	16
4 声が高すぎる		1					1
5 声が低すぎる	4	5	2	1	5		17
6 やさしい単語を読みちがえる		3	1		3	1	8
7 意味に関係のうすい単語を読もうとしない				2		2	4
8 難しい単語を読もうとしない					2		2
9 難しい単語にであうと声が急に小さくなる	3				2	1	6
10 読みが速すぎる	2	2	9		5	1	19
11 読みがおそすぎる	1		1		1	1	4
12 区切りが多い	2	4	5	2	9	1	23
13 特に繰返し読みが多い	2		8	1	11	1	23
14 特に読みかえ読みちがえが多い	1	1	7	3	13	2	27
15 発音が不明瞭である	1	1	1		1		4
16 特にとばし読みが多い		2	1		4		7
17 自信のない読みぶりである	2		4		7	1	14
18 内容を理解しながら読んでいかない	3	3	4		9	3	22
19 一字一字のひろい読みが多い	7	4	2	1	1		15
20 くちびる読みをする	2	1	4		9		7
21 ある語が特に速すぎる		1	1				2
22 総体的にアクセントのまちがいが多い				1	1		2
23 あわてて読む	1		1		1		3

4. 推定される原因を確かめるための補足的調査

なお、音読の障害の原因のなかの文字言語の側の問題を一層たしかめるため、だいたい等質なグループに対して、少し条件をちがえた材料でためすことを計画、昭和28年2月に東京都荒川区立真土小学校の2年生と5年生を選定、50人を単位とする比較調査を実施した。(実際は50人に至らなかった。)

その具体的なねらいと結果をここでは2年生のみを対象としてあげてみると、次のとおりである。(表5)

〔表5〕 原因の推定を確かめるための補足的調査
M小学校2年生(81名)に対する調査

調査の意図	甲組 (完全に読めた者)	乙組 (完全に読めた者)	結果
前回の調査では一つの文節を別行にわたって表記すると、改行した方に読み誤りがかなりあった。これを別行にせずつづけておけば、読み誤りがふせげるのではないか。	走って いきま す $\frac{20}{40} = 50.0\%$	走って いきます。 $\frac{23}{41} = 56.0\%$	ほとんど ちがわな い。
「たまころがしのようだね」は11のかんの連続で、ほとんど全員がつかずいた。これを二つに分割し、さらに、「うんどうかいのときの」と注釈を加えればたいして読めるのではないか。	たまころがしのようだね $\frac{0}{40} = 0\%$	うんどうかいの ときの たまころがしのようだね $\frac{3}{41} = 7.3\%$	予期に反 し、成績 はあまり よくない。
訓読の複合動詞につまづくものがかなり多かった。もし下につづく動詞が補助動詞なら、それほどつまづかないのではないか。	目を いろいろに つけかえると $\frac{11}{40} = 27.5\%$	目をいろいろに つけてみると $\frac{26}{41} = 13.4\%$	予期した とおりつ まづきが 少なくな った。

この調査研究には、調査実験をひきうけてくださった学校および諸先生がたになみなみならぬ御協力をえた。また山梨県教育委員会派遣生佐野芳夫、青森県教育委員会派遣生狩野尾陸磨、兵庫県教育委員会派遣生大久保芳継三氏の御協力をえた。ここに合せて謹んでお礼を申しあげる。

(平井)

言語能力の発達に関する調査研究

A. 目 的

小学校6か年の間に、聞く力、話す力、読む力、書く力がどれだけ伸びるか。その発達の実態・過程・段階を明かにし、またそれがなにによるか、その条件を明かにしようとする。特に、同一の子供についてその状況を詳しく究めようとする。

B. 計 画 と 方 法

同一の子供について小学校入学から卒業まで6年間継続調査をする。学年は2学年ずつとり、前調査と補充調査とにする。最初の年度は新入学の1年生だけとする。それに対する6年間の継続調査が前調査である。その次に入学した児童についてやはり6年間継続調査をする。それが補充調査である。したがって全体で7年かかる。

この研究のため東京に実験学校1校を設け、ここで所員が直接観察し、調査する。なお全国的に研究協力学校を設け実験学校と同一の規格のものでできるだけ実施してもらって、実験学校の成果がかたよっていないかどうかを検定する。研究協力学校は、実験学校である検査・観察・実験のすべてを実施する必要はないが、実験学校が東京であるから、なるべく純農村地帯に、実験学校に準ずる研究協力学校を設けて、ここで実験学校とほぼ同一のことをやってもらう。このようにして、この研究の成果が、大都市の1校だけの実態でないように心がける。

研究方法としては、

- (1) 聞く力、話す力、読む力、書く力の検査を相当頻繁におこなう。これは個人検査の場合もあり、団体検査の場合もある。

- (2) 知能検査, 性格検査, 身体的能力の検査を随時おこなう。
- (3) 毎日の教室および校庭における言語行動の観察記録, および, 性格的, 環境的, 知的, 身体的, 諸条件の観察記録。
- (4) 家庭環境その他についての質問紙法による調査。

以上の諸調査によって, 学級として, および, 個人個人としての成績を集積し, これに分析を加えて解釈をおこない, 必要な実験をおこなう。

C. 本年度担当者と実施概要

本年度の調査担当者は, 輿水実, 高橋一夫, 森岡健二, 芦沢節および岡本奎六(非常勤)であり, 実験学校, 協力学校として, 次の15校を委嘱した。

実験学校	東京都新宿区	四谷第六小学校		
実験学校に準ずる学校	神奈川県中郡	比々多小学校		
協力学校	兵庫県米上郡	幸世小学校	岩手県和賀郡	二子小学校
	長野県上水内郡	神郷小学校	東京都杉並区	方南小学校
	滋賀県大津市	中央小学校	栃木県小山町	小山第二小学校
	長野県松代町	松代小学校	神奈川県逗子町	久木小学校
	神奈川県横浜市	六浦小学校	山口県下松市	下松小学校
	静岡県静岡市	新通小学校	静岡県静岡市	中田小学校
同		城内小学校		

なお, 協力学校として委嘱するまでには至らなかったが, 次の3校には調査の一部分を依頼して, その結果の報告を得た。

神奈川県小田原市 大窪小学校 神奈川県横須賀市 池上小学校
 神奈川県横須賀市 沢山小学校

今年度の研究調査は, 予算の決定がおくれたことと, 三鷹からの移転とのために, 実験学校, 協力学校の依頼が新学期にはいつてからとなり, 学校にもめいわくをかけた。

おもな検査の実施概要を月順にしてみると、次のようになる。

<p>4 月 読字力テスト 書字力テスト 語い力、文法能力テスト</p>	<p>9 月 読字力テスト（第 5 回） 書字力テスト（第 5 回）</p>
<p>5 月 発音能力テスト予備テスト 発音能力テスト 書字力テスト（第 2 回） 読字力テスト（第 2 回）</p>	<p>12 月 読字力テスト（第 6 回） 書字力テスト（第 6 回） 拗音、促音、読・書字カテスト 読書速度テスト 読解力テスト</p>
<p>6 月 図形と人物画のテスト 生活環境調査（読書調査） 読字力テスト（第 3 回） 書字力テスト（第 3 回）</p>	<p>2 月 知能テスト（低学年用診断テスト）</p>
<p>7 月 発音能力テスト（第 2 回） 知能テスト（新 Z 式団体テスト） 読字力テスト（第 4 回） 書字力テスト（第 4 回） 語い力テスト（第 2 回） 性格調査 作文能力テスト（第 1 回）</p>	<p>3 月 漢字・読・書字力テスト 語い力テスト（第 3 回） 文法能力テスト（第 3 回） 黙読速度テスト 黙読理解テスト 黙読態度および音読技能テスト 作文能力テスト（第 3 回）</p>

性格・家庭環境等に関する質問紙は、5 月末に作成して家庭に記入を依頼した。

D. 成 果

以上のうち、4 月から 12 月までの諸検査の結果に解釈を加えて「入門期の

言語能力」として公刊した。

この「入門期の言語能力」に報告されていない諸研究，たとえば話す力や作文の力の発達，および，事例研究等は，次の報告書に譲る。

また，今年度いろいろの理由で実施できなかった身体的能力の検査などは来年度の補充調査による。

(奥水)

国語科学力水準調査

A. 前年度までの経過

国立国語研究所として昭和24年度からずっと「国語の学力標準設定に関する調査研究」を続けて来た。ところが、昭和26年度に文部省調査課で国語・理科・社会・算数の四科目の全国の学力水準調査をとりあげることになったので、これに全面的に協力、国語科の問題作成と結果の解釈とを分担して来た。この仕事が翌昭和27年度から国立教育研究所で実施されることになってからも、同様にこれに参加し、国語科の部分を分担して来た。そして昭和28年度も、引き続き、これに参加した。

B. 調査の目的と内容

この調査の目的は次の三つに要約される。

- (1) 全国的な学力の水準を明かにする。
- (2) 学力調査の方法を研究する。
- (3) 学力のついた原因、つかなかった原因を究明する。

5枚か6枚の紙に印刷された問題で、だいたい1時間ぐらいで、しかも全国的に国語の学力を検査しようというのであるから、その限界内でどういう学力を取りあげるか、どういう調査方法をとったらよいか、国語の学力調査法の根本にふれて来る。また実施の結果、全国的に、この学力についてはこのぐらいの力がついているということ、つまり全国の水準がわかる。この調査では、あらかじめ教員の資質、教育活動、学級数、特別教室の有無によって層別して学校を選んでいる。その上、国語科としても、教科書の関係、図書室の有無とその利用度、校内放送施設の有無とその利用度、文集や学校新

聞の発行について付帯調査をおこなっているもので、その限りで、それらの条件がどれだけ学力に作用するものであるかも吟味できるわけである。

C. 本年度の調査と担当者

本年度は研究所では、岩淵悦太郎・興水実・高橋一夫・芦沢節が、この調査を担当し、問題作成委員として次の諸氏をお願いした。

所 外 問 題 作 成 委 員

東京都教育庁指導部	安 藤 新太郎
文部省初等中等教育局初等教育課	沖 山 光
東京都杉並区方南小学校	上飯坂 好 実
東京都港区愛宕中学校	河 合 良 三
文部省調査局国語課	塩 田 紀 和
文部省初等中等教育局中等教育課	波 谷 宗 光
横浜市立大学	鳥 津 一 夫
横浜市西中学校	須 藤 久 幸
東京都北区神谷小学校	増 田 三 良
東京都杉並区方南小学校	宮 本 祐太郎

今年度は、他教科の方では、その教科の全般にわたる調査よりも、特に問題となっている点だけとりあげて、くわしく調査するという方向に傾いたのであるが、国語科では、この全国的な検査の与える影響を考慮して、漢字だけとか、文章読解力だけとか、話し聞く能力だけに限ることはしないで、前年度と同様、広く国語科の全領域にわたって、その主要能力がどのくらいついているかを検査することにした。そうして、各問題の得点に対して比重を設けて、全体として何点というようにあらわせるようなくふうをした。ただしそれと同時に、国語の学習指導の重点のおきかたと学力の類型について、全面的にすぐれているものと、全面的に劣っているものとのほかに、

- (1) 読解力の方面ですぐれているもの

- (2) 漢字の能力の方面ですぐれているもの
- (3) 話し聞く力や作る力の方面ですぐれているもの

の三つと、その組み合わせとに分けて考え、そこから、国語学習指導の問題点が一層明かになるように、問題構成についてくふうすることになった。

D. 本年度実施の概要

4月5月は、前年度の結果の解釈に基づく報告書の作成をした。

国立教育研究所「全国小・中学校児童生徒学力水準調査」（第一次報告書）昭和27年度国語研究所年報」参照

6月から委員会を開いて、28年度の問題を作成、次の学校に依頼して第一次・第二次のトライアウトを行って、9月に問題を完成した。

27年度学力水準調査のトライアウトを依頼した学校

東京都杉並区	方南小学校
神奈川県中郡	比々多小学校
神奈川県中郡	比々多中学校
神奈川県横浜市	西中学校

検査は12月初旬、他教科といっしょに全国で実施された。昭和29年1月から3月まで、国立教育研究所が内閣統計局の協力を得て結果の計算をおこなった。その数字の出そろったところで、問題作成委員会にかけて結果の解釈をするわけである。

E. 本年度研究の成果

I 小学校 実施要領

1. 児童着席。
2. 児童が問題用紙に手をふれないように注意してから配布する。
3. 次に児童に、学校の名まえ、学年、組、児童の番号と氏名をかきこませる。この際、児童が自分の番号をまちがいなくおぼえているかどうかを確認する。

男女は○でかこませる。

以上を一つずつ説明して書かせ、書いたことを確認してから次を書かせるようにする。

4. 最後の頁の結果記入票は児童には関係のないことを注意する。
5. 問題用紙の表紙に書いてある「注意」の事項をゆっくりと読んできかせる。
6. 問題は①から⑧まで8問ある。それを
 - (1) 聞きとりの練習
 - (2) 第1問（聞きとり）
 - (3) 第2問から第8問までの三つに区分して実施する。
7. 以上注意したこと、その他について質問をうける。このとき始まってからは質問を許さないことを注意する。以下、次の順序に従って実施する。
8. (1) 聞きとりの練習

「このテストは全部で8問ですが、一番はじめに聞きとりのテストがあります。そのやりかたがわからないといけないから、はじめにやりかたの練習をします」

「いま先生がお話を読みます。みんなはそれをだまって聞いていて、そのお話について、この裏表紙に「れんしゅう」と書いてあるところの質問に答えるのです。では裏表紙の方を出してください」

「まだそこを読んではいけません。お話を聞いてから読むのです。お話は一回しか読みません。鉛筆は持たないで、楽な、よい姿勢で聞いていてください」

「では、はじめます」

聞きとり（練習）

||| は休止を示す

きょうから || この学校の | 衛生週間が || はじまっています。|| 衛生週間というも
夏に | することが | 多いですね。|| 夏は | あせをかいて | からだがよごれるし、| パ
イキンの働きも | かつぱつになるから || 衛生に注意することが || 特に ^{たいせつ} 大切です。||
しかし、| 衛生ということは、|| 夏だけでなく、|| 秋でも | 冬でも、|| また春でも、||
一年中 ^{じゅう} いつでも | ^{たいせつ} 大切なことです。|| それで | この学校では || 一年を通じて、|| 時

時、衛生週間をすることに|なっているのです。」

この週間中に、|学校では、|衛生に関する|お話をしたり、|掲示を出したり|
 します。|みなさんとしては、|学校の中を|いつもよりも|よく|お掃除をして|
 ください。|それから、|つめを切ってきたり、|かみの毛を|あらって来たりし
 て、|身のまわりを|きれいに|することです。」

きょうの|おひる休みに、|校長先生や|ほかの先生がたから、|衛生週間の仕
 事について、|もっと|くわしい|お話が|あります。|それですから、|食事が
 終わったら|静かに|運動場に出て、|いつもの通り|整列してください。|お知ら
 せは|これで|終わります。」

「はい、鉛筆をとって」、 「はじめ」。

1分40秒

「やめ」。「鉛筆をおいて」、 「正しい姿勢になります。」

「これは練習ですから、正しい答を言います。自分の書いた答を見ていてください」

(問題 ㊦ と 1・2・3・4 を読む)

「さあこれで、みなさんにとってだいじなことというのは1と4ですね。ほかは
 いまみなさんがしなければならない、だいじなことではありませんね。ですから1
 と4に○のついたのがいい。できた人は手をあげてごらん下さい。……よろしい。」

「失敗した人はこんどのほんとうの時に気をつけてください。つぎは。」

(問題 ㊧ と 1・2・3・4 を読む)

「1は×2は○、3は×4は○ですね。そういうふうになできた人は手をあげてごら
 ん下さい。……よろしい。」

「練習はこれで終わります。答案用紙の表の方を出してください。」

「ほんもの時もいまのように、あんまりこまかい問題は出ません。それから○を
 いくつつけるのか、○だけか×もつけるのか、よく問題を読んでから答をかくので
 すね。」

(2) 「では、こんどはほんとうのお話を読みます。」

(聞きとり問題教師用を読む)

聞 き と り 問 題

これは、|ある朝、|先生が|話して下さった|ことです。|では、|はじめ

ます。」

みなさんは、| 防火週間ということを知っているでしょう。| きょうは、| その防火週間の| 第一^{いち}日です。| けさ、| 学校の掲示板に| 「火の用心」というポスターが| はって| あったのを| 見たでしょう。| みなさんの家^{うち}にも、| 消防のおじさんたちが| 「火の用心」と書いたビラを| 配^{くば}って行くことに| なっています。

みなさんは| 建物が火事になって| 燃えているのを| 見たことも| あるでしょう。| ついこの間も、| 長野県の学校が| 火事になって、| 生徒たちの| 勉強するところが| なくなって| こまっている| ということが、| 新聞に| 出て| いましたね。| その写真を| 見た人も| あるでしょう。| 日本の建物は| 木と紙で| 作ってあるので、| 火事に| なりやすいのです。」

寒くなると、| みなさんのうちでは、| 火鉢を出したり、| こたつを作ったり| するでしょう。| 学校でもストーブを| たきますね。| 火を使うことが| 多くなります。| 防火週間にあたって、| みんなで、| 火に気をつけて| 火事をおこさないように、| 五、六年生で| 「火の用心」のポスターを| 作ることに| なりました。| あしたの| 三時間目が、| ちょうど| 図画の時間ですから、| どんなポスターを| 作ったらよいか| 考えてきて| ください。| ですから、| 図画の用意を| 忘れないように| しましょう。| できあがったら、| みんなの書いた| ポスターを| 町に貼^はって| 町中^{じゆう}の人たちが| 「火の用心」を| するように、| わたくしたちも、| 消防のおじさんたちに| 力を| 合わせましょう。」

話は| これで| 終わります。」

(所要時間2分5秒)

「第1ページ、第2ページのところを開いて。問題1を出しなさい。」

「開きましたね。はじめ。」(7分)

「やめ」

問題2~8

(3) 「それでは、これからあとは、全部続けてやります。時間はたっぷりありますから余りあわてないでおやりなさい。第3ページ第4ページのところを開いてください。これができたらそのつぎも自分で勝手に開いてどんどん先をやってよいのです。では鉛筆をとって。」 「はじめ」。2~8 43分

9. 「やめてください。」問題用紙を回収して、部数を点検する。

II 小学校検査問題

1

- ㊦ いま聞いたお話で、六年生のみなさんがすぐしなければならないことは何ですか。つぎの四つのうちから一つだけえらんで、その上に○をつけなさい。
- 1 消防のおじさんと「火の用心」のピラをくぼってあるくこと。
 - 2 新聞に火事の写真が出ていたから見ること。
 - 3 図画の時間にどんなポスターを書くか、考えておくこと。
 - 4 寒くなったら火ばちを出したり、こたつを作ったりすること。
- ㊧ いまのお話を聞いてから、みんなで話しあっているうちに、つぎのようないろいろな話ができました。なかには聞きちがいもあるようです。先生のお話で、たしかに、そう言ったものの上には○、お話とはちがっているものの上には×をつけなさい。
- 1 日本の家は木と紙で作ってあるので火事になりやすい。
 - 2 防火週間で学校じゅうの者が火の用心のポスターをかく。
 - 3 学校の掲示板にみんなの書いた火の用心のポスターをはる。
 - 4 長野県の学校が火事でもえてしまって、生徒がこまったことがある。

2

- ㊦ 六年生の川上太郎君は、きょう、学校からかえってから同じ組の山田たけし君のうちに遊びに行く約束をしました。山田君のうちはすぐわかりましたが、入口の戸がしまっていました。太郎君は入口でなんと言ったらよいでしょうか。つぎの四つのうち、一ばんよいと思うものの上の一つだけ○をつけなさい。
- 1 こんにちは、かわかみです。
 - 2 こんにちは、たけしくん。
 - 3 こんにちは、たけしくん。かわかみです。
 - 4 たけしくん、いますか。

㊦ 太郎君のうちへ、太郎君の知らない、お客さんらしい人がたずねて来ました。

(客) ごめんください。おとうさんはいらっしゃいますか。木村というものです。

このお客さんに対する太郎さんの返事として、つぎの四つのうちどれがよいでしょうか。一ばんよいと思うものの上に一つだけ○をつけなさい。

(太郎) 1 はい、いらっしゃいます。少少お待ちください。

2 はい、おります。少少お待ちください。

3 おとうさん、木村さんがいらっしゃいました。

4 木村さんですか、おとうさんですね。少少お待ちください。

3

㊦ つぎの文は、ひとつづきの文ですが、() のところはことばがぬけています。

{ (これは) (イ)
(一千九百十二年) (ロ)
(しかし) (ハ) } が、うまくあてはまるように書きこみなさい。

1 (), イギリスがほこる汽船、タイタニック号は、はなばなしいぼんざいの声におくられて、有名なサザンプトン港から、はじめての航海に船出した。総トン数四万六千トン、お客と乗組員あわせて二千二百人という、そのころ世界でもっとも大きな汽船だった。

2 (), 大西洋を西へ西へとすすむうちに、ものすごいきりにおそわれて見とおしがきかなくなり、ニューヨークの東北方二千五百キロのところ、フルスピード(全速力)で大氷山に正面しょうとつし、わずか二時間のうちにあつけなく沈んでしまった。乗っていた人のうち、救助船にたすけられたのはたった七百人で、のこりはみな海の底深く沈んでしまった。

3 (), 世界でもっとも悲惨な海のできごととして、人人の胸にのこっている。

㊦ タイタニック号が沈んだのがなぜ世界でもっともかわいそうな海のできごとなのでしょう。つぎのこれと思うものの上に一つだけ○をつけなさい。

1 イギリスがほこる汽船だったから。

- 2 たくさんの人が死んだから。
- 3 もう少しでニューヨークというところで沈んだから。
- 4 はなばなしいぼんざいの声におくられて出たから。
- ㊦ 第二段に、「わずかに二時間のうちにあつけなく沈んでしまった。」とあります。が、なぜそんなに早く沈んだのでしょうか。それを示すのはつぎのどれですか。
- 一つだけえらんで上に○をつけなさい。
- 1 はじめての航海に船出した。
- 2 大西洋でものすごいきりにおそわれた。
- 3 お客と乗組員あわせて二千二百人。
- 4 フルスピード(全速力)で大氷山に正面しょうとつ。

[4]

つぎの文を読んで、——のついたところについてあとの間にこたえなさい。

わたくし 私のうちは子ども五人をいれて、八人家族です。ことしの正月で、まん八十五歳になったおばあさんは、おとうさんのおかあさんです。目と耳が、かなり不自由ですが、とてもやさしいので、私たちからずかれています。おじいさんが、おとうさんの九つのときなくなってから、ひとりで苦勞して、子どもを育てたのだそうで、おとうさんは、とてもだいじにします。

おとうさんは、おばあさんに話をするときには、「おかあさん。」「おかあさん。」
 といって、「おばあちゃん。」とは、けつしてよびません。おかあさんには、おとうさんの氣持がよくわかっているので、おばあさんの食事、身のまわりいっさいに注意して、いっしんにつくしています。おばあさんも、「ふみ子さん、ふみ子さん。」とよんで、毎日の苦勞をいたわっています。

おかあさんは、これだけ大ぜいのせわで、朝から夜おそくまで、せつせと働いています。若いころ、あまりからだがあつたようになかったそうですが、お客さまに、「いそがしくて、病氣するひまがありません。」と笑って話します。

次の問の答として、あっているものに一つだけ○をつけなさい。

- (ト) ここで子どもというのはだれをさしていますか。
 1 私たち 2 おかあさん 3 おとうさん
- (ニ) だれが育てたのですか。
 1 おとうさん 2 おばあさん 3 おじいさん
- (ヒ) 「おばあちゃん」とよぶのはだれですか。
 1 おとうさん 2 だれとも書いてない 3 私たち
- (ヘ) ふみ子さんとは、だれのことですか。
 1 おかあさん 2 おばあさん 3 私
- (コ) だれのわか若いころですか。
 1 おばあさん 2 おとうさん 3 おかあさん

5

つぎの「犬の子」の作文の中に、{ } のところが五つあって、そのどれにも1・2・3三とおりの書き方が出しています。みなさんがこの作文をしあげるとして、どの書き方が一ばんよいと思いますか。

三つのうちいちばんよいと思うものの上に一つだけ○をつけなさい。

犬 の 子

大山くんの家では、かわいい犬の子が、^{ひき}五匹も生まれた。そのうち一匹は、

- (ト) {

1	一ばん
2	かなり
3	とくべつ

 } 大きい。一ばん小さいのは、その半分ほどしかない。

五匹の子犬は、ビールの^{あきぼこ}空箱のわらの中で^{うご}ごそごと動いていた。どれも耳のところが、せなかのところに、黒いもののような^{もよう}模様のある子犬ばかりで、生まれたばかりのむく毛が、^{いき}息をただけでも、鳥の^{むなげ}胸毛のように

- (ニ) {

1	ふわふわ動いて
2	ふさふさして
3	ふるえて

 } いた。

一ばん大きいのをだきあげてやると、まだあかない目のふちを動かして、ぶるぶ

- (ヒ) {

1	ふるえています。
2	ふるえている。
3	ふるえました。

 } ると

クワンクワンないて落ちそうになつたので、思わずしっかりと、大きく「クワンクワン」というようにないた。

大山くんは、「あんまり、そんなに強くだくなよ。」といったので、ほくは

- (例) { 1 「どうして。」
2 「ごめんね。」
3 「落すと思ったからだよ。」 } と言いわけをしながら、こんどは、そとせ

なかを下に向けて両手でだいじにだいて、箱の中へ入れてやると、子犬のにおいが

- (例) { 1 して
2 ぶうんとして
3 におって } きた。

6

つぎの五つの文には、正しくない言い方のところが一か所ずつあります。わかっ
たら、その部分の右がわに、——を引いて、そこをうまくなおしなさい。

- ㊦ 「おもしろそうですね。わたくしもなかまに、はいらさせていただきます。」
㊧ 「勉強もしずに遊んでばかりいて、まったくこまった子だ。」
㊨ 「知らない土地へ来て、思いがけなくあなたにお目にかかれて、ほんとにうれ
しいでした。」
㊩ 「わたくしがこの間さしあげた手紙は拝見していただきましたか。」
㊪ 「わたくしは、そういう意味で言ったのではなかったのですが、ことばがたり
ませんでした。あの人がおこるのは、あたりまえです。わたくしは悪かったの
です。」

7

() の中に漢字の読みがなをつけなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|-----|---|----|---|-----|
| 1 | 態 | と | 度 | 6 | 低 | い |
| 2 | 印 | () | 刷 | 7 | 確 | かめる |
| 3 | 準 | () | 備 | 8 | 燃 | える |
| 4 | 事 | () | 務 | 9 | 減 | る |
| 5 | 適 | () | 当 | 10 | 絶 | える |

8

() の中に漢字を書きなさい。

(漢字の書き方に二通りあるものは、なるべく)
(国語の教科書に出ている字を書きなさい。)

- 1 (^{こう}) 通がはげしい
 2 ^{いっぶん} 一分と十 (^{じゅう})
 3 (^{くわ}) の草
 4 ^{そら} 空が (^は) れる
 5 ^{とり} 鳥が (^と) ぶ

- 9 ^{たい} 太 (^{よう}) がのぼる
 7 ^{かがく} 科学の (^{けん}) 究
 8 ^{ひと} 人に (^{せき}) をゆずる
 9 ^{きそく} 規則を (^{まも}) る
 10 ^{ふね} 船が (^す) む

■ 小学校 正答表

問題番号	正	答
1	(一) <input type="radio"/>	3 (備考) ○を二つ以上つけた時、一つ合っても「無、他」と判定し、0点とする。
	(二) <input type="radio"/>	1 × 2 × 3 ○ 4
2	(一) <input type="radio"/>	3 (備考) ①(一)と同じ。(以下同様)
	(二) <input type="radio"/>	2
3	(一) <input type="radio"/>	1 (一千九百十二年) (備考) (四)(イ)でもよい。三つとも完全にできたものだけを正と判定する。 2 (しかし) 3 (これは)
	(二) <input type="radio"/>	2
	(三) <input type="radio"/>	4
4	(一) <input type="radio"/>	3
	(二) <input type="radio"/>	2
	(三) <input type="radio"/>	2
	(四) <input type="radio"/>	1
	(五) <input type="radio"/>	3

問題番号	正	答
5	(一)	○ 3
	(二)	○ 1
	(三)	○ 2
	(四)	○ 3
	(五)	○ 2

	正 答 例	誤 答 例	備 考
<p>6</p> <p>(例に示しかかわら箇所だけを見ない)</p> <p>否にかかた問題にする。この箇所以外の反応は正</p>	<p>(一) <u>は</u>いらさせて→はいらせて</p> <p>はいらして</p> <p>いれて</p> <p><u>は</u>いら<u>さ</u>せて→せ</p> <p><u>は</u>いら<u>さ</u>せて→して</p> <p><u>は</u>いら<u>さ</u>せて<u>く</u>だ<u>さ</u>い→いれて</p> <p>もらおう</p> <p>いれて<u>ち</u>ょう<u>だ</u>い</p>	<p><u>は</u>いら<u>さ</u>せて→</p> <p>はいら<u>せ</u>て</p> <p>(はいら<u>せ</u>て<u>て</u>となるから誤答とする)</p>	<p>問題 6 では文字や表記の誤は許容する。</p> <p>たとえば、うれしゅうございますをうれしゅうござります。としても正答とする。</p>
	<p>(二) <u>し</u>ず<u>に</u>→<u>せ</u>ず<u>に</u>、<u>せ</u>づ<u>に</u></p> <p><u>せ</u>ず、<u>し</u>ないで</p> <p>や<u>ら</u>ず、や<u>ら</u>ないで</p> <p>や<u>ら</u>ず<u>に</u></p> <p>できない<u>の</u>に</p> <p>できない<u>で</u></p> <p><u>し</u>ず<u>に</u>→<u>な</u>い<u>で</u></p> <p><u>し</u>ず<u>に</u>→<u>せ</u></p>	<p><u>し</u>ず<u>に</u>→<u>せ</u>ず<u>に</u>、</p> <p><u>し</u>ない<u>で</u></p>	

	正 答 例	誤 答 例	備 考
	(三) うれしいでした→うれいす うれしかった うれしく思います うれしく思いました うわしいことです うれしいと息います うれしいわ うれしゅうございます うれいのです うれいでした→す	うれいでした→ うれしいかった	
	(四) 拝見してください ましたか→見て よんで、ごらん	拝見して ございましたか→見拝 見してくださいましたか →見たか、見てくれたか	
	(五) わたくしは悪かった→ わたくしが わたくしも		
7	1 た い 2 さ つ 3 び 4 む 5 て き 6 ひ く 7 た し 8 も 9 へ 10 た	た え, た ひ し く, ひくい たしか も え, もえる へ る, え た え	かたかな・ひらがなの混用はかまわない。かなづかいは問題にしない。

	(正答例)	(誤答例)
	1 交, 交, 交, 交	交, 交, 行, 公,
⑧	2 秒 秒 秒	秒, 秒, 秒,
(字体は新字体でも旧字体でもよいとする。)	3 庭, 庭, 庭, 庭,	庭, 庭, 庭, 庭, 庭,
	4 晴, 晴, 晴, 晴,	晴,
	5 飛, 飛, 飛, 飛	飛, 飛, 飛, 飛,
	6 陽, 陽, 陽	陽, 陽, 陽,
	7 研, 研, 研,	研, 研, 研,
	8 席, 席, 席, 席,	席, 席, ,
	9 守, 守,	守, 守, 守, 守,
	10 進, 進, 進, 進, 進,	進, 進, 進, 進,

Ⅳ 小学校 結果記入票

問 番 号	反 応	判 定		採 点	
		正 誤	無 他		
1	(一)	1			6
		2			
		3			
		4			
2	(二)	1			3
		2			
		3			
		4			
3	(三)	1			5
		2			
		3			
		4			
4	(四)	1			4
		2			
		3			
		4			
5	(五)	1			4
		2			
		3			
		4			

問 番 号	反 応	判 定		採 点	
		正 誤	無 他		
1	(一)	1			2
		2			
		3			
		4			
2	(二)	1			3
		2			
		3			
		4			
3	(三)	1			3
		2			
		3			
		4			
4	(四)	1			3
		2			
		3			
		4			
5	(五)	1			3
		2			
		3			
		4			

問 番 号	反 応	判 定		採 点	
		正 誤	無 他		
6		1			3
		2			
		3			
		4			
		5			
7		1			1
		2			
		3			
		4			
		5			
		6			
		7			
		8			
		9			
		10			
8		1			1
		2			
		3			
		4			
		5			
		6			
		7			
		8			
		9			
		10			
計					

小学校 年 組

番 男・女 氏名

(1) 反応の記入 たとえば①でいえば右表のように、用紙の上の方に被験者が○や×をつけたその通りに書く。したがって○を一つだけつけるように書いてあるにもかかわらず、二つつけて、さらに右表のような場合も生じて来るが、これもその通りに記入する。

⊃	1	○
	2	
	3	
	4	
⊂	1	○
	2	○
	3	×
	4	×

ある項について無反応の場合は空欄となる。

⑦⑧の漢字に対する反応のところは、正誤にかかわらず、手をつけたものには√じるしをつける。

問題	反応	判定		
		正	誤	無・他
⊖	1	○		
	2			
	3	○		
	4			
1	1	○	√	
	2	○		√
	3	×	√	
	4	×		√

(2) 判定の記入 別項の「正答表」にしたがって、右の表のように記入する。

上の表のように一つだけ○をつけるべきであるのに二つ以上つけた場合は、その一つが正であっても「無・他」の欄に記入する。

問題①の⊂において全部×、全部○をつけたものも有効とし、正答表にしたがってそれぞれ正誤を判定する。

(3) 採点の記入 採点には次のような重みづけをする。

問題	配点	満点
① ⊃	6	6 } 18
⊂ (1, 2, 3, 4)	各3	
② ⊃⊂	各5	10
③ ⊃⊂⊂	各4	12
④ ⊃⊂⊂⊂	各2	10
⑤ ⊃⊂⊂⊂⊂	各3	15
⑥ ⊃⊂⊂⊂⊂	各3	15
⑦ 1……10	各1	10
⑧ 1……10	各1	10

(4) 注意事項 結果記入票には児童の番号、氏名の記入を忘れないようにすること

V 小学校 問題の構成と結果解釈の要領

問題番号	仕 事	材 料	検 査 する 学 力
①	聞きとり	防火週間の説明と指示	(+) 要点を聞きとる (-) 1, 2, 3, 4 正しく聞きとる
②	ことばの作法	友人宅の訪問のしかた 来客の取りつき	(+) ことばの作法を知っている (-) "
③	文章読解	タイタニック号沈没の記事	(+) 文の組み立てがわかる (-) 文のねらいをつかむ (-) 文の叙述を正確につかむ
④	文章読解	おかあさんを主題とした児童文	(+)~(+) 文脈に注意して読む
⑤	作文推敲	犬ころを主題とした児童文	(+)~(+) 文脈に合わせて語句を推敲する
⑥	ことばづかい	日常会話文	(+)~(+) まちがったことばづかいの箇所に気がつく
⑦	漢字の読み	教育漢字	1~10 語にかなをつける
⑧	漢字の書きとり	たいていの教科書で5年までに提出ずみの教育漢字	1~10 語の中に書きこむ
計		8 題	計 4 5 項

結果の解釈については、問題構成にしたがってみてゆくべきであるが、ここで知りたいことは、特に次のようなことである。

(1) 個人および学級の平均点数

(2) どの方面(どの問題)がよくできて、どの方面がよくできていないか。……

①から⑧までどれも学級として半分ぐらいできるように構成されている。

(3) 問題群に分けると

①＝聞きとり

②＋⑤＋⑥＝表現力

③＋④＝読解力

⑦＋⑧＝漢字力

ということになるから、(2)の成績の特徴もこの群にしたがってもっとはっきりと見きわめられるし、学力の型を見出すこともできるであろう。

(4) 学級の得点の分布や標準偏差を調べることによって、学級の学力が均質か否かをさぐる。

(5) 成績の非常に悪い者の数(点数化した場合に20点以下の者)を調べる。

なお、このテストの成績を解釈するには、(1)テストになれているかどうか、(2)最近学習したことが出たかどうか、(3)当日のコンディションはどうであったか等について考慮すべきであり、特に⑥の問題はその土地がいわゆる標準的なことばづかいをしているか、地方的な特色を持っているかによってちがいもあると思われる。この問題についてはそうした地域からもっとくわしい反応の分析を報告していただきたい。そして、そうした場合にはこの問題だけ採点から除外するということも考えられる。

なお、ここでテストしたのは、聞く力にしても、作文の力にしても、さらに読む力や、漢字の力にしても、学校が目標としているものきわめてわずかの部分を占めるものであって、決して全体ではないのであるから、その点も注意しなければならない。

Ⅶ 中学校 実施要領

1. 生徒着席。
2. 生徒が問題用紙に手をふれないように注意してから配布する。
3. 次に生徒に、学校の名まえ、学年、組、生徒の番号と氏名をかきこませる。

この際、生徒が自分の番号をまちがいにうおぼえているかどうか確認する。

男・女は○でかこませる。

以上を一つずつ説明して書かせ、書いたことを確認してから次を書かせるようにする。

4. 最後の頁の結果記入票は生徒には関係のないことを注意する。
5. 問題用紙の表紙に書いてある注意の事項をゆっくりと読んできかせる。
6. 問題は①から⑧まで8問ある。それを
 - (1) 聞きとりの練習
 - (2) 第1問（聞きとり）
 - (3) 第2問から第8問まで

の三つに区分して実施することを説明する。

7. 以上注意したこと、その他について質問をうける。このとき、始ってからは質問を許さないことを注意する。
8. (1) 聞きとり練習

「このテストは全部で8問ですが、一番はじめに聞きとりのテストがあります。そのやりかたがわからないといけないから、はじめにやりかたの練習をします。」

「いま、先生がお話を読みます。みんなはそれをだまって聞いて、そのお話について、この裏表紙に練習と書いてあるところの質問に答えるのです。ではその裏表紙の方を出してください。」

「まだそこを読んではいけません。お話を聞いてから読むのです。お話は一回しか読みません。鉛筆は持たないで、楽な、よい姿勢で聞いてください。」

「でははじめます。」

聞きとり（練習）

||| は休止を示す

これは | ある朝 | 勉強のはじまる前に || 先生が | みんなに話した || お話です |
 きょうは | これから | 避難訓練を | します || 学校に火事がおこることなどは | め
 ったにないことですが || もし | 学校に火事が起きたときには || どのように避難
 するか || という | 練習です || 火事だ！ | といって || みんながめいめい勝手に | 廊下
 に | 飛び出したり || 階段を | かけ降りたりしたら || どうでしょう || 廊下を | 東の方
 へ | 逃げようとする人と || 西の方へ | 逃げようとする人とあったら || どうなるでし

よう || みんなが | 勝手に | 飛び出すと || ふつかり合っ
て || 非常に | 危険ですね ||
そういう時こそ || 落ちついて || 先生のさしずのとおり
に || 動かなければ | なりません ||
ことに || かけ足は | いけません || 前の人を | 押したりしては | いけません ||
きょうは | そういう練習を | することに | します || この訓練は | 三時間目の授業
で | 教室へは | いった時に | やります || 火事は | 小使室の | わきのところから | 起っ
たことに | します || サイレンがなったら || 先生のさしず
で | 勉強の道具を | しまっ
て || できるだけ早く | できるだけ落ちついて || 廊下
に | ならびます || そして | まん
中の出入口から | ^{でいりぐら}裏の運動場に | ^{うら うんどうば}出ます || 学校中の者の | ^{じゆう}避難が | 終わっ
てから ||
^{おもて うんどうば}表の運動場に | 集まって || 校長先生の | お話が | あります |

お話は || これで | 終わります |

(所要時間 1分40秒)

「はい鉛筆をとって」「はじめ」(4分)

「やめ。」「鉛筆をおいて」「正しい姿勢になります。」

「これは練習ですから、正しい答を言います。自分の書いた答えを見ていてくだ
さい。」

(問題(一)と1を読む)

「イ、一時間目。ロ、二時間目。ハ、三時間目。三時間目でしたね。ハに○です。」

(問題(一)の2を読む)

「イ、かね。ロ、サイレン。ハ、ベル。サイレンでしたね。ロに○です。」

(問題(一)の3を読む)

「イ、話がある。ロ、教室にもどる。ハ、かいさんする。校長先生のお話があり
ますといっていましたね。イに○です。」

「さあこれで(一)の方はハ、ロ、イに○のついた人がいいのですが、全部できた人
は手をあげて……よろしい。問題(二)の方は。」

(問題(二)の1を読む)

「これはどうでした。こんなことは言っていませんでしたね。ですから×。」

(問題(二)の2を読む)

「これも少しちがっていますね。人をおしてはいけないといっていて、さわって
はいけないとまではいわない。ですから×。」

(問題④の3を読む)

「これはそうっていましたね。ですから○。それで④は××○ですね。みんなできた人は手をあげて……よろしい。失敗した人も、こんどほんもの時には失敗しないようにしましょう。」

「練習はこれで終り、答案用紙の表の方を出してください。」

(2) 「では、こんどはほんとうのお話を 읽みます。」

(聞きとり問題教師用を読む)

聞きとり問題

これは朝の集りの時の副校長の先生のお話です。みなさんは三年生のつもりで聞いてください。

きょうは労働安全週間の第一日です。

みなさんは工場で火事が起ったり爆発があったりして働いている人がけがをしたり死んだりするのを時々新聞で読むことがあつてしょう。工場の設備が悪かったり働く人がつかれてついうっかりしているとこんな事故が起りやすいものです。そういうことがたびたびあると働く人も落ちついて働けず生産の能率もあがらないということになります。ところが日本の工場はアメリカなどとくらべてそういう事故が起りやすく安全率が低いといわれています。労働安全週間はできるだけそういう事故の起らないようにして安全なあかるい能率のあがる職場を建設しようというのが目的です。

この週中に全国各地の工場でいろいろな催しもあるようですが学校でもこの機会にたばこ工場を見学させてもらうことになりました。

工場の都合で一・二年生だけはあさって二十三日水曜日ときました。が三年生は来週になります。日はまだはっきりきまりません。三年生は今週中にたばこの生産のことをよく調べてその調べたことを図書室に掲示して一・二年生にもわかるようにしてください。

この指導は高橋先生がしてくださいますから三年生の学級委員は今す

ぐではなく 〓二時間目の終わりに 〓校長室に 〓集まって 〓ください 〓 一年生二年生
には 〓きょうの 〓昼の 〓時間に 〓めいめいの教室で 〓学級主任の先生から 〓お話が
あります 〓 終り (所要時間 2分20秒)

第1ページ, 第2ページ①のところを開いて。」「開きましたね。そこは右も左も全部やるのです。」「はじめ」(7分)

「やめ。からだを起して、よく聞いてください。」

(3) 「こんどは作文のテストですが、これは短い文をどんどん読んでゆくと、所所がぬけている。そのぬけている所に、文の意味が通るように書きこんでゆくのです。これは5分でやります。途中で「やめ」と言います。そしていくつできたか調べるのです。だからみんな書いた方がいいが、まちがったのを書いてもしかたがない。5分といえはかなりの時間でふつうにやればだいたいはやれる時間ですからあわてないでやってください。それから、あまりきたなく書いてわからないようなものいけない。」

「ではその第3ページ第4ページを開いて、②をやりましょう。」

「はじめ」,(5分) 「やめ」

(4) (もうあと6題ですが、あとはどの問題も時間がじゅうぶんにありますから、落ちついてやってください。第5, 第6ページを開いて、③をやりましょう。」「はじめ」(10分) 「やめ」

第7, 第8ページを開いて、④をやりましょう。」「はじめ」(7分) 「やめ」

「第9, 第10ページを開いて、こんどは⑤です。」「はじめ」(7分) 「やめ」

「第11, 第12ページを開いて、⑥をやりましょう。」「はじめ」(6分) 「やめ」

「第13ページを開いて。ここは⑦⑧と2題ありますが、これはいっしょにやります。これで全部終りますね。」「はじめ」—(10分)—

9. 「やめてください」といって問題用紙を回収して、部数を点検する。

Ⅶ 中学校 検査問題

①

一、いま聞いたお話について、次の(一)(二)の間に答えなさい。あっているものの上に一つだけ○をつけなさい。

(一) 三年生の学級委員はどこに集まりますか。

- 1 図書室。 2 音楽室。 3 校長室。

(二) いつ集まりますか。

- 1 今すぐ。 2 二時間の終り。 3 ^{ひる} 昼休み。

二、このお話を聞いてから、みんなで話し合っているうちに、次のようないろいろの話ができました。中には聞きちがいもあるようです。このお話でたしかにそう言ったものの上には○、お話とはちがっているものの上には×をつけなさい。

- 1 労働を安全にして工場の能率^{のちりつ}をあげようとするのが労働安全週間だ。
- 2 日本の工場は世界で一ばん安全率^{りつ ひく}が低い。
- 3 労働安全週間は日本中^{じゆう おこな}で行われている。
- 4 労働安全週間中^{ちゆう}は中学生が工場を見学することがかんげいされている。
- 5 三年生は今週中にたばこ工場をしらべに行く。

三、三年生の正男君^{まさお}が、いま聞いたお話をうちへ帰^{かえ}ってからおかあさんにつたえるとして、次の1・2・3・4の四つの中で、だいじなことをぬかさないうで、まとまっているのはどれですか。一ばんよいと思うものを一つだけえらんで、○をつけなさい。

- 1 「おかあさん、労働安全週間って知ってる？ 日本の工場はとても危険^{きけん}なんですって。一、二年は工場を見学するけれど、ぼくたちは、たばこの生産^{せいさん}のことを調^{しら}べるんです。」
- 2 「おかあさん、いま労働安全週間なので、学校でたばこ工場を見学することになりました。一、二年生はあさってですが、ぼくたちは今週中^{ちゆう}は、たばこの生産^{せいさん}のことを調べておいて来週行くのです。日はまだきまっていません。」
- 3 「おかあさん、ぼくたち来週中^{ちゆう}にたばこ工場を見学に行くのです。一、二年

生はあさってですが、工場の方のつごうで、ぼくたち三年生は、今週中は、たばこの生産のことを調べておいて来週行くのです。」

- 4 「おかあさん、きょうはなんの日だか知っていますか。日本の工場は設備が悪くてあぶないでしょう。ですから全国で労働安全週間を実施して、工場を安全にするのですよ。きょうはその労働安全週間の第一日ですって、学校でお話を聞いてきました。」

②

次の [] の中にことばを入れて、五つの作文をしあげなさい。(時間がまわっていますから早くやりなさい。)

- (一) 汽車はトンネルの中を長い間ごうごうと音をたてて走った。七、八分もたったかと思うころ、暗いやみの世界から急にあかるい海岸の景色の中に
- 1 [] 。いそいであけた窓からさわやかなしお風が吹きこんで、
- 2 [] 言えないいいきもちである。北の海の色の青さについては聞いていたが、
- 3 [] こんなに青いとは思わなかった。
- (二) だいぶ寒くなってきましたが、あいかわらずお元気ですか。ことしもいよいよ残り少なくなりましたね。学校の休みで中村くんが東京から帰ってくるそうなので、中村くんを迎えて、みんなでクラス会をしたいと思います。
- 二十八日の午後四時からで、
- 4 [] はぼくの家、会費は百円です。準備のつごうがありますから、
- 5 [] 二十七日までに
- 6 [] をお知らせ下さい。
- (三) お正月を迎えたと思うまもなく三月になった。陽春というにはまだ
- 7 [] が、花屋の店先にかざられている草花は、すでに春を
- 8 [] 。春の花にはいろいろあるが、この季節を
- 9 [] ものは、なんといっても三月の節句にちなむ桃の花であらう。
- (四) 第二校時の国語は、みなよく勉強した。数学の時コンパスを忘れて来て、隣のへやへ借りに行くものがある。その日の道具は
- 10 [] そろえる習慣をつけたものだ。

今週は、「^{せいそう}清掃週間」ということになっていたが、まだまだ 11
 で、来週も続けて注意しなければ、教室は 12 。
 花をかざるより、紙くずを散らさないことの方がたいせつだと思う。

(四) もし私たちが二種以上の新聞を読んで、そこに出た同じ材料の記事を、あれこれくらべてみると、事実は一つであるにもかかわらず、記事は意外にもひどくちがうことがある。だから、一つの新聞の 13 の記事だけで、これが唯一の 14 と信じてしまうことは 15 。

③

次の文を読んで、下の問に答えなさい。

アメリカの教育の委員会が、最近、「あきめくら」を三通りにわけて、第一のあきめくらは、一字の字さえも全然読むことのできないまったくの無学文盲とし、第二のあきめくらは、学校に通っている間は教科書を読むけれども、学校を出てしまうと、何も読まなくなるものであるとし、第三のあきめくらは学校を出てからも本を読むことは読むが、価値のあるものを選ばず、安っぽいくだらない本に満足しているものとしている。第一類のあきめくらは、教育がゆきわたったので、非常に少なくなった。けれども、第二、第三の類のあきめくらはまだまだとても多いということを言っている。わが国では、全文盲はほとんどなくなったけれども、半文盲や弱文盲はかえってもっと多いのではあるまいかと思われる。

読書調査の結果をながめても、ある調査では、小学校児童の二〇％は教科書以外に読書を全然してない。中学校の生徒ではそれがふえて二七％になっている。工場労働者の調査では、女子は三〇歳、男子は四〇歳になると、読書をするものがほとんど無くなってしまっている。家庭の母では、全然読書の時間を持たないものが八七％あり、全体の一日平均読書時間はわずか十三、四分である。このように文字が全く読めないのではなく、読めても読まないものが、おとなになると相当に多い。またかりに読んでも、ろくなものしか読まないものは、さらに多いのではないかと思われる。

私はなお第四の類の文盲があると思う。それは、価値のある本は読むけれども、その深い意味を正しくとらえることができないで、うすっぺらな解釈をしたり、時にはまちがった意味をつかんで気づかないような類である。これもほんとうには字が読めないのであるから、やはりあきめくらに違いない。

われわれはこういう「あきめくら」にならないように、国語の時間に、しっかりと読書のしかたを身につけていきたいものである。

(一) アメリカの教育の委員会が言ったのは、この文のどこまでですか。正しいと思うものの上に一つだけ○をつけなさい。

- 1 「満足しているものとしている」まで
- 2 「非常に少なくなった」まで
- 3 「多いということを知っている」まで
- 4 「多いのではあるまいかと思われる」まで

(二) 「全体」というのはなんの全体ですか。あっているものの上に一つだけ○をつけなさい。

- 1 男子、女子の全体
- 2 家庭の母の全体
- 3 小学校、中学校、工場労働者、家庭の母の全体
- 4 日本人の全体

(三) 作者が最後に「こういうあきめくらにならないように」と言っている。それは第何類のあきめくらですか。よいと思うものの上に一つだけ○をつけなさい。

- 1 第一類の文盲
- 2 第二類の文盲
- 3 第三類の文盲
- 4 第四類の文盲

④

次の文を読み、―――を引いた部分について、あとの問に答えなさい。

私は昔から絵が好きだったので、いろいろの画家の絵を集めたり、じぶんでも絵

をかいたりして楽しんでいる。若い時、私は、ミレーの絵がだれのよりも好きだった。ゴッホは、このミレーの^{えいさよう}影響を深く受けたものである。^(一)初期の作品はミレー式だ。かれはミレーを^{いくまい もしや}幾枚も模写している。ゴッホのミレーの模写は、ほとんどゴッホの^{そうぞう}創造のようにりっぱな絵となっている。^(二)全くじぶんのものとなっているが、似ていることも非常だ。かれは^{ねつじよう}熱情をささげてミレーの模写をしている。このあいだも複製展覧会でミレーの原作を思わせるように精巧な模写を見たが、これには驚いた。それは美しくけだかく、芸術の勝利に輝いていた。レンブラント式のけだかさもっていた。レンブラントは^{びじゆつか}美術家の中でも精神的な人で、他の画家よりも心においてすぐれた画家だ。^(三)心の画家、心霊の画家である。ゴッホもその点は全く同じだ。^(四)現実的ではあるが写實的でなく、写実で終らず、精神力を伝える画家で、^(五)その絵は他の画人の画布に欠けている魂を有している。

次の五つの問について、1・2・3・4のうち、合っているものに一つだけ○をつけなさい。

(一) 「初期の作品」とはだれのですか。

- 1 私 2 ミレー 3 ゴッホ 4 いろいろの画家

(二) 「じぶん」というのはだれのことですか。

- 1 ゴッホ 2 ミレー 3 私 4 レンブラント

(三) 「心の画家」「心霊の画家」とはだれをさしているのですか。

- 1 ゴッホ 2 ミレー 3 レンブラント 4 他の画家

(四) 「現実的ではあるが」とは、だれの絵をさしているのですか。

- 1 ミレー 2 ゴッホ 3 レンブラント 4 レンブラントとゴッホ

(五) 「その絵」はだれの絵ですか。

- 1 ミレー 2 レンブラント 3 ゴッホとレンブラント
4 ゴッホ

⑤

文集にのせる詩を次の四つから選ぶことになりました。四つともみな「風」をうたったものです。今までに、思想的な詩や、生活のうたや、美しい感じをうたった

詩をえらびましたので、こんどは、思いきり空想くうそうに富んだ、たのしい軽快けいがいな詩をとり
たいと思います。その条件じょうけんでどれをとったらよいと思いますか。よいと思う詩を
一つだけえらんで、その番号の上に○をつけなさい。

1 こおろぎの声だけ林にひびく。

こんな静かな夜は、
風はどこかでそっとしている。
そしてあしたは神社の落ち葉をとばし、
あさっては校庭の紙かみくずを巻きあげ、
やのあさっては
空いっぱいそらに雲をとばそうと考える。

2 ヒュー、ヒュー、ガタガタガタ、

ゴトゴトゴト、
風は夜まわりだ。
あっちの家をガタガタ、
こっちの家をゴトゴト、
そしてぼくたちには聞えぬが、
(あま戸は、きっちりしまってますか。)
(窓まどのよろい戸は、ちゃんとおろしてありますか。)
と、ささやきながら
通るのだらう。

3 風は大きな頭まるぼうずをした丸坊主だ。

手もなく、胴たうだけで、
象ぞうのようにのろのろと歩いているが、
すばやいやつだ。
あしの葉はの二三本いげ茂った中にもかくれ、
浅い水の上にも消えうせる。

風はよくとぼけたり、
いたずらをしたりする。

見よ。水の上にかくれた風が、
すぐむこうの土手^{どて}にあらわれ、
大きな頭をもち上げて、
なんだかにこにこ^{わら}笑っている。

- 4 風には色はないだろうと思った。
それからあるだろうと思った。
天気の良い日、
風が吹いて緑の木の葉をゆすぶれば、
そのゆれる色が風の色だと思った。
大風の大雨の日、
雨を横の方にふきやった時の雨の色を、
風の色と思った。
また、稲^{いね}の黄色い穂^ほを、
ざざ——と、
波のように揺れさせた時の、
その黄色い光った色が、
風の色で足あとだと思った。
風はどんな色をしていて、
どんな形をしているかわからないから、
小さい時はひとりでこのように考えた。

⑥

㊦ この道を行くと駅に出ます。

このとと同じ使い方のとを次の四つの文の中からさがして、その番号の上に
一つだけ○をつけなさい。

- 1 雪がとけはじめると道が悪くなります。
- 2 数人の友だちとアルプスに登山しました。
- 3 かれが何と言おうとぼくにはそんなことはできない。
- 4 ひまわりの花は大きいが、美しいとは言えない。

次の三つも上と同じやり方で、やりなさい。

(㊦) 高校へ行ったら、バレーをやってみようと思います。

- 1 ^{どく}毒でも使いようで薬になるものです。
- 2 にいさんはおべんとうを忘れていったようですよ。
- 3 あなたがたは花で言えばつぼみのようなものです。
- 4 門をあけようとしたら、とたんに犬がとびかかってきた。

(㊧) そんなことは、子供でも知っている。

- 1 この水は飲んでもさしつかえない。
- 2 お正月のような休みの時でも郵便はちゃんと配達される。
- 3 入場券は前売りですが、当日会場でも売ります。
- 4 いちおうやってはみましょう。みれでもできないかもしれません。

(㊨) 読書の時間もないことをなげく人は、時間があっても勉強しない人だ。

- 1 ぼくらの教室には、いつもきれいな花がかざってある。
- 2 あの人は、会議の司会者をするのに適しています。
- 3 学級文庫のこの全集は、卒業生の残してくれたものです。
- 4 私が行ってはどうしていけないの。

(7)

() の中に漢字の読みがなをつけなさい。

- | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|----|---|-----|---|
| 1 | 承 | () | 認 | 6 | 貯 | () | 蓄 |
| 2 | 必 | () | 品 | 7 | 延 | () | 期 |
| 3 | 欲 | () | 喜 | 8 | 穀 | () | 物 |
| 4 | 兼 | ね | る | 9 | 蔽 | () | 重 |
| 5 | 減 | () | る | 10 | 移 | () | す |

(8)

() の中に漢字を書きなさい。

(漢字の書き方に二通りあるものは、なるべく)
(国語の教科書に出ている字を書きなさい。)

- | | | | |
|---|------------------------------------------------|----|--------------------------------------------|
| 1 | 話題 <small>わだい</small> に対する() ^{きょう} 味 | 6 | わかい者と() ^{ろう} 人 |
| 2 | 水箸 <small>すいし</small> の対() ^{さく} を考える | 7 | 卒業 <small>そつぎょう</small> の記() ^き |
| 3 | 幼児 <small>ようじ</small> を保() ^ほ する | 8 | 右() ^{みぎ} を通る |
| 4 | 内() ^{ない} がおもしろい | 9 | まるく() ^{かこ} む |
| 5 | 好ましい() ^{この} 度 | 10 | 六に三を() ^{くわ} える |

Ⅶ 中学校 正 答 表

問題番号	正	答
①	一	<input type="radio"/> 3 <input type="radio"/> 2 (備考)○を二つ以上つけた時、一つ合っているも、「無・他」と判定し、0点とする。
	二	<input type="radio"/> 1 <input type="radio"/> 2 <input type="radio"/> 3 <input type="radio"/> 4 <input type="radio"/> 5
	三	<input type="radio"/> 2 (備考) 一と同じ。(以下同様)
②	(注意) 書きかたがきたなくても、誤字があっても、意味が通ればよいとする。文のよしあしを問わない。しかし、敬体と常体の文体を混用して書きこんだものは誤答とする。また、下に続くことばを無視して、助詞を入れたり、入れるべき助詞をぬかしたりしたもの、言い切りになるところを中途はんぱにしたものなどは誤答とする。	
	(一)	(正 答 例) 1 出た 出た。(これも正答とみなす。以下これに準ず。) あらわれた 出て来た 走り出た 2 なんと 3 まさか よもや まったく 海が私 (誤 答 例) 出ました 起った なんと くる とても ほんとに 海 海の色 ここの色 (、)の中に、だけを入れたもの
	(二)	4 場所 会場 する所 集まる所 クラス会 中村君 参加者 5 きたる かならず なるべく お クラス会は 人員は 会費 早め 忘れなく なにとぞ 十二月 一月 おかねを 6 出席の有無 出席か欠席か 参加 ぼくの家へ(まで)もって来て するかしないか 返事 希望 お手紙(はがき)で

(三)	<p>7 早い 少し早い 寒い まがある</p> <p>8 告げている むかえている まっている まちくたびれている おもわせる</p> <p>9 代表する かざる あらわす 物語る</p>	<p>早いが きまっています 長い 冬の花</p> <p>すごした すぎていた 開いた むかえて</p> <p>さかせる いう しのがせる 代表</p>
(四)	<p>10 前の日のうちに 前の日に きちんと ちゃんと 忘れないで みんな</p> <p>11 不十分 不潔 実行できないの 行きとどかないの 守られないの きたないの</p> <p>12 きれいにならない 美しくならぬ い 清潔にならない きたなくなる よごれている よごれているだろう</p>	<p>前の日 その日に</p> <p>きたない きたないので 来週の</p> <p>きれいな(に) 道具は みんなで 美しくなる</p>
(五)	<p>13 ただ一つ 一つ 一回 そ なか 事件に対する意見 ニュース</p> <p>14 真実 事実 記事 論評 正しいもの</p> <p>15 危険である あぶない あやまり である いけない</p>	<p>重要 写真 みだし</p> <p>正しい 新聞 材料</p> <p>大切である いうまでもない いけません まちがいです</p>

③	㊦	○ 3			
	㊧	○ 2			
	㊨	○ 4			
④	㊦	○ 3			
	㊧	○ 1			
	㊨	○ 3			
	㊩	○ 2			
	㊪	○ 4			
⑤		○ 3			
⑥	㊦	○ 1			
	㊧	○ 4			
	㊨	○ 2			
	㊩	○ 3			
⑦			(正 答)	(誤 答 例)	(備考)
	1	にん			かたかな, ひらがなの
	2	じゅ, じゆ, ぢゅ, ぢゆ	じゅう		混用はかまわない。か
	3	かん, くわん			なづかいは問題にしま
	4	か	かね, かねる		ない。
	5	へ	へる, え		
	6	ちく			
	7	えん, ゑん	へん		
	8	こく			
	9	げん			
10	うつ	うつす, い			

	(正答例)	(誤答例)
	1 興, 興	興, 興, 興, 興
⑧	2 策, 策, 策, 策,	策, 策, 策,
(字	3 護, 護, 護,	護, 護,
体	4 容, 容, 容, 容, 容,	容, 容, 容, 容, 容, 容,
は	5 態, 態,	態, 態, 態, 態, 体,
新	6 老, 老, 老, 老, 老	老, 考,
字	7 念, 念, 念,	念, 念, 念, 念,
体	8 側, 側, 側,	側, 側, 側, 則,
で	9 困, 困, 困, 困,	困, 困,
も	10 加, 加, 加,	加,
旧		
字		
体		
で		
も		
よ		
い		
と		
す		
も		

IX 中学校 結果記入票

問題号	反応	判定			採点
		正	誤	無他	
1	(一)	1			2
		2			
		3			
		4			
		5			
	(二)	1			
		2			
		3			
		4			
		5			
	(三)	1			5
		2			
		3			
		4			
	2	1			3
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
3	(一)	1			4
		2			
		3			
		4			
	(二)	1			
		2			
		3			
		4			
	(三)	1			
		2			
		3			
		4			

問題号	反応	判定			採点
		正	誤	無他	
4	(一)	1			2
		2			
		3			
		4			
		5			
	(二)	1			
		2			
		3			
		4			
		5			
	(三)	1			
		2			
		3			
		4			
		5			
(四)	1				
	2				
	3				
	4				
	5				
(五)	1				
	2				
	3				
	4				
	5				
5	1			6	
	2			12	
	3				
	4				
	5				
6	(一)	1			3
		2			
		3			
		4			
		5			
	(二)	1			
		2			
		3			
		4			
		5			

問題号	反応	判定			採点
		正	誤	無他	
6	(一)	1			
		2			
		3			
		4			
		5			
	(二)	1			
		2			
		3			
		4			
		5			
7	1			1	
	2				
	3				
	4				
	5				
	6				
	7				
	8				
	9				
	10				
8	1			1	
	2				
	3				
	4				
	5				
	6				
	7				
	8				
	9				
	10				
計					

中学校

年 組 番

男 ・ 女

氏名

(1) 反応の記入

たとえば、①についていえば、表のように、用紙の上の方に被験者が○や×をつけた、その通りに記入する。したがって○を一つだけつけるように書いてあるにもかかわらず、二つつけた場合は、この欄には二つつけておく。

ある項について無反応の場合は空欄となる。

⑦⑧の漢字に対する反応のところは、正誤にかかわらず、手をつけたものには√じるしをつける。

(2) 判定の記入

別項の「正答表」にしたがって次表のように記入する。

次のように、一つだけ○をつけるべきであるのに二つ以上つけた場合は、その一つが正しい場合でも「無・他」の欄に記入する。

問題①の(≡)の○×をつける問題については全部に○、全部に×をつけるものがあったとしても、それはでたらめなつけ方をしたのでなく、そう考えてつけたものとして正答表にしたがって判定する。

問題⑤については、反応の(3)を正答、(2)を正答に準ずるものと見ることになっているから、どちらも判定の正の欄に記入することとし、記号は√を正答、▽を正答に準ずるものとする。

問 題		反 応	
一	(→)	1	
		2	○
		3	
	(⇒)	1	○
		2	
		3	
二		1	○
		2	○
		3	×
		4	×
		5	×

問 題	反 応	判 定		
		正	誤	無・他
(→)	1			
	2	○		√
	3			
(⇒)	1			
	2	○		
	3	○		√
(≡)	1	○	√	
	2	○		√
	3	×		▽
	4	×		▽
	5	×		▽

(3) 採点の記入

若し採点をする場合は次のような重みづけをする。

	配点	満点
①--(→)(⇒)	各 2	4
二 1 2 3 4 5	各 2	10
三	各 5	5
② 1--15	各 1	15

③(一)(二)(三)	各 4	12
④(一)(二)(三)(四)(五)	各 2	10
⑤ 3 につけた者	12	12
2 につけた者	6	
⑥(一)(二)(三)(四)	各 3	12
⑦ 1—10	各 1	10
⑧ 1—10	各 1	10

計 100

(4) 注意事項 結果記入票には生徒の番号氏名の記入を忘れないようにすること。

X 中学校 問題の構成と結果解釈の要領

問題番号	仕 事	材 料	検 査 する 学 力
①一、二	開 き と り	工場安全週間の説明と指示	(一) 要点を開きとる (二) 1, 2, 3, 4, 5 正しく開きとる
三	話 し 方	〃	(三) 聞いたことを他人に伝えるときの心得
②	作 文 完 成	短い紀行文・手紙・随筆・記録・議論の文	(一)~(四) 文のぬけているところをできるだけ早く正しく仕上げる
③	文 章 読 解	「あきめくら」について論じた学問的解説文	(一) 文脈を正確につかむ (二) 叙述を正確につかむ (三) ねらいをつかむ
④	文 章 読 解	「ゴッホ」に関する随筆的評論	(一)~(四) 文脈に注意して読む
⑤	文 学 鑑 賞	「風」を主題にした四つの詩	詩の感情・調子をつかむ
⑥	文 法	必要な語をふくむ短い文	(一)~(四) 「と」「の」「でも」「よう」の使い方の異同を見出す
⑦	漢 字 の 読 み	教育漢字とそれ以外のやさしい漢字	1~10
⑧	漢字の書きとり	教育漢字	1~10
計 8 題			計 46 項

(2) 解釈の要領

結果の解釈については、問題構成にしたがってみてゆくべきであるが、ここで調査したらよいと思うことは特に次のようなことである。

(1) 個人および学級の平均点数

(2) どの方面がよくでき、どの方面がよくできないか……①から⑧までどれも半分ぐらいできるような問題である。

(3) 問題①については、一、二は聞く方であり、三は話す方であって、この場合の話すは、聞くに依存しているが、また別の能力が加わっているから、能力としては区分しなければならない。

(4) 問題群に分けてみると次のようになる。

③+④+⑤=読みを中心とする能力

①+②+⑥=読み以外の言語能力

⑦+⑧=漢字力

これによって学力の型を調べるべきである。

(5) ①の聞きとり、⑤の文学鑑賞、⑥の文法については、他の能力との関係がどうなっているかについて研究することが望ましい。

(6) 学級として調べる場合、中学校では特に能力の劣った者がいて、平均点を悪くするから、得点の分布や標準偏差も調べなければならない。

以上の問題についての全国的な実施の結果は、中学校の部についてはだいたい統計ができあがったが、小学校の方がまだできていない。それができあがったところで、上に書いた方針にしたがって解釈を加え、報告書を作成することになっている。

(興水)

文字配列の合理化に関する実験的研究

A. 前年度までの調査研究のあらまし

この研究は昭和24年来の継続研究である。

調査研究はこれまで、中・高校生と対象とした集団黙読テストと大学生を対象とした読書のさいの眼球運動の記録実験とを進めてきた。

集団テストでは昭和25年度、同26年度、同27年度の研究の結果、文字配列はたての方がよこより読みの能率が高いが、学年が進むにつれて、その差はせばまる。逆に行の長さの効果は学年が進むにつれて著しく、5字詰から40字詰までにはふたつの読みの能率の高い字詰の山が見える。全体的には短い字詰ではよこ、長い字詰ではたての方が読みやすいというめやすをたてた。

眼球運動の記録実験は昭和24年度来、義眼も動くという見通しから義眼者を対象とし、そのための実験装置を工夫して、ついに完成した。昭和27年度には、さらに Ossicilograph 用小鏡片を Contact-lens につける方法を取り、はじめて一般人を被験者として読む時の眼球運動を記録することができたが、文字配列の効果を見るための統計的処理はしないで、結論は次年度に託した。

B. 本年度の計画

文字配列の効果を量的に、集団テストによってみようとする研究は昨年度までで結論がでているので、これまで装置の完成に追われて実験結果が出ないでいた眼球運動の記録実験だけを、前年度よりもさらに被験者の数を増して実験し、文字配列の効果を質的にみ、集団テストの結論とあわせて、この種の研究に必要な基礎的資料を提供しようとした。

別に、米国から Master-Ophthalmograph が入荷することになっていた

から、これを操作してみて、できれば Contact-lens による実験装置と比較をする。この Ophthalmograph はよこ読みの機械であるが、装置を少し改造することによって、あるいはたて読みの眼球運動が記録できるものかどうかについても考えようとした。

注 1) この研究は文字配列の合理化を、被験者の読書量と眼球運動とから導かれる読みやすさを基準として考えたが、さらに、文の理解度や読者による疲労度の測定から読みやすさを考えることとあわせて、各文字配列の書きやすさの面も考慮しなければならない。

- Carmichael and Dearborn, 1947. Reading and visual fatigue.
- Tinker, M. A., 1945. Reliability of blinking frequency employed as a measure of readability. J. Exp. Psychol. 35. 418-424.
- Dearborn, W. F., 1940. On the possible relations of visual fatigue to reading disabilities. Sch. and Soc. 52. 532-536.

C. 実 施 状 況

実験は昭和28年12月までに13名の被験者について実験し、昭和29年1月から3月にかけて記録図の分析と研究のまとめをした。

Master-Ophthalmograph は昭和28年5月に入荷した。装置の操作にも慣れて、この研究にうまく利用できると考えられるに至ったので、それからは17名の被験者について実験し、Contact-lens による実験結果とあわせて文字配列の効果をみた。

D. 研 究 成 果

a. 実験研究目標

たて、よこ、行の長さの各文字配列の文を読む時の眼球運動を記録して、これを分析し、文字配列の効果と要因を発見する。

このために第1実験と第2実験を行った。

<第1実験>

b. 装 置

Contact-lens による実験装置

Ossilograph 用の小鏡片つきの Contact-lens を眼球にはめ、これに平行光線をあてて、眼球運動を反射光線によって Bromide に記録する。

c. 実 験 者

草島時介, 村石昭三

草島時介は昭和28年9月、転任したので、所員、興水実があらたに参加した。なお、東京教育大学教授、医博、大山信郎氏には前年度にひきつづいて、実験に援助、協力をいただいた。

d. 被 験 者^{注1)}

大学心理学科学生 13名(女子・2名) 正常の視力を持つ者。^{注2)}

e. 実 験 場 所

東京教育大学雑司谷分校 心理学実験室

f. 実 験 材 料 文

中学2年生程度^{注3)}の文章を4号活字大、6.0mm行間隔、楷書、黒インク、わら半紙の謄写印刷^{注4)}、8字詰^{注5)}、12字詰、15字詰、20字詰、25字詰、30字詰、35字詰^{注6)}、40字詰のたて、よこ。計16種の文字配列にした。

注 1) 被験者数13名は必ずしも満足できる人数ではないが、結果を事例的に処理して行けば、それでさしつかえないと考えた。被験者の選択条件には、大学生であれば、この研究の被験者として、特に読書能力を調べるまでもなく等質と考えたが、結果的には Moss が被験者の学生に対して、視力と読書能力とにより条件を一定にしたように、被験者の選択にさらに大きな考慮を払うべきであった。

注 2) 大学生を被験者に選んだ理由は、機械装置そのものから来る制約を受けることが最も少ないと考えられることと、読書技能が完全に成熟し、たて、よこの読書経験が概して等質であり、知的能力にも高い等質性が見られることによる。そして、集団テストでは被験者を中・高校生にしたから、それらに対する各文字配列による読みの発達をみ、文字配列の効果を推定しようとしたの

である。

- 注 3) 文章にくせのないことと、内容的にやさしいこととは、文字配列効果を概観するためには必要な条件である。ある傾向を持った難解な文章は、読者に対してそれぞれ異った反応を生じ、そのために文字配列の効果を概観的にみるには適さない。Tinker は大学生を被験者に Champman-Cook Speed of Reading Test (適用学年 4 年—8 年) から 10 箇の、30 語よりなる文章を材料とした。Moss はニュース、情緒性のないものを材料文とした。
- 注 4) 原則的には第 2 実験で使用する印刷術、9 点、3.5mm 行間隔にすべきであるが、謄写印刷のため、原紙の様式と読みやすいということに従って 4 号活字大、6.0mm 行間隔とした。
- 注 5) 8 字詰から 40 字詰にわたる各字詰の決定は最適の行の長さをみつける一応のめやすとしてたてたもので 5 字詰間隔とした。8 字詰、12 字詰の決定はこの辺に最適文字配列の存在を仮定したことによる。結果的にはこの仮定は必要なかった。
- 注 6) 実験前には 40 字詰までに最適文字配列が見られようと考えていたが、45 字詰、50 字詰とさらに押し広げるべきであった。なお、各字詰の長さを mm で示せば次のようになる。8 字詰 (40mm) 12 字詰 (60mm) 15 字詰 (75mm) 20 字詰 (100mm) 25 字詰 (125mm) 30 字詰 (150mm) 35 字詰 (175mm) 40 字詰 (200mm)

読書テストに使用した文章

姓 名 () 検 査 日 (昭和 年 月 日)
 学 校 名 (学校) 生年月日 (昭和 年 月 日)
 学年と組 (年 組) 性 別 (男 女) 一方を○でか
 こみなさい。

練 習

私たちの学級では、研究発表をするために、まえからボール紙のものでよいから黒板がほしいと思つていました。このことを父兄の方におたのみしてみましたところ、その望みがかない、りっぱな小黒板が 8 枚できあがりしました。このようにしてできたたいせつな黒板を私たちはいちども使わずにあけておかないようにいっしょうけんめい努力しています。この黒板は、ひとりで研究した結果をまとめ、各グループや各個人で発表するようなときに使います。私たちは教室のうしろがわの黒板に書かれた内容を研究したり、これに対する意見を

たたかわしたりします。発表の日には、それぞれ黒板を持ちよって学習するのです。

1. 私たちの学級にも小黒板があればたいへん便利なので、近く買うことになっています。
2. 私たちの学級にできた小黒板は勉強するのにたいへん便利です。

1. 花子はいじわるなねえさんのために、朝から晩まで、つらい仕事をしなければなりません。朝は日の出る前におきて、水をくんだり、火をおこしたり、せんたくをしたりしなければなりません。そればかりか、あねは手をかえ品をかえて、いじめたり、からかったりしました。ですから夜になると、花子もうすっかり働きつかれてしまうのです。といて、ねるにもベットがありませんから、かまどのそばの灰はいの中ころがって寝なければなりません。そのため、いつもほこりだらけの、きたならしいかっこうをしていましたので、うちのものが花子を、灰はいかぶりと呼ぶようになりました。

1. 花子はいためつけられた女中のように毎日働きました。
2. 花子は毎日苦しいようでもたいへんたのしくすごしました。

2. 登校にはまだ 30 分あります。5 月の朝の風が、やさしくカーテンをゆすっているまどのそばで、るり子はなにをするでなく、おとなりの家にばかり気をとられていました。るり子には、おとなりの太郎君の生活が、あまりにいたましく思えたのです。もともとあまりゆたかでない生活だったのに、このあいだ太郎君のおとうさんが電車をおりるはずみに足をくじいたので、ずっとここについたままなのです。それからというものは、太郎のうちの生活は、いっそうまずしくなりました。

1. るり子はあまり働かない太郎のうちのびんぼうなのはあたりまえだと思つた。
2. るり子は、太郎のうちのくらしがなんとかならぬものかと心配していた。

3. 馬の平均年齢は、だいたい14年から15年くらいが常識とされているが、今年54さいになる老馬が今なお無事で長生きをしているというニュースがある。デンマークのラーセンさんの持ち馬「トール」は、からだはあまり大きくないが、そのじょうぶなことは、ラーセンさんが今から51年前に買ってから、ただのいちども病気をしたことがないというほどである。最近めでたく54回めのたんじょう日をむかえたわけだが、もちろん仕事の方は全くしないで、毎日、緑の牧場で立ったり、しゃがんだりして遊んでいる。頭の働きは犬なみで、ラーセンさんが馬の名前を呼ぶと、すぐしっぽをふってやってくるそうだ。
1. その馬はまだそれほど年をとっていないから、元気で働いています。
 2. その老馬はまだ元気ですが仕事はしていません。
4. 徳川時代のあるえらい天文学者が、ある時、つりに出かけひとりの船頭に船を出させようとした。ところがその船頭のいうには、「今はこんなに暗れていますが、海上に変な雲がひとつでていますので、昼すぎにはかならず大荒れとなりましょう。その上、きょうは立春の日から数えると、ちょうど210日になります。私の50年来の経験からみますと、立春から210日めごろから220日めごろにかけては、かならず大あらしがあります。それできょうは船を出すのはやめた方がよろしいと思います。」と。この学者は老船頭のいうとおり、思いとどまってうちに帰りましたが、果たして大あらしになりました。このふたりのおもしろい話によつて、二百十日がきめられたと伝えられています。
1. お天気のことと老船頭の言ったことはうまくあたりました。
 2. この学者と老船頭とは、お天気のことと話がなかなかまとまりません。
5. ぼくのクラスでは、授業中静かにするために、授業を熱心にとすること、となり同志話をしないこと、いたづらをしないことの3つを約束した。すると別の級の人に来てそんなことはあたりまえのことだと言っけなした。ほんとうにあたりまえのことだが、果たして10人が10人、こんなあたりまえの

ことができているだろうか。これはぼくらだけでなく、広く社会の人々でも、できない人たちが多くと思う。よく考えてみると、このあたりまえのことぐらい実行するのにむずかしいことはないだろう。どんな人でも、このあたりまえのことができなくては、りっぱな人になれないと思う。

1. 人よりえらくなるには、特別なことができなくてはむずかしい。
2. あたりまえのことでも実行するとなると、やさしいものではない。

g. 読書条件

黙読、内容を理解しながら普通の速さで読む。読書距離は約30cm。
 暗室。ランプは安全電球の明光。^{注1)} 平行光線の光源は500W。^{注2)}
 Bromide の回転速度は毎秒3cm。^{注3)}

h. 実験手続き

予備実験をして本実験に移る。予備実験の時は Bromide に眼球の運動を記録しない。実験がすんでから被験者は実験者の質問に対して内省報告^{注4)}をする。記録を終った Bromide は、現像、定着の作業をへて分析をくわえる。

注 1) 通常の読書時の明るさには、やや劣るが読書には支障を生じない。安全電球は明光と安全光とある。

注 2) 500Wの光線は被験者にまぶしすぎることはない。山本正吾の実験は500Wを使用。

注 3) Bromide 一枚の回転時間は約35秒であり、これが被験者の読みの眼球運動記録時間となる。この記録時間はいささか短時に失し、客観的な妥当性の高い記録を得ることは困難であり、文字配列の効果をみるための眼球疲労度の測定をするには無理がある。普通、眼球運動の個人的診断には20行以上の記録が必要とされるが、集団的診断には30秒前後の記録でも一応許される。

Tinker, A. M., 1934. Reliability and validity of eye-movement measures of reading. Psychol. Bull. 31. 741.

なお、Bromide はよこ読みにはたて回転、たて読みにはよこ回転とし、回転方向に、上下、左右が試みられる。たとえば、よこ読みのさい、たて下方向回転は材料文の行間隔の幅だけ減じて行間運動が記録され、上方向回転は材料文のそれだけ実際以上に増して記録される。本実験ではたて下方向回転、よこ左方向回転。

Tinker, M. A., Apparatus for recording eye-movements. 1931. American J. of Psychol. 115-118.

注 4) 内省報告の求めかた。どんな内容の文であったか、読みつかえた所があったか、意味がわからなかった所があったか、どうしてそんなことがおきたか、等。

<第 2 実験>

a. 装 置 Ophthalmograph^{注1)}

Master-Ophthalmograph は American Optical Company 製の眼球運動記録機で読む時の両眼の角膜に左右から光線 (5W) をあて、この反射光線をレンズに収斂して回転するフィルムに撮影して、眼球運動を記録するのである。

フィルムの現像、定着の作業は簡便で自動的に行われ、撮影の 8 分後には記録図の分析ができる仕組みになっている。普通の明るい室で気楽に誰もが実験できるのが、この機械の大きな特色である。実験用フィルムは、普通、Ophthalmograph のために特別に作られた Eastman Kodak. 35mm. Super XX. パンクロ安全フィルム^{注2)}である。

注 1) 眼球運動記録装置の種類とそれらの特色については以下の文献を参照されたい。たとえば、Karlsruhe は Ophthalmograph の実験上の欠点として、頭部運動が禁止される、長い文章が読めない、光線で読みがさまたげられる点をあげる。このような撮影法の欠点に対して、近來の電子工学の発達により、眼球の電位差を記録する方法が行われている。

- Broom, M. E. and others., 1951. Effective reading instruction. McGraw-Hill Book Company.
- Karlsruhe, J. S., 1940. The perflue eye-camera; a practical apparatus for studying the attention value of advertisements. J. Appl. Psychol., 24. 417-440.
- Broom, M. E., 1940. The reliability of the readinggraph yielded by the ophthalmograph. Sch. and soc. 52. 205-208.
- Gilbert, L. C. and others., 1942. Reading before the eye-movement camera versus reading away from it. Elem. Sch. 42. 443-447.
- Luckiesh, Mand Moss, M. K., 1941. The extent of the perceptual span in reading. J. Gen. Psychol. 25. 267-272.

注 2) フィルムは感光度の高いものであればよく、本実験ではドイツ製の Issa Pan Film を併用した。

c. 実 験 者

第1実験に同じ。

d. 被 験 者

大学心理学科学生 17名 (女子・3名) 正常の視力を持つ者。^{注1)}

e. 実 験 場 所

国立国語研究所。

f. 実 験 材 料 文

小学4年教科書の文章を9ポ活字、3.5mm行間隔、明朝活字、黒インク、白紙。8字詰。^{注2)}12字詰。^{注3)}15字詰。20字詰。25字詰のよこ。計5種の文字配列にした。

注 1) 被験者中、岡田は視力、左右0.3のため15cmの読書距離にした。

注 2) 文字配列は第1実験に準ずべきであったが、はじめは副次的程度にこの実験を考えていたので、一応、一昨年度に使った材料文に限定した。各字詰の長さをmmで示せば次のようになる。

8字詰 (25mm)	12字詰 (39mm)	15字詰 (49mm)
20字詰 (64mm)	25字詰 (82mm)	

注 3) Ophthalmograph はよこ読みの眼球運動しか記録できない。

g. 読 書 条 件

黙読。内容を理解しながら、普通の速さで読む。読書距離は約20cm。正常の明るい部屋。ランプは6 candle。平行光線の光源は6 candle。フィルムの回転速度は毎秒0.5インチ。^{注1)}

h. 実 験 手 続 き

第1実験に同じ。

注 1) Film は18インチ回転すれば自動的に停止する。けれども必要に応じて継続して長い読書時間の眼球運動を記録することもできる。回転方向はたて上方向回転。

〔材料文の一部〕

二ちょう買いました。わたくしたちは家に帰ると、台所でさやえんどうのすじを取り始めました。そこへねえさんが学校から帰って来ました。かばんのほか、ふろしきづつみをかかえていました。あけてみると、肉とたまごと、それに赤いきれいないちごがありました。「わあ。すごい。」まさおちゃんはそう言って、食べたそうな顔をしました。ねえさんはおかあさんに、「ごちそうができるまで、見にいっしょにいらないでね。」と言いながら、エプロンをかけました。ねえさんは中学二年生ですが、いつもおかあさんの

今までわたくしたちを育ててきてくださったおかあさんに、そして世界じゅうのおかあさんたちに、心からおれいを言っておいわいをする日です。ほんとうは五月の第二日曜日が母の日なのですが、うちでは、あすはおとうさんが旅行にお出かけになるので、一日くり上げてきょうにしました。そして、ゆうべ三人で相談して、きょうの夕ごはんをわたくしたちだけでこしらえて、おかあさんにごちそうしてあげよう、ということに決めたのです。おかあさんのようにじょうずではありませんが、わたくしたちがいっしょけんめい

そしてしばらく考えてから、「ぼく、何をあげたらいいかな。うん、この間買ったいい消しゴムをあげよう。」と言いました。

「ぼくもあげるんだ。ぼくはろう石にするんだ。」善ちゃんがそう言うと、「あははは。」と、ふたりの小さいにいさんたちはわらいました。そして、周ちゃんはいかにもにいさんらしい

にいさんは終りまで見てしまうと、しゃんちょうをひざに乗せたまま、もう一どばらばらと見かえしました。「よくこんなにうまくできたものだね。だれがかいたの。」「絵はぼくがかいたの。こんなにうまく紙を切つたり、とじたり、名前を書きこんだりしたのは順ちゃんです。それから善ちゃんも道具を運ん

i. 実験結果

第1実験と第2実験で得た記録図の枚数は次の通りである。

〔表 1〕

4号活字大, 6.0mm 行間隔, 楷書, 黒インク, わら半紙, べた組み, 謄写印刷, 中学生程度の文章。Contact-lens による。

文配	被	半	押	飯	根	萩	平	加	深	間	志	服	五	田	計
た	て	8	8	8	9	8	9	8	8	4	8	8	8	8	102 注1)
よ	こ	12	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	6	106
計		20	16	16	17	16	17	16	16	12	16	16	16	14	208

〔表 2〕注2)

文配	被	半	押	深	計	
た	て	5	0	0	5	9ボ活字, 3.5mm行間隔, 明朝活字, 黒インク, 白紙, べた組み, 小学4年生程度の文章。Contact-lens による。
よ	こ	16	5	2	23	
計		21	5	2	28	

〔表 3〕

9ボ活字, 3.5mm行間隔, 明朝活字, 黒インク, 白紙, べた組み, 小学4年生程度の文章。Ophthalmograph による。

文配	被	樋	服	志	間	加	岡	上	飯	池	川	松	半	山	押	桑	五	田	計
よ	て	5	5	1	5	5	5	5	5	5	5	5	2	4	3	5	4	4	73 注3)

〔表 4〕注4)

文配	被	志	川	計	
よ	こ	1	2	3	4号活字大, 6.0mm行間隔, 楷書, 黒インク, わら半紙, べた組み, 謄写印刷, 中学生程度の文章。Ophthalmograph による。

注1) 注3) 被験者によつては記録図数が不足しているものがある。後の統計処

理で分析における欠測値のとり扱いかたには、特に考慮を払わなかつた。

注2) 注4) この実験資料は Contact-lens, Ophthalmograph の装置のちがいに
よる記録結果のちがいを考えるために使つた。

○分析項目^{注1)}

1. 読書量^{注2)}——1秒間の読字数平均で示す。
2. 停留の頻数^{注3)}——100字に対する停留頻数平均で示す。
3. 停留の時間^{注3)}——1停留の所要時間平均で示す。単位は σ 。
4. 逆行運動の頻数^{注4)}——100字に対する逆行頻数平均で示す。
5. 一掃運動後の不適応凝視の頻数^{注5)}——1行に対する不適応凝視の頻数平均
で示す。

注1) 項目の決定は Paterson, Tinker, Luckiesh, Moss に従い、上記項目

1. 2. 3. 4 をきめ、昨年度までの実験結果から、あらたに項目5を加えることが
適当と考えた。ここで最適文字配列に必要な条件として、読書量が多く、
停留の頻数が少なく、停留の時間が短く、逆行頻数が少なく、不適応凝視の
頻数が少なく、行間運動の正確さ等の諸点を考えた。さらに、眼球運動のリズ
ム、規則性を知るためには材料文の各行別の読みにおける眼球運動の安定性を
みる必要があると考えたが、記録時間が短いため、この分析は十分に満足さ
れなかつた。たとえば40字詰などは2—3行の読みしか記録できない場合もお
こる。

○ Paterson, D. G., and M. A. Tinker., Eye-movements in reading
optimal and non-optimal typography. J. Exp. Psychol., 1944. 34.
80-83.

○ Paterson, D. G., and M. A. Tinker., Influence of line width on eye
-movements. J. Exp. Psychol., 1940. 27. 572-577.

○ Luckiesh, M. and F. K. Moss., The extent of the perceptual span
in reading. J. Gen. Psychol., 1941. 25. 267-272.

注2) 前年度の研究のまとめでは読速度 (Reading Speed) としたが、普通の
読書状態を条件とするためから、読書量 (Reading Rate) と改めること
が適当と考えた。

注3) 前年度の研究のまとめでは1停留の把握字数平均としたが、理論上、字
数に対する停留頻数平均と改めることが適当と考えた。別に、1停留の Span
と考えることは許される。

〔表 5〕

○眼球停留の分布状態

注 各番号は各行の停留順序を示す。

———— 停留 …………… 不適応凝視 …………… 逆行

¹わけだが、²「もちろん³仕事の方は全
¹四回²めのたんじょう³日を⁴むかえた
 は、¹「²ラ³ー⁴セン⁵さんが、⁶今⁷か⁸ち⁹五¹⁰十
 きくないが、²その³じょう⁴ぶなこと
 「¹十²」は、³か⁴ち⁵だはあ⁶まり夫
 マ¹ー²ク³のラ⁴ー⁵セン⁶さんの持⁷ち馬⁸
¹いると²いうニ³ュ⁴ース⁵が⁶ある。デ⁷ン
 老²馬¹が³今⁴な⁵お⁶無⁷事⁸で長⁹生¹⁰きを¹¹して
 て¹いるが、²今³年⁴五⁵十⁶四⁷さいにな⁸る
 年¹か²ち³十⁴五⁵年⁶く⁷ら⁸い⁹が¹⁰常¹¹識¹²と¹³さ¹⁴れ
 三、馬の平均年齢は、だいたい十四

注1)

(被験者: 加賀, たて 15 字, 21 秒 0, Contact-lens による)

1 花子は¹い²じ³わ⁴る⁵な⁶ね⁷え⁸ぎ
 んの¹た²め³に、朝⁴が⁵ら⁶晩⁷まで
²ら³い⁴仕⁵事⁶を⁷し⁸な⁹けれ¹⁰ば¹¹な
 り¹ませ²ん³で⁴し⁵た。朝⁶は⁷日⁸の
¹出²る³前⁴に⁵お⁶も⁷て、水⁸を⁹く¹⁰ん
²せ³り、⁴水⁵を⁶お⁷こ⁸し⁹せ¹⁰り、¹¹せ
 ん¹た²く³を⁴し⁵たり⁶し⁷な⁸けれ⁹ば
 せ¹り²ませ³ん。そ⁴れ⁵ば⁶か⁷り⁸か

(被験者 根本 よこ 12字, 21 秒 0, Contact-lens による)

注 4) 前年度の研究のまとめでは1逆行の字数に対する割合としたが、統計上、100字に対する逆行頻数と改めることが適当と考えた。前年度のまとめかたでは、逆行がおこらぬ場合は ∞ となり、全体の統計をとる上に支障をきたす。

注 5) 不適応凝視は行の先端の予想される凝視点に対する極端な超評価、低評価を含む。この操作は、眼球停留の分布と読まれた材料文との照合によって行われ発見される。かかる照合の操作は一例としてあげた左表、眼球停留の分布状態を参照されたい。

◎たて、よこの文字配列による読みの効果の比較

〔表 5〕

4号活字大、6.0mm行間隔、楷書、黒インク、わら半紙、べた組み、謄写印刷、中学生程度の記事。Contact-lens による。

分析項目	文字配列	た て	よ こ
1秒間の読字数平均 (S. D)		字 8.03 (2.72)	字 ^{注1)} 8.03 (2.58)
100字に対する停留頻数平均 (S. D)		35.32 (9.95)	37.83 (12.35) ^{注2)}
1停留の停留時間平均 (S. D)		σ 390 (79.4)	σ ^{注3)} 364 (63.2)
100字に対する逆行頻数平均 (S. D)		1.39 (1.84)	1.75 (2.14) ^{注4)}
1行に対する不適応凝視平均 (S. D)		0.42 (0.47)	0.52 (0.52) ^{注5)}
		N=99	N=102 ^{注6)}

注 1) 山本正吾の実験では 7.47字。

注 2) 山本正吾の実験では 40.00。Tinker の実験では 1.5語に1停留。

注 3) 山本正吾の実験では 336σ 。Tinker の実験では 230σ 。

注 4) 山本正吾の実験では 3.61。

○山本正吾, 1935, 読書と眼球運動についての一実験。心研。10. 773-787.

平均値が山本の結果にくらべて甚だ小さいことは、本実験の材料文が比較的
に内容の容易なためと思われる。

注 5) 不適応凝視の偏差値が平均値より大きいことは、被験者の個人差の甚だしさを示すものであり、本実験の結果の考察には単に統計処理によらず、各被験者個々にわたる事例的研究が必要とされる。

注 6) たて、よこの記録回数不一致は、被験者の都合で全部の文字配列について実験できなかつたり、たとえ、実験しても不鮮明な記録図のため分析できなかつたことによる。

〔表 6〕

被験者別にみた各字詰によるたて、よこの文字配列の読書量の優劣差反応分析表

たての優位には○印、よこの優位には×印、優劣のない時には△印。

空欄は比較する記録図の欠けていることを示す。

文配 被	詰								計		
	8字	12字	15字	20字	25字	30字	35字	40字	○	×	△
半	○	×	×	○	○	×	×	×	3	5	
押	○	○	○	×	○	×	○	○	6	2	
飯	×	×	○	×	×	○	×	×	2	6	
根	○	○	○	○	○	○	○	○	8		
豚	×	×	×	○	×	×	×	×	1	7	
平	○	○	×		○	○	○	○	6	1	
加	×	○	○	○	○	○	○	○	7	1	
深	×	×	×	○	×	○	×	○	3	5	
間	×	○	×	△					1	2	1
志	×	○	×	×	×	×	×	×	1	7	
服	×	×	×	×	○	○	○	○	4	4	
五	×	○	○	○	×	○	×	○	5	3	
田	×	×	○	○	○	○			4	2	
○	4	7	6	7	7	8	5	7	51		
計 ×	9	6	7	4	5	4	6	4		45	
△				1							1

1. たて、よこの読書量の差はなかった。1秒間の読字数平均は共に8.03字で、S.Dはたての方が0.14字だけ大きかった。

2. 眼球の停留、逆行、不適応凝視の頻数は、たての方が少なく、停留の時間はよこの方が短かった。

3. たて、よこの読書量優劣差反応分析表によれば、たての方がまさって

いた。行の長さについては短行ではよこ、長行ではたての方がまさる傾向があった。

j. 結果に対する考察

1. たて、よこの読書量に差がないことは、前年度の結果とちがっている。前年度の集団テストではたてがまさり、有意差があった。そうして、学年が発達するにつれて、よこの読書量の進歩がいちじるしかった。このことは完全な読書技術を修得しない中・高校生では読書経験がたての方が多いためであり、もちろん、各年度の実験調査方法のちがいを考慮にいれなければいけないけれども、本年度のかかる結果は被験者である大学生のよこ読みの経験が相当に増しているためであると考ええる。

2. 眼球の運動状態に見られるたて読みの比較的長い凝視で、よこよりも狭い可読視野の短所を補い、ゆっくりと少ない停留数で飛躍する規則性と、よこ読みの停留時間の短い、早い飛躍が停留数を増し、逆行数と不適応凝視数を増大させる不規則性ととのちがいは、眼球の生理的要因によると考える。たて読みのさいの長行の優位と、よこ読みのさいの短行の優位性も、両眼の水晶体の調節、眼筋の呼応の難易等にからまる生理的要因のためである。

3. 行の末端から次行の先端の凝視点に移るさいに生ずる眼球の不適応凝視^{注1)}は読書量にさほど影響を与えていない。

4. 中・高校生では、たて読みの読書量がよこ読みよりまさるが、学年が発達するにつれて、その差がせばまり、大学生で優劣差がなくなることは、読書技術が完成し、経験的因子を捨てた場合に、たて、よこの文字配列の優劣差はないと推定^{注2)}することができる。眼球運動の状態からは、一応、生理的にたての文字配列がまさるように思われるが、読書量に高い相関を示す停留の頻数と時間、さらにそれから平均値へのゆれに特別にたて、よこの優劣差がないことから、読みにおけるたて、よこの文字配列の優劣差はないと考える。

注1) 不適応凝視の頻数は正常の机上で行われる読書では頭部運動が禁止されないから、頻数率は多少減少するものと考えられる。

注 2) 厳密な意味で、文字配列の効果をみる実験条件として被験者の読みに対する経験的因子を捨てておくことはできない。けれども被験者の読みに対する発達曲線、ある特定期間の訓練学習による学習曲線から文字配列の効果を推定する方法は許される。このためには本実験は充分とは言えず、さらに、集団テストに大学生を、記録実験に中・高校生を被験者として研究し、結論を確めるべきであろう。

◎たての各行の長さの文字配列による読みの効果の比較

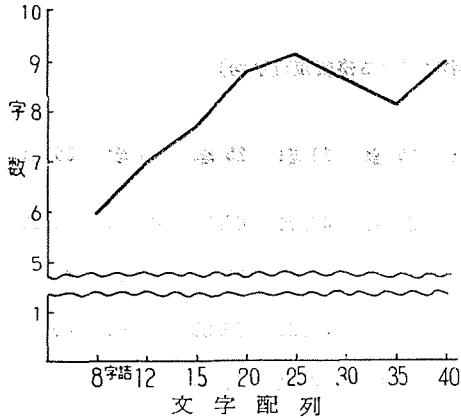
〔表 7〕

1) 読書量 (1秒間の読字数平均)

空欄は記録図数のないことを示す。

文配 被	読								
	8 字	12 字	15 字	20 字	25 字	30 字	35 字	40 字	
半	4.33	4.56	4.91	4.42	3.82	3.95	4.47	4.62	
押	3.77	4.55	5.05	5.30	4.75	3.68	4.42	4.52	
飯	5.34	4.77	7.53	5.33	7.02	6.38	5.19	6.99	
根	6.85	8.14	8.70	10.36	9.90	9.23	10.88	10.06	
荻	7.29	9.18	9.27	10.51	8.81	8.01	5.41	5.65	
平	7.03	7.56	6.95		9.16	7.17	7.01	8.02	
加	4.25	5.83	7.90	9.32	9.55	9.58	10.84	11.11	
深	4.82	8.71	8.14	10.81	8.82	12.68	10.57	12.57	
間	6.08	7.59	7.50	10.26					
志	5.46	7.62	7.02	9.98	8.90	8.61	7.73	11.13	
服	8.50	6.03	8.87	8.51	14.46	12.29	12.80	13.18	
五	4.82	9.26	8.76	8.86	9.31	9.40	8.78	7.87	
田	8.73	6.93	9.90	11.97	15.70	12.99	10.06	13.25	
T	77.27	90.73	100.50	105.63	110.20	103.97	98.16	108.97	795.43
N	13	13	13	12	12	12	12	12	99
M	5.94	6.98	7.73	8.80	9.18	8.66	8.18	9.08	8.03
S. D	1.67	1.52	1.48	2.52	3.12	2.92	2.81	2.94	2.72

図. 1. たての各文字配列による読書量 (1秒間の読字数平均)



〔表 8〕

被験者別にみた各字詰の文字配列による読書量の順位

読書量の最も多い字詰を1とし、最も少ない字詰を8とする。

被験者, 平, 間の兩名は全部の文字配列の記録図が得られなかったので除外した。

被験者	字詰							
	8字	12字	15字	20字	25字	30字	35字	40字
半	5	8	1	4	7	6	3	2
押	7	4	2	1	3	8	6	5
飯	5	8	1	6	2	4	7	3
根	8	7	6	2	4	5	1	3
萩	6	3	2	1	4	5	8	7
加	8	7	6	5	4	3	2	1
深	8	6	7	3	5	1	4	2
志	8	6	7	2	3	4	5	1
服	7	8	5	6	1	4	3	2
五	8	3	6	4	2	1	5	7
田	7	8	6	4	1	3	5	2
T	77	68	49	38	36	44	49	35

〔表 9〕

2) 停留の頻数 (100字に対する停留頻数平均)

文配 被	詰								
	8 字	12 字	15 字	20 字	25 字	30 字	35 字	40 字	
半	41.67	39.53	39.37	45.04	43.29	46.30	42.92	40.16	
押	52.91	50.00	51.81	46.08	53.19	46.73	41.49	42.55	
飯	45.87	45.87	40.00	46.30	33.33	36.50	46.73	46.51	
根	28.88	30.03	25.00	24.91	25.97	30.30	23.15	25.84	
狹	32.79	26.95	30.39	22.83	32.89	33.03	31.65	31.06	
平	43.67	44.05	50.50		42.02	53.48	50.00	48.08	
加	61.73	51.28	39.22	30.03	26.67	30.00	24.15	29.24	
深	57.80	38.31	34.72	28.01	31.65	25.00	29.33	26.25	
間	28.17	29.07	28.57	24.21					
志	46.08	39.84	37.17	27.47	30.67	34.13	34.25	29.15	
服	29.15	32.36	30.03	28.73	19.05	23.98	21.55	23.87	
五	41.67	29.24	31.15	27.47	37.88	32.26	37.74	34.96	
田	31.25	29.15	26.67	22.78	23.98	25.00	31.55	22.22	
T	541.64	485.68	463.60	373.86	400.59	417.01	414.56	399.89	3496.83
N	13	13	13	12	12	12	12	12	99
M	41.66	37.36	35.66	31.16	33.38	34.75	34.55	33.32	35.32
S. D	11.20	8.55	8.90	10.85	8.95	10.00	8.75	8.85	9.95

〔表 10〕

3) 停留の時間 (1 停留の所要時間平均)

単位は σ で示す。

文配 被	8 字	12 字	15 字	20 字	25 字	30 字	35 字	40 字	
半	550	556	520	500	604	550	520	540	
押	500	440	380	400	396	582	546	521	
飯	408	458	332	405	427	392	413	337	
根	526	409	460	394	388	357	398	385	
荻	418	404	355	416	345	374	370	423	
平	326	300	266		260	260	265	261	
加	380	335	323	358	392	346	382	308	
深	360	300	355	331	358	315	323	303	
間	584	453	342	403					
志	397	330	384	365	367	339	377	307	
服	403	511	375	409	363	339	358	318	
五	498	370	366	411	284	330	303	363	
田	367	494	382	392	265	308	318	335	
T	5717	5360	4860	4784	4449	4492	4593	4401	38616
N	13	13	13	12	12	12	12	12	99
M	440	412	374	399	371	374	383	367	390
S. D	80.8	79.8	53.6	37.8	88.6	75.4	75.4	85.6	79.4

〔表 11〕

4) 逆行運動の頻数 (100字に対する逆行頻数平均)

文配 被	語								
	8 字	12 字	15 字	20 字	25 字	30 字	35 字	40 字	
半	0	0	0	0	1	0	1	3	
押	1	2	5	3	3	0	1	1	
飯	6	8	3	10	2	2	7	0	
根	0	3	1	1	2	2	1	1	
萩	0	0	1	0	1	3	1	1	
平	0	3	1		0	4	0	2	
加	0	2	3	1	0	1	1	0	
深	5	2	1	0	2	1	0	1	
問	0	0	0	0					
志	1	1	0	1	1	0	1	0	
服	0	4	1	3	0	1	2	1	
五	0	0	1	0	5	3	3	1	
田	0	0	0	0	0	1	0	0	
T	13	25	17	19	17	18	18	11	138
N	13	13	13	12	12	12	12	12	99
M	1.00	1.92	1.31	1.58	1.42	1.50	1.50	0.92	1.39
S. D	1.94	1.79	1.43	2.65	1.43	1.27	1.85	0.85	1.84

〔表 12〕

5) 不適応疑規の頻数 (1行に対する不適応凝視頻数平均)

文配 被	8 字 詰	12 字	15 字	20 字	25 字	30 字	35 字	40 字	
半	0.44	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
押	0.00	0.00	0.86	1.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
飯	0.99	0.00	0.71	0.25	0.43	0.75	1.00	1.00	
根	0.00	0.00	0.13	0.40	0.00	0.60	0.40	1.00	
荻	0.25	0.00	0.09	0.00	1.00	0.75	1.25	1.50	
平	0.78	0.67	1.09		0.00	2.33	2.50	2.33	
加	0.00	0.14	0.11	0.40	1.00	1.67	0.00	0.33	
深	0.20	0.40	0.10	0.40	0.40	0.75	0.75	0.50	
問	0.13	0.00	0.00	0.00					
志	0.25	0.50	0.14	0.00	0.00	0.75	1.00	1.33	
服	0.17	0.22	0.38	0.75	0.00	0.20	0.50	1.00	
五	0.33	0.00	0.00	0.00	0.50	0.33	0.00	0.00	
田	0.00	0.70	0.00	0.11	1.00	0.25	0.00	0.50	
T	2.64	2.63	3.61	3.31	4.33	8.38	7.40	9.49	41.79
N	13	13	13	12	12	12	12	12	99
M	0.20	0.20	0.28	0.28	0.36	0.70	0.62	0.79	0.42
S. D	0.21	0.27	0.28	0.31	0.30	0.28	0.72	0.67	0.47

1. 読書量の多かった字詰からの順位は、25字詰、40字詰、20字詰、30字詰、35字詰、15字詰、12字詰、8字詰であり、8字詰に対する15字詰、20字詰、25字詰、30字詰、35字詰、40字詰と12字詰に対する20字詰、25字詰、40字詰とには有意な差があると認められた。

2. 被験者別に各文字配列の読書量の順位をきめると、40字詰、25字詰、20字詰、30字詰、35字詰、15字詰、12字詰、8字詰となる。

3. 停留の頻数の少なかった字詰からの順位は20字詰, 40字詰, 25字詰, 35字詰, 30字詰, 15字詰, 12字詰, 8字詰である。

4. 停留の時間の短かかった字詰からの順位は40字詰, 25字詰, 30字詰, 15字詰, 35字詰, 20字詰, 12字詰, 8字詰である。

5. 逆行の頻数の少なかった字詰からの順位は40字詰, 8字詰, 15字詰, 25字詰, 30字詰, 35字詰, 20字詰, 12字詰である。

6. 不適応凝視の頻数の少なかった字詰からの順位は8字詰, 12字詰, 15字詰, 20字詰, 25字詰, 35字詰, 30字詰, 40字詰である。

7. 読書量に対する停留頻数, 停留時間, 逆行頻数, 不適応凝視頻数の相関係数はそれぞれ, 0.72, 0.61, 0.001, -0.091^{注1)}であり, 前二者には有意な相関があると認められた。

j. 結果に対する考察

1. 読書量からみると, 25字詰と40字詰が非常に読みやすく, 8字詰, 12字詰がはなはだしく読みにくい。前年度の集団テストの結果でも同様の傾向を示した。

2. 眼球の運動状態からみると, 25字詰と40字詰は停留の頻数と時間が非常に少ないが, 逆行頻数になると25字詰の方がやや多い傾向を示す。全体的に40字詰までの行の長さの中で短行は長行にくらべて, 逆行と不適応凝視頻数は減少しているが, 停留数と停留時間が増大する規則性がある。8字詰と12字詰は共に停留数と停留時間がはなはだしく多い。

3. 逆行頻数と不適応凝視の頻数は読書量に高い相関を示さない。

4. 25字詰と40字詰は読書量では25字詰がまさるけれども, 眼球の運動状態では40字詰が規則性をやや強く示しているように思われる。

5. たての各字詰による文字配列では, 25字詰と40字詰が最も読みやすく8字詰と12字詰が最も読みにくい。

注 1) ピアソンの錯差積法によった。

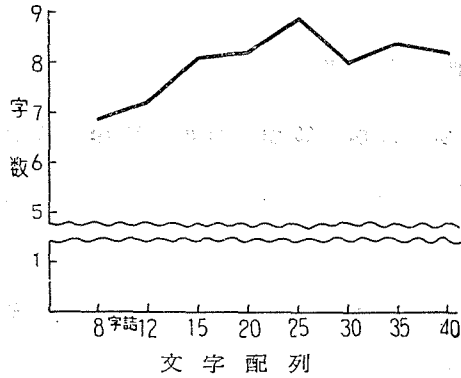
◎よこの各行の長さの文字配列による読みの効果の比較

〔表 13〕

1) 読書量 (1秒間の読字数平均)

文配 被	語								
	8 字	12 字	15 字	20 字	25 字	30 字	35 字	40 字	
半	3.95	5.15	5.20	3.63	2.49	5.93	6.04	7.83	
押	3.61	4.23	4.35	5.75	4.02	4.39	3.61	4.25	
飯	7.30	6.29	7.42	7.88	9.41	6.36	6.87	8.17	
根	3.58	6.00	6.27	6.19	6.25	5.74	7.99	5.40	
萩	11.30	11.35	12.37	10.15	11.51	10.38	9.79	12.43	
平	5.42	6.17	7.54	6.99	7.19	5.64	5.30	6.08	
加	5.37	5.46	7.08	7.36	7.21	8.76	6.53	8.19	
深	8.10	9.77	8.79	9.76	10.55	9.87	11.28	7.80	
間	8.29	5.72	9.04	10.26	11.51	9.09	9.33	9.37	
志	5.92	6.98	10.26	11.37	12.58	13.55	11.08	11.90	
服	9.83	7.95	12.06	10.03	12.28	9.00	12.41	10.47	
五	6.88	7.16	7.59	7.50	12.03	6.17	11.47	7.48	
田	10.26	12.33	8.04	10.00	8.87	9.92			
T	89.81	94.56	106.01	106.87	115.90	104.80	101.70	99.37	819.02
N	13	13	13	13	13	13	12	12	102
M	6.91	7.27	8.15	8.22	8.92	8.06	8.48	8.28	8.03
S. D	2.35	2.35	2.30	2.07	3.30	2.58	2.53	2.36	2.58

図 2. よこの各文字配列による読書量 (1秒間の読字数平均)



〔表 14〕
被験者別にみた各字詰の文字配列による読書量の順位

読書量の最も多い字詰を1とし、最も少ない字詰を8とする。被験者、田は全部の文字配列の記録図が得られなかったので除外した。

被	文配							
	8字詰	12字	15字	20字	25字	30字	35字	40字
半	6	5	4	7	8	3	2	1
押	7	5	3	1	6	2	7	4
飯	5	8	4	3	1	7	6	2
根	8	5	2	4	3	6	1	7
豚	5	4	2	7	3	6	8	1
平	7	4	1	3	2	6	8	5
加	8	7	5	3	4	1	6	2
深	7	4	6	5	2	3	1	8
間	7	8	6	2	1	5	4	3
志	8	7	6	4	2	1	5	3
服	6	8	3	5	2	7	1	4
五	7	6	3	4	1	8	2	5
T	81	71	45	48	35	55	51	45

〔表 15〕

2) 停留の頻数 (100字に対する停留頻数平均)

文配 被	請 8 字	12 字	15 字	20 字	25 字	30 字	35 字	40 字	
半	61.73	62.11	61.73	62.50	70.42	55.87	51.81	42.02	
押	52.06	57.14	54.95	38.31	66.67	54.05	71.43	56.81	
飯	45.87	44.84	42.92	42.19	32.79	44.25	42.55	35.71	
根	53.48	36.90	36.63	37.17	33.33	36.23	25.71	33.33	
萩	33.78	43.29	30.67	32.47	30.03	35.97	32.89	28.01	
平	52.06	56.82	51.81	41.67	41.84	50.00	51.55	57.14	
加	57.47	52.06	38.61	39.22	38.61	35.84	41.49	38.76	
深	32.15	31.44	29.67	24.33	26.38	27.40	24.57	27.03	
間	33.33	35.21	29.40	25.00	23.49	30.03	26.45	24.21	
志	47.85	32.47	28.01	21.46	24.81	23.31	25.71	26.67	
服	35.46	35.84	25.57	30.12	28.09	30.03	22.88	30.03	
五	47.39	39.53	38.31	40.82	30.03	45.05	26.67	30.03	
田	32.15	33.33	29.50	28.01	33.00	30.03			
T	584.78	560.98	497.78	463.27	479.47	498.06	444.21	429.75	3858.30
N	13	13	13	13	13	13	12	12	102
M	44.98	43.15	38.29	35.64	36.88	38.31	37.02	35.81	37.83
S. D	10.60	10.55	11.15	10.65	14.85	10.35	14.65	11.25	12.35

〔表 16〕

3) 停留の時間 (1 停留の所要時間平均)

単位は σ で示す。

被 文配	語								
	8 字	12 字	15 字	20 字	25 字	30 字	35 字	40 字	
半	410	320	320	440	574	323	335	330	
押	530	413	420	450	370	420	390	420	
飯	299	355	314	301	324	356	352	343	
根	521	451	435	435	480	480	486	556	
狹	262	305	264	303	289	268	310	287	
平	353	285	279	343	332	354	367	288	
加	323	350	366	346	358	318	362	315	
深	385	383	383	423	380	369	361	463	
問	362	497	375	390	371	367	406	442	
志	352	442	348	410	320	317	320	316	
服	287	350	330	331	290	370	352	318	
五	305	353	343	327	279	360	326	447	
田	303	244	421	357	342	336			
T	4692	4748	4598	4856	4709	4638	4367	4525	37133
N	13	13	13	13	13	13	12	12	102
M	361	365	354	374	362	357	364	377	364
S. D	81.0	67.2	48.4	48.4	77.8	47.6	47.6	82.6	63.2

〔表 17〕

4) 逆行運動の頻数 (100字に対する逆行頻数平均)

文配 被	8 字 詰	12字	15字	20字	25字	30字	35字	40字	
半	2	3	4	1	8	3	3	1	
押	1	5	7	4	5	5	9	5	
飯	2	6	1	4	0	6	1	0	
根	7	2	1	1	0	0	0	4	
萩	0	0	1	3	2	2	1	3	
平	1	3	1	1	1	1	1	1	
加	0	3	0	2	4	4	2	1	
深	2	1	0	0	0	1	0	0	
間	0	0	0	0	0	0	1	0	
志	1	0	0	1	0	0	0	1	
服	0	2	0	0	1	0	0	0	
五	4	2	3	5	2	9	0	0	
田	0	0	0	0	2	1			
T	20	27	18	22	25	32	18	16	178
N	13	13	13	13	13	13	12	12	102
M	1.54	2.08	1.38	1.69	1.92	2.46	1.50	1.33	1.75
S. D	1.81	1.86	2.02	1.68	2.33	2.70	2.43	1.65	2.14

〔表 18〕

5) 不適応凝視の頓数 (1行に対する不適応凝視頻数平均)

被 文配	結								
	8字	12字	15字	20字	25字	30字	35字	40字	
半	0.14	0.67	0.00	0.33	0.00	1.00	1.20	1.25	
押	0.18	0.38	0.33	0.17	0.67	0.33	0.67	1.00	
飯	0.17	0.38	0.44	0.43	1.00	1.50	0.83	1.00	
根	0.43	0.29	0.50	0.00	0.67	1.33	0.33	1.00	
荻	0.00	0.00	0.00	0.63	0.25	0.40	1.00	0.40	
平	0.18	0.17	0.33	0.83	1.00	2.00	2.67	2.00	
加	0.60	0.33	0.40	0.00	0.20	0.75	0.75	2.00	
深	0.00	0.00	0.00	0.00	0.40	0.50	0.60	1.00	
間	0.00	0.00	0.00	0.00	0.43	0.60	0.00	0.33	
志	0.00	0.20	0.10	0.29	0.20	1.00	1.00	0.67	
服	0.25	0.50	0.33	0.00	1.00	1.00	1.33	1.33	
五	0.10	0.00	0.00	0.50	0.50	0.75	0.00	0.67	
田	0.14	0.00	0.00	0.40	0.25	1.33			
T	2.19	2.92	2.43	3.58	6.57	12.49	10.38	12.65	53.21
N	13	13	13	13	13	13	12	12	102
M	0.17	0.22	0.19	0.28	0.51	0.96	0.87	1.05	0.52
S. D	0.17	0.22	0.19	0.26	0.34	0.47	0.69	0.52	0.52

1. 読書量の多かった字詰からの順位は、25字詰、35字詰、40字詰、20字詰、15字詰、30字詰、12字詰、8字詰であり、8字詰に対する25字詰には有意な差があると認められた。
2. 被験者別に各文字配列の読書量の順位をきめると、25字詰、40字詰、15字詰、20字詰、35字詰、30字詰、12字詰、8字詰となる。
3. 停留の頻数の少なかった字詰からの順位は40字詰、20字詰、25字詰、35字詰、15字詰、30字詰、12字詰、8字詰である。
4. 停留の時間の短かかった字詰からの順位は15字詰、30字詰、8字詰、25字詰、35字詰、12字詰、20字詰、40字詰である。
5. 逆行の頻数の少なかった字詰からの順位は40字詰、15字詰、35字詰、8字詰、20字詰、25字詰、12字詰、30字詰である。
6. 不適応凝視の頻数の少なかった字詰からの順位は、8字詰、15字詰、12字詰、20字詰、25字詰、35字詰、30字詰、40字詰である。
7. 読書量に対する停留頻数、停留時間、逆行頻数、不適応凝視頻数の相関係数はそれぞれ、0.64、0.52、0.55、0.11、であり、前三者には有意な相関があると認められた。

じ 結果に対する考察

1. 読書量からみると、25字詰、35字詰と40字詰がより読みやすく、8字詰と12字詰はより読みにくい。前年度の集団テストと、全体的傾向としては結果の類似性をみることができる。
2. 眼球運動の状態からみると、15字詰が概してよい規則性を示すように思われる。停留数はやや多いけれども、停留時間は最も短く、逆行と不適応凝視頻数も非常に少なく、それらのS.Dも小さい。40字詰は停留数と逆行は最も少ないが、停留時間は長く、不適応凝視も多い。25字詰はさほど規則性があるとも、ないとも言うことができない。
3. 不適応凝視が長行になるにつれて増大することは、両眼の水晶体の調

節、眼筋の呼応作用が行が長くなればそれだけ困難になるためと考える。^{注1)}

4. よこの各字詰による文字配列の効果はさほど明白ではない。読書量では有意差はわずかに一対の字詰に見られるだけであり、眼球運動では行の長短による規則性についても、読書量と眼球運動の関係もたての文字配列にみられたほど明確ではないけれども、概して15字詰、25字詰、40字詰が読みやすい。

注1) 不適応凝視頻度が25字詰あたりの長行から急激に増加することは、眼球水晶体の調節作用に関する運動の難易性に関する限界を裏づけすると思われる。たての文字配列でも25字詰からの長行に同様の傾向を認めた。

◎ よこの各行の長さの文字配列による読みの効果の比較

9ポ活字、3.5mm行間隔、明朝活字、黒インク、白紙、べた組み、小学4年生程度の文章。Ophthalmographによる。

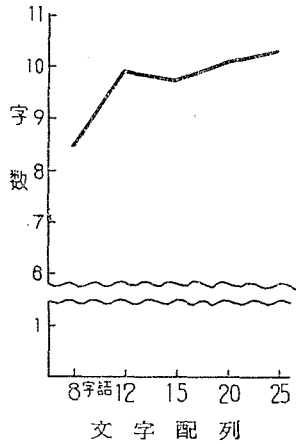
〔表 19〕

1) 読書量 (1秒間の読字数平均)

被 読 者	文配				
	8字詰	12字	15字	20字	25字
樋	7.23	9.55	8.38	8.60	7.05
服	11.27	16.18	13.86	16.63	14.20
志	6.92				
間	10.71	10.71	9.68	11.16	12.39
加	6.15	6.05	6.21	5.03	8.25
岡	4.40	5.13	6.09	6.50	6.44

分配 被	8字	12字	15字	20字	25字	
上	8.87	11.81	9.05	11.03	10.30	
飯	7.17	6.95	7.96	8.31	10.54	
池	9.56	14.97	12.27	9.06	13.38	
川	5.27	6.87	8.16	7.80	8.24	
松	8.71	8.80	8.86	9.21	10.27	
半			10.91		9.01	
山		12.47	10.01	10.93	11.93	
		6.68		7.74	9.58	
桑	8.19	11.51	10.78	14.29	12.04	
五	9.41		12.18	11.46	11.98	
田	14.33	11.96	12.51	14.12		
T	118.19	319.64	146.91	151.87	155.60	712.21
N	14	14	15	15	15	73
M	8.44	9.97	9.79	10.12	10.37	9.76
S. D	2.50	3.23	2.24	3.04	2.18	2.75

図3 各文字配列による読書量 (一秒間の読字数平均)



〔表 20〕

被験者別にみた各字語の文字配列による読書量の順位

読書量の最も多い字語を1とし、最も少ない字語を5とする。被験者、志、半、山、押、五、田は全部の文字配列の記録図が得られなかったので除外した。

被	文配	8字語	12字	15字	20字	25字
桶		4	1	3	2	5
服		5	2	4	1	3
		3	3	5	2	1
加		3	4	2	5	1
岡		5	4	3	2	2
上		5	1	4	2	3
飯		4	5	3	2	1
池		4	1	3	5	2
川		5	4	2	3	1
松		5	4	3	2	1
桑		5	3	4	2	1
計		48	32	36	26	22

〔表 21〕

2) 停留の頻数 (100字に対する停留頻数平均)

文配 被	8 字 ^詰	12字	15字	20字	25字	
樋	48.8	36.1	40.0	40.0	46.1	
服	32.5	26.2	31.6	25.7	26.9	
志	48.1					
間	35.5	33.3	37.0	28.6	28.9	
加	50.0	51.0	46.7	45.0	43.3	
岡	62.5	55.2	44.0	45.9	49.3	
上	41.7	33.3	41.0	37.4	35.6	
飯	40.3	39.8	45.9	46.3	35.3	
池	42.9	26.9	35.0	46.5	32.8	
川	66.2	50.0	47.4	40.5	46.5	
松	36.2	36.6	34.1	30.8	28.9	
半			33.3		40.0	
山		39.5	48.1	40.0	40.7	
押		45.9		41.7	42.4	
桑	39.2	36.4	37.7	31.3	34.2	
五	47.8		33.3	35.8	35.0	
田	29.6	34.8	31.6	28.2		
T	621.3	545.0	591.7	563.7	566.9	2887.6
N	14	14	15	15	15	73
M	44.38	38.93	39.45	37.58	37.73	39.56
S. D	13.70	8.75	9.10	6.10	7.05	8.30

〔表 22〕

3) 停留の時間 (1停留の所要時間平均) 単位は σ

文配 被	8字 ^詰	12字	15字	20字	25字	
樋	267 ^{σ}	270	288	279	292	
服	183	213	202	206	195	
志	301					
間	210	252	261	297	257	
加	272	314	325	389	256	
岡	342	319	300	316	283	
上	259	234	266	226	243	
飯	301	343	263	242	252	
池	220	222	205	211	209	
川	268	280	245	246	254	
松	282	291	307	317	307	
半			247		259	
山		184	188	206	180	
押		306		255	217	
桑	301	222	236	207	219	
五	225		180	276	207	
田	208	205	215	209		
T	3639	3655	3728	3882	3630	18534
N	14	14	15	15	15	73
M	260	261	249	259	242	254
S. D	46.4	45.8	44.4	49.4	37.8	41.2

〔表 23〕

4) 逆行運動の頻数 (100字に対する逆行頻数平均)

文配 被	8 字 ^詰	12字	15字	20字	25字	
樋	3	0	3	4	5	
服	0	0	3	1	1	
志	0					
間	0	0	0	0	0	
加	0	0	0	5	1	
岡	2	3	3	2	4	
上	1	1	0	1	0	
飯	2	3	3	5	3	
池	2	1	0	5	6	
川	1	0	1	1	1	
松	0	2	4	2	4	
半			0		3	
山		0	4	0	3	
押		3		1	4	
桑	0	1	4	4	1	
五	0		0	0	2	
田	0	1	1	1		
T	11	15	26	32	28	122
N	14	14	15	15	15	73
M	0.79	1.07	1.73	2.13	2.53	1.67
S. D	1.01	1.16	1.34	1.45	1.78	1.39

〔表 24〕

5) 不適応凝視の頻数 (1行に対する不適応凝視頻数平均)

文配 被	8 字 詰	12字	15字	20字	25字	
樋	0.30	0.56	0.50	0.50	0.75	
服	0.60	0.43	0.63	0.29	0.29	
志	0.33					
間	0.00	0.13	0.11	0.14	0.25	
加	0.17	0.50	0.38	0.75	0.63	
岡	0.50	0.13	0.20	0.67	1.00	
上	0.12	0.14	0.71	0.70	0.69	
飯	0.23	0.67	0.50	0.75	1.33	
池	0.43	0.10	0.25	0.71	0.80	
川	0.40	0.20	0.20	0.10	0.38	
松	0.00	0.10	0.22	0.43	0.44	
半			0.20		0.56	
山		0.00	0.22	0.30	0.17	
押		0.00		0.17	0.14	
桑	0.71	0.36	0.67	0.75	0.71	
五	0.33		0.00	0.17	0.38	
田	0.09	0.00	0.00	0.00		
T	4.21	3.32	4.79	6.43	8.92	27.67
N	14	14	15	15	15	73
M	0.30	0.24	0.32	0.43	0.59	0.38
S. D	0.22	0.20	0.24	0.29	0.34	0.29

1. 読書量の多かった字詰からの順位は、25字詰、20字詰、12字詰、15字詰、8字詰であり、8字詰に対する20字詰、25字詰には有意な差があると認められた。
2. 被験者別に各文字配別の読書量の順位をきめると、25字詰、20字詰、12字詰、15字詰、8字詰である。
3. 停留の頻度の少なかった字詰からの順位は20字詰、25字詰、12字詰、15字詰、8字詰である。
4. 停留の時間の短かかった字詰からの順位は25字詰、15字詰、20字詰、8字詰、12字詰である。
5. 逆行の頻度の少なかった字詰からの順位は8字詰、12字詰、15字詰、20字詰、25字詰である。
6. 不適応凝視の頻度の少なかった字詰からの順位は12字詰、8字詰、15字詰、20字詰、25字詰である。
7. 読書量に対する停留頻数、停留時間、逆行頻数、不適応凝視頻数の相関係数はそれぞれ、0.32、0.44、0.24、0.17であり、前二者には有意な相関があると認められた。

j 結果に対する考察

1. 読書量からみると、25字詰が最も読みやすく、短行になるにつれて読みにくくなる。この傾向はこれまでの集団テストの結果と一致する。
2. 眼球の運動状態からみると、25字詰は停留数が最も少なく、停留時間も非常に短かく、運動に規則性が見られる。概して短行は停留数が多く、停留時間も長い。逆行と不適応凝視の頻度は少ない。これに対して長行になると、停留数が減少し、停留時間も短くなるが、逆行と不適応凝視の頻度は逆に増大する。けれども逆行と不適応凝視の頻度は読書量に高い相関を示さない。

注1)

3. よこの各字詰による文字配列では25字詰が最も読みやすい行の長さで

あると考える。

注1) Paterson と Tinker は10ポ活字、80mm が効果的な読みに対する最適の長さとした。(80mmは、第二実験の25字詰に相当する)

- Paterson and Tinker. Influence of line width on eye-movements.
J. Exp. Psychol. 1940. 27. 572-577.

以上の結果とそれらに対する考察から、行の長さについては、たて、よともに、25字詰と40字詰が最も読みやすい文字配列であり、30字詰、35字詰の長行は、20字詰、15字詰の短行より傾り向的には読みやすいと考えることができる。そして、読書量をますためには眼球の停留数と停留時間の減少が基本的要因であり、逆行数と特に不適応凝視とはさほど大きな要因であるとは見られない。短行が読みにくいことは周辺視野の最大利用ができないことにあり、長行、特に25字詰と40字詰が読みやすいことは眼球の生理的要因とあわせて、文章表現のそれらの字詰における Context^{注1)} のまとまりを最もよく示す結果と考える。

〔付記〕 Contact-lens による実験装置と Ophthalmograph による実験との実験結果には相対的類似性^{注2)}をみることができた。

注1) Context の問題は Hovde の論を参照されたい。

- Hovde, H. T. The relative effects of size of type, leading and context.
J. Appl. Psychol. 1930. 14. 63—73.

注2) 両装置による結果の比較考察は、被験者全体の結果、同一材料文による異被験者の結果、異材料文による同一被験者の結果についてそれらの眼球運動状態をみた。概して Contact-lens による実験結果は Ophthalmograph にくらべて、やや、停留頻数が増し、停留時間も長く読書量が少ない傾向を示しているが、これは前者の実験が暗室で行われ、実験操作に多少の不自然さがつきまとう被験者の癖によるものと考えられる。なお、停留時間の両装置による約110σ程度の差は記録図の方向回転のちがいが考慮に入れなければいけない。

E. 結 論

文字配列の合理化をめざす研究目標に対して、たてとよこではどちらが読みやすいか、どのくらいの行の長さが最も読みやすいかを、以上の条件のもとで研究した。そうして、読書量と読書のさいの眼球の運動状態からみて、たてとよこは読みやすさに差がなく、行の長さはたての場合もよこの場合も25字詰あたりが最も読みやすいという結論が出た。

調査実験に高い科学性と容観性を得るためには研究目的にそった厳密な条件統制を必要とする。この研究がそれに対して払った考慮は少なくなかったがなお充分とは言えず、反省される点があるので、本論の必要な箇所注をくわえておいた。

文字配列の効果についての一般的結論をだすためには、この研究を基礎にして、さらにいろいろの角度から、いろいろの方法で研究を進めなければいけないし、字体、字の大きさ、行間隔、漢字、かなの混り具合などの問題が今後の研究課題として残される。

本稿は前任者草島時介氏の援助助言を得て作成した。

(村 石)

ラジオ・ニュース文体の研究

A. 方法と経過

ラジオ・ニュースは、大衆にとって理解出来るものでなければならない。どのような文体、文章が理解しやすいかを明かにしようとするのが、この研究の目的である。日本放送協会放送文化研究所に委託したものであり、前年度の同じ題目による研究の続きである。

日本放送協会で、編集を企図した「ラジオ・ニュース文体の書き方」において、ニュース文章の書き方の原則として、

- | | |
|-------------|---------------|
| 1. 開く文章に | 2. 文章は平易に |
| 3. センテンスは短く | 4. 主語を先に |
| 5. 用語を適切に | 6. 助詞などは省略せずに |
| 7. 名詞止めを避ける | 8. 直訳体を避ける |

のようなものが定められ、これに従って、これまでに放送されたラジオ・ニュースなどを中心にその書きかえが考えられた。

書きかえは、もちろん、大衆にとって理解しやすいということを目標として試みられたものであるが、はたしてこの書きかえた方が理解しやすいか、また、どの程度理解しやすくなっているかを、実験的に調査することを本年度の研究として取り上げた。全体で八つの文章を選び出し、これをアナウンサーに読ませて録音し、録音したものを、中学生および、成人に聞かせて、その結果を知ろうとした。

実験に際して、中学生グループとしては目黒八中の二年生 200 名、成人グループとして旧制中学卒の学歴を持つ 26 名を被験者とし、それぞれを A・B の二組に分けた。

その際、中学生グループにおいては、IQ の特に高いものと低いものを除

いた後、IQと性別を指標として、等質と考えられる2群に分けた。

被験者	中学生		成人	
	男	女	男	女
A	60	40	5	8
B	59	41	3	10

被験者に聞かせる材料は、次のような組み合わせを考え、A番組をAグループに、B番組をBグループに実施した。

A・B両グループとも、ニュースが終るごとに質問紙に記入させ、全員が記入し終るのを待って、次のニュースに移った。

ニュースの種類		A番組 所用時間	B番組 所用時間
第1のニュース	「聞く文章に」の文例 1	書きかえ 47秒	原文 47秒
「2	「 -- " 2	原文 59"	書きかえ 51"
「3	「 -- 「文章は平易に」の文例 2	書きかえ 47"	原文 49"
「4	「 -- 「主語を先に」の文例 1	原文 51"	書きかえ 48"
「5	「 -- 「直訳体避ける」の文例 2	書きかえ 53"	原文 43"
「6	「 -- " 3	原文 50"	書きかえ 48"
「7	「 -- 「主語を先に」の文例 2	書きかえ 48"	原文 1'09"
「8	「 -- 「用語を適切に」の文例 1	原文 58"	書きかえ 1'05"

質問紙は3種。つまり理解、興味、難易の感じの3点から考察したのである。いずれも客観法形式。興味並びに難易の感じに関する質問では各ニュースとも同じ問をもうけ、品等法により段階の判定を求めた。

B. 結 果

原文と書きかえ文の理解について、有意差の認められたのは第3問と第8問の2つ。興味については、第2、第6、第7問の3つ。書き手の難易の感じは第1、第2、第3、第7問の4つ。これらはそれぞれ書きかえ文の方が原文より、理解し易く、興味をもち、やさしいと感じられた。なおこれらはいずれも中学生の場合であって、成人では、有意差が見られなかった。以上中学生に有意差のみとめられたものを表3に示す。

原文と書きかえ文の間に有意差のないものは多かったが、原文の方が有意差をもって、書きかえ文よりよい結果を示したものはなかった。

8つの問題について、それぞれ興味と難易度、理解と興味、理解と難易度にはいずれも相関関係が見られなかった。

第8問

第3表により2項目で効果のあがった第8問原文および書きかえ文をかかげて例とする。

〔表3〕

	理解	興味	難易の 感じ
1			○
2		○	○
3	○		○
4			
5			
6		○	
7		○	
8	○		○

原文 衆議院選挙の立合演説会は今日で終わります。去る13日から高知市はか26か町村60か所の会場で行われて来た衆議院選挙の立合演説会は、今夜宿毛町と室戸町での演説会を最後に全部終ることになりました。

今度の選挙は運動にいろいろの制限が加えられた結果、一般は各候補の政見を残さず又、しばしば耳にする機会に恵まれていないところから立合演説は各地とも人気を呼び、今までにない好成績であったと高知県選挙管理委員会では語っております。一方立合演説の日程によって室戸から宿毛まで県下を巡った候補者達はいよいよ明日から自由な態勢となり残された3日間に最後の猛運動を行いますが多く候補者は最も浮いた票の多いと言われる高知市に集まり、激しい追込をかけることになっております。(A番組)

書きかえ 立合演説会は今日で全部終り衆議院議員選挙戦は最後の追込にはいりました。衆議院議員選挙の立合演説会は去る13日から高知市はじめ県下60か所の会場で行われてきました。そして今夜は宿毛町で行われ、これで立合演説会は全部終ることになっています。あすからは候補者が立合演説会にしばらくられないで、自由な行動がとれますので、投票日までの3日激しい最後の追込みを行うことになります。この場合多くの候補者は最も浮動票が多いと言われる高知市に集まるものと見られています。なお、県の選挙管理委員

会では立合演説会の成績について次のように語っています。「今後は選挙運動にいろいろの制限が加えられた。このため一般の人々は候補者の政見を聞く機会が少かったので、立会演説会はどこでも入りがよく、よい成績を収めることができた」県の選挙管理委員会ではこのように語っています。

国語関係文献の調査

言語・国語に関する学問の水準を知り、学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、次のような文献調査を行った。

A. 刊行書の調査

言語学・国語学・国語問題・国語教育・言語技術・国語資料・辞典等の刊行書（1953年1月～12月）について調べ、そのうち330点を収めたカード目録を作った。この目録は下記の雑誌論文ならびに新聞記事の目録とともに、その大部分は当研究所編「国語年鑑」1954年版に掲載された。

B. 雑誌論文の調査

下記の雑誌類について、関係論文を調査し、1953年（1月～12月）計1968点をカード化し、分類別・雑誌別・筆者別のカード目録を作った。

(A) 葦 アジア言語研究 新しい教室 潮 英文学思想 ORBIS
 解釈と鑑賞 改造 学苑 学鏡 学術月報 カナノヒカリ カリキュラム
 漢文学 教育 教育技術 教育研究 教育心理 教育心理学研究 教
 育手帖 教育統計 近畿方言 経済研究 言語研究 言語生活 語学
 教育 国学院雑誌 国語 国語学 国語教室 国語・国文 国語国文
 学(福井大学) 国語と国文学 国語方言 国文 国文学 国文学研究
 国文研究(愛媛) 心 ことば コトバの科学 ことばの教育 語文
 サンデー毎日 思想 実践国語 児童心理 信濃教育 社会学評論
 週刊朝日 自由國民 出版ニュース 主婦之友 初等教育資料 人生手
 帖 新聞研究 人文研究 新聞放送広告 新聞用語研究 人文論究
 青年心理 世界 中央公論 中国語文 中等教育資料 東方学報 東
 洋文化 図書 日本及日本人 日本文化 日本文学 日本文学論究

日本民俗学 ニューエイジ ニュースレター 婦人生活 文学 文学研究
 文化と教育 文芸研究 文芸春秋 文芸と思想 文研月報 平和
 法政 放送文化 朋友 万葉 民間伝承 民間放送 民族学研究
 文部時報 文部統計速報 リーダーズダイジェスト 立命館大学

ROMAISEKAI Romazi no Nippon

(B) 愛知学芸大学国語国文学報 愛知女子短期大学紀要 青森県教育研究
 所研究紀要 跡見学園国語科紀要 茨城大学文理学部紀要 印刷局研究所時
 報 宇都宮大学学芸学部研究論集 愛媛県教育研究所紀要 愛媛県教育研究
 所報 大分大学学芸学部研究紀要 大倉山文化科学研究所論集 大阪学芸大
 学紀要 大阪帝塚山学院短期大学研究年報 大谷大学学報 岡山大学法文学
 部学術紀要 お茶の水女子大学人文科学記要 小野田高等学校研究論叢 香
 川県教育研究所教育研究 香川大学学芸学部研究報告 鹿児島大学教育学部教
 育研究所紀要 金沢大学教育学部ろう教育研究年報 岐阜大学学芸学部研究報
 告 京都学芸大学学報 京都女子大学紀要 京都大学人文科学研究所報
 京都大学人文科学研究「人文学報」 京都大学人文科学研究所調査報告 熊
 本女子大学学術紀要 熊本大学教育学部紀要 熊本大学法文論叢 群馬大学
 紀要 神戸外大論叢 神戸大学国語国文学会国文論叢 神戸大学文学会研究
 国立教育研究所紀要 国立教育研究所所報 駒沢大学史学研究室駒沢史学
 佐賀大学教育学部研究論文集 滋賀大学学芸学部紀要 静岡大学文理学部研究
 報告 鳥根大学人文科学論集(人文科学教育学関係) 信州大学紀要 信州
 大学教育学部研究論集 聖心女子大学論叢 総理府世論調査報告書 千葉大
 学文理学部紀要 天理大学学報 天理大学中国語研究会会報 東京外国語大
 学論集 東京学芸大学国語研究会会報 東京女子大学論集 東京大学新聞研
 究所紀要 統計局研究彙報 統計数理研究所講究録 統計数理研究所輯報
 同志社女子大学学術研究年報 東大東洋文化研究所紀要 東北大学文学部研究
 年報 徳島県教育月報 徳島大学学芸学部紀要 鳥取大学学芸学部研究報告
 富山大学文理学部文学紀要 長崎大学人文・社会科学研究報告 名古屋大学文
 学部言語学会報 名古屋大学文学部研究論集 奈良学芸大学紀要 新潟大学

教育学部教育科学 日本音響学会会誌 日本音声学会会報 日本学術振興会
 総合研究報告集録 日本女子大学紀要 日本大学世田谷教養部紀要 日本大
 学芸術学会芸術学 弘前大学人文社会学会人文社会 広島女子短期大学研究紀
 要 広島大学文学部紀要 北海道大学一般教養部外国語外国文学研究 三重
 県立大学研究年報 宮城学院女子大学研究論文集 山形大学人文科学紀要山口
 大学教育学部研究論叢 山口大学文学会誌 横浜国立大学人文紀要 龍谷大
 学論集 龍谷大学国文学論叢 和歌山大学学芸学部「学芸研究」一人文学一
 国立国語研究所年報

C. 新聞記事の調査

前年度に引き続き、諸新聞から、関係記事を切抜き、その整理に当たると共に、分類別および日付順のカード目録を作った。調査した新聞と収録した記事の点数は次のとおりである。

- (1) 東京出版 (日刊) 朝日 毎日 読売 東京日日 東京タイムズ
 時事 (夕刊) 朝日 毎日 読売 東京
- (2) 地方出版 大阪在住の山田房一氏から関係記事のあるごとに、恵送された京
 阪地方の諸紙 朝日 (大阪) 毎日 (大阪) 新大阪など
- (3) 特殊新聞 (寄贈) 読書 図書 教育 全国出版 新聞協会報など
 1959年 (1月～12月) の切抜き1026点

(有 賀)

図書 の 集 収 と 整 理

前年度に引続き、研究活動を助けるため、研究書・参考書・調査資料文献の類を収集・整理・管理した。

収集に当つては、言語学・国語学・国語国字問題・国語教育関係を中心として、社会学・心理学・教育学・民俗学・文学・統計学その他の関係諸学科のおもな文献、さらに各種辞典・年鑑・書誌類のおもなものの収集に力を注

いだ。また本年度からは、少しく国外の文献にも留意することとし、たとえば、極めて僅かながら、中国の国語国字問題関係諸書とか、欧米の専書（たとえば H. Kurath; Linguistic Atlas of the New England の購入など）にも手をそめた。

調査資料文献としては、明治初期から現代にかけての各種形態のものを収集する事に努力するとともに、歴史的研究の資料として、各時代の古文獻にも及んだ事は、従來の通りである。

各方面からの寄贈図書は前年度と大差なく、当研究所書庫の充実に大きな役割を果している。

本年度に備えつけた図書の数に次の通りである。

単行本	購入	840冊
	寄贈	1,011冊（内、教科書845冊）
雑誌	購入	50種742冊
	寄贈	75種699冊
新聞	購入	14種
	寄贈	3種

28年度末現在の蔵書数（単行本のみ）は18,638冊である。

昭和28年度に寄贈された図書の一覧

寄贈者名	図	書	名
(1) 単行	()	内は編著者名。寄贈者と同じ場合は省く。	
一谷清昭氏	「会津方言集」	(山口彌一郎)	「相馬方言集」(岩崎敏夫)
	「福島方言集」	(香内佐一郎)	
愛媛国語国文学会	「正岡子規文獻目録」	(愛媛大学国文研究室)	
速藤嘉基氏	「国語教育の諸問題」	「訓点資料と訓点語の研究—改訂版—」	
大里武八郎氏	「鹿角方言考」		
大屋文男氏	「国際電報の語数計算の基準」	(国際電信電話K・K)	

- 外務省 「第七回ニエヌコ総会」
- 金沢文庫 「金沢文庫古文書第三輯—僧侶書状篇下—」「金沢文庫古文書第四輯—兩名書状篇(一)—」
- 京都大学人文科学研究所 「蒙古研究文献目録—1900~1950—」「戦国武士」
(坂田吉雄)
- 国立教育研究所 「全国小・中学校児童生徒学力水準調査—第一次報告昭和27年度—」
- 国立国会図書館 「吉利支丹版拉・葡・日対訳辞典」上中下 「幕末和蘭留學生関係資料目録」 「日本學術雜誌目録—1952—」 「国立国会図書館支部上野図書館所蔵本草関係図書目録下」 「上野図書館八十季略史」 「邦文心理学文献目録稿—単行本—」
- 国立世論調査所 「教育に関する世論調査」
- 駒沢大学国語学研究室 「国語アクセント研究」(望月信彦)
- 小学館 「全国生徒児童作品コンクール入選作品集」(相賀徹夫)
- 史料館 「史料館所蔵史料目録—第二集—」
- 総理府統計局 「昭和25年国勢調査報告」第7巻その1・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・17・18・20・21・23・27・28・29・32・35・37・38・89・42・43
- 高羽五郎氏 「1622年版ロザリオの経—原文篇—」Ⅰ・Ⅱ 「譬喩尽二」
「元和本下学集索引」(森田武)
- 東京大学付属図書館 「東京大学和漢図書目録増加第七—昭和17~20年—」
- 東京大学史料編纂所 「大日本史料」第二編之八・第三編之十一・第六編之三
十・第七編之十一・第九編之八・第十二編之三十五 「大日本古記録」御堂関白記中・梅津政景日記一・新井白石日記下・蕪軒
日録 「大日本近世史料」上田藩村明細帳上・中 「大日本古文書」家わけ第十・幕末外国関係文書之二十四
「史料綜覧」卷十一・卷十二
- 東京天文台 「理科年表—昭和29年—」

- 東北大学教育教養部地域社会研究会 「東北農村の歴史的研究(一)」
- 富山県教育研究所 「昭和28年度小・中学力水準調査」
- 中島秀蔵氏 「筆順と速記体」
- 日本学術振興会 「昭和27年度科学試験研究報告集録」
- 日本放送協会 「尊号と年号の呼び方」 「外国楽曲の呼び方」 「農業用語言い換え集」 「外来語集」 「世界のラジオとテレビジョン」
- 白揚社 「新修竹取物語」(小島憲之) 「新修竹取物語別記」(塚原鉄雄)
- 藤原与一氏 「これからの国語」
- 毎日新聞社 「本社用語かながきにするもの 分類当用漢字表」
「本社使用活字使用度数調査表」(大阪本社印刷局)
- 水野担氏 「数量化と予測」
- 民俗学研究所 「年中行事図説」
- 宮城県登米郡北方村 「登米郡北方村」(平重道)
- 武蔵野書院 「校註証本源氏物語一夕顔一」(三条西公正) 「校註証本源氏物語一はしひめ一」(三条西公正) 「昭和校註竹取物語」(山田孝雄外) 「新撰日本文学精粹」(齊藤清衛)
「要註近代詩選」(岡崎義恵外)
- 文部省 「学術雑誌総合目録—自然科学欧文篇—」 「小・中・高等学校教員生活調査」 「総合研究報告集録—昭和28年版—」(日本学術振興会) 「各個研究報告集録—昭和27年版—」(科学研究費による哲史文学現状調査委員会) 「各個研究および助成研究報告集録—昭和28年版—」(科学研究費による哲史文学現状調査委員会) 「やや進んだ段階におけるローマ字文の学習指導—国語シリーズ10—」 「方言と国語教育—国語シリーズ11—」 「明治以後におけるかなづかい問題—国語シリーズ12—」 「漢字と国語教育—国語シリーズ13—」 「国語問

題問答—国語シリーズ14— 「国語のために—国語シリーズ
 16— 「近世の国語教育—国語シリーズ17— 「文部省
 所轄国立大学研究所要覧」 「複式学級の学習指導」 「教
 育制度の図解」 「学校剣道指導の手びき」 「べんきょう
 しましゅう学習指導書—ろう学校教師用第2学期前期—」
 「小学校学習指導書—理科編中—」 「小学校学習指導要領—
 体育科編—」 「小学校学習指導書—音楽科編—」 「中学
 校高等学校学習指導法—外国語科英語編—」 「中学校高等学
 校職業指導主任の手びき」 「高等学校商業科学習指導書—簿
 記会計科編—」 「特殊児童判別基準とその解説」 「問題
 児指導の実際」 「特殊教育の研究」 「特殊学級経営のた
 めに」 「小学校の合奏」 2・3・4 「音楽科実験学校の研究
 報告(1)」

読売新聞社 「読売スタイルブック—1954—」

ローマ字教育会 「本の歴史」(平井昌夫) 「源氏物語」(松村博司)
 「日本永代蔵」(黒岩一郎) 「平家物語」(永平和雄)
 「枕草子」(小沢正夫) 「ピノッキオ」(柴田勝)

AMERICAN DIALECT SOCIETY “THE PLACE NAMES OF BOONE
 COUNTY, MISSOURI” (ROBERT L. RAMSAY)
 “ENGLISH ARCHAISMS IN PENNSYLVANIA GERMAN”
 (CARROLL E. REED) “A WORD-LIST FROM
 APPALACHIANS AND PIEDMONT AREA OF NORTH
 CAROLINA” (ZETA C. DAVISON)

石垣福雄氏 「北海道南部における動詞の命令法について」

井辺喜四郎氏 「片カナ文字ノ書キ方ニツイテノ一私案」

岡山大学付属図書館 「池田家文庫解題」

コロンビア大学図書館 「新書目録」 中華民國 No. 7. No. 8. ・日本 No. 23

齊藤義七郎氏 「C・H・ダグラス米沢方言」

- 三省堂出版K・K 「新出読み替えを明らかにした漢字語彙調査表—中等国語改訂版—」（中等国語編集委員会）
- 塚原鉄雄氏 「竹取物語索引」
- 土居重俊氏 「国語アクセントの研究」
- 東京書籍K・K 「小学校用改訂新しい国語語い使用度数表—昭和28年度用—」
「東書改訂新しい国語漢字の読み方と使用例」 「改訂新しい国語小学校用漢字ひん度表—昭和28年度—」
- 日本放送協会 「昭和28年度委託研究報告書」
- 野地潤家氏 「教育話法の研究」
- 天野俊也氏 「福井県大野郡北谷村に於ける敬語法」
- 池上二良氏 「音韻論について」
- 煤垣実氏 “SOME HONORIFIC EXPRESSIONS IN WAKAYAMA DIALECT”
- 亀井孝氏 “ARE JAPANESE TURU AND ITO RELATED TO KOREAN TURUMI AND SIL RESPECTIVELY?”
- 楠道隆氏 「漢字制限と地名文字」
- 小滝久雄氏 「幼児の言葉」
- 佐藤茂氏 「福井県の言語調査(2)」
- WILLEM A. GROOTAERS “INITIAL “Pə” IN A SHANSI DIALECT; A PROBLEM OF GRAMMAR” (T’OUNG PAO. VOL XL II, LIVR. 1—2)
- SEVER POP “CHRONIQUE DU CENTRE(JUIN1953).” “SOMMAIRE DU PREMIER FASCICUIE 1953”
- (2) 逐次刊行物（おもなもの）
- 朝日新聞社 「ことば」13号～23号
- 印刷局研究所 「研究所時報」5巻1号～12号
- 大阪市立大学文学会 「人文研究」4巻3号～12号・5巻1号～2号
- 大阪大学文学部国文学研究室 「語文」8輯～10輯

- 大谷学会 「大谷学報」32卷3号～4号・33卷1号～3号
- カナモジカイ 「カナノヒカリ」370号～381号
- 教育技術連盟 「教育技術」8卷2号～8号・10号～13号・9卷1号 「小一教育技術」7卷2号～12号・8卷1号 「小二教育技術」6卷2号～12号7卷1号 「小三教育技術」7卷2号～12号・8卷1号 「小四教育技術」6卷2号～12号・7卷1号 「小五教育技術」7卷2号～12号・8卷1号 「小六教育技術」6卷2号～12号・7卷1号
「中学—国語：社会：英語—教育技術」5卷2号～12号 「中学—数学：理科：図工—教育技術」3卷2号～12号 「中学—職業：音楽：体育—教育技術」3卷2号～12号
- 京都大学国文学会 「国語国文」22卷3号～12号・23卷1号～2号
- 京都大学人文科学研究所 「紀要」9号～11号 「所報」34号～38号
「調査報告」9号～11号
- 近畿方言学会 「近畿方言」16号～19号
- 神戸市外国語大学 「神戸外大論叢」3卷3号～4号・4卷1号～2・3号
- 語学教育研究所 「語学教育」221号～223号
- 国語学会 「国語学」12輯～15輯
- 国立教育研究所 「国立教育研究所所報」14号・16号～19号
- 国立国会図書館 「国立国会図書館公報」5卷3号～12号・6卷1号
- 国学院大学 「国学院雑誌」54卷1号～3号
- 駒沢大学 「駒沢史学」2号～3号
- 静岡大学教育学部教育研究所 「文化と教育」40号～51号
- 資源技術試験所 「資源技術試験所報告」6号～10号
- 信濃教育会 「信濃教育」796号～809号
- 昭和女子大学光葉会 「学苑」146号～160号
- 初等教育研究会 「教育研究」8卷4号～12号・9卷1号～4号
- 誠文堂新光社 「カリキュラム」52号～63号
- 全国出版協会 「全国出版新聞」76号～97号

- 大修館 「国語教室」21号～32号
- 中教出版K・K 「新しい教室」8巻5号～12号・9巻1号～3号
- 中国語学研究会 「中国語学研究会会報」13号～18号・20号～21号
- 中国語友の会 「中国語」20本～27本
- 東京大学新聞研究所 「受入資料月報」2号～12号
- 東京堂 「日本読書新聞」689号739号 「図書新聞」189号～239号
「出版ニュース」230号～265号
- 徳島県教育庁 「徳島県教育月報」38号～40号・42号47号・49号～50号
- 日本音声学会 「音声学会会報」81号～83号
- 日本書籍K. K. 「教育手帳」30号～40号
- 日本文学協会 「日本文学」2巻3号～7号・9号～10号・3巻1号～3号
- 日本文芸研究会 「文芸研究」13集～15集
- 日本放送協会 「文研月報」23号～34号
- 日本民間放送連盟 「民間放送」11号～21号
- 日本民俗学会 「日本民俗学」1号～3号
- 日本ユネスコ国内委員会事務局 「ニュースレター」4号～10号・12号～14号
- 日本のローマ字社 “ROMAZI NO NIPPON” 16号～26号
- 日本ローマ字会 「ローマ字世界」455号～462号・464号～466号
- 一橋大学経済研究所 「経済研究」4巻2号～4号・5巻1号
- 法政大学 「法政」2巻3号～7号・10号～12号
- 北海道学芸大学函館人文学会 「人文論究」7号～10号
- 穂波出版社 「実践国語」151号～161号
- 万葉学会 「万葉」7号～10号
- 文部省 「文部時報」907号～919号 「教育統計」22号～26号
「文部統計速報」63号・65号～68号 「初等教育資料」35号～
46号 「中等教育資料」2巻3号～10・12号・3巻1号～2号
「びぶろす」4巻3号～4号・6号～12号・5巻1号～2号 「指定統
計」13号・15号・47号 「官公出版物」28年1月～12月中納本分

山口大学教育学部 「山口大学教育学部研究論叢」2巻2号・3巻1号

立命館大学人文学会 「立命館文学」95号～105号

ローマ字教育会 「ことばの教育」44号～54号

日本コトバの会 “ETC. A REVIEW OF GENERAL SEMANTICS”

VOL. X No. 4 VOL. XI No. 1

THE SCHOOL OF ORIENTAL AND AFRICAN “BULLETIN”

VOL. X V Part. 1. 3

WASHINGTON UNIVERSITY “MODERN LANGUAGE QUARTERLY”

VOL. 14. No. 1～4

SEVER POP “ORBIS” Tome 1. No. 1. No. 2・Tome 2. No. 1. No. 2

(村尾・芳賀)

庶務報告

A. 庁舎および経費

(1) 庁舎

1948（昭和23年）12月創立当時からひきつづき、宗教法人明治神宮所有の聖徳記念館画館の一部を借用している。

なお、昭和26年12月から三鷹市下連雀91番地山本有三氏所有の建物を借用し、仮分室を設けていたが、昭和28年4月30日限りこれを返還し、新たに新宿区教育委員会の援助により、新宿区立四谷第六小学校の一部を分室として借用することとなり、5月1日移転、ひきつづき研究第2部がそこで勤務している。

(2) 経費

昭和28年度	総	額	24,161,000円
内 訳	人	件 資	15,560,000円
	事	業 資	8,601,000円

B. 評 議 員 会

会 長	柳 田 国 男	副会長	山 崎 匡 輔
阿 部 知 二	伊 藤 忠 兵 衛	金 田 一 京 助	
倉 石 武 四 郎	桑 原 武 夫	颯 田 琴 次	
沢 登 哲 一	東 条 操	時 枝 誠 記	
土 岐 善 麿	土 居 光 知	中 島 健 蔵	
波 田 野 完 治	服 部 四 郎	古 垣 鉄 郎	
松 方 義 三 郎	松 坂 忠 則		

C. 人 的 構 成

(1) 予 算 定 員

(2) 計組織および職員

	職 名	氏 名	備 考
国語研究所	所 長	西 尾 実	
研究第1部	部 長	岩 淵 悦 太 郎	
第1研究室	主 任	中 村 通 夫	
		大 石 初 太 郎	
		飯 豊 毅 一 方	
		宇 野 義 子	
第2研究室	主 任	進 藤 咲 子	
		林 大 賢	
		永 野 秀 夫	
		齊 賀 静 夫	
第6研究室	主任(兼)	水 谷 敏 雄	29. 1. 1任文部教官
		石 綿 敏 雄	
		岩 淵 悦 太 郎	
		柴 田 武 甫	
		北 村 菊 雄	
		野 元 幸 雄	
		上 村 幸 雄	
		山之内 り	
	非 常 勤	島 崎 総	
研究第2部	部 長	草 島 時 介	28. 9. 16 教育大学特殊教員 養成部教授に転任
	"	與 水 実 夫	28. 11. 1就任
第3研究室	主 任	平 井 昌 夫	
		上 甲 幹 一	
		高 橋 進	28. 4. 16辞職
		寺 島 愛	
第4研究室	主任(兼)	與 水 実 夫	
		高 橋 一 夫	
		芦 沢 節 介	
5第研究室	主任(兼)	草 島 時 介	28. 9. 30 東京女子大へ転出
		森 岡 健 二	28. 12. 1 任文部教官
		林 四 郎	28. 10. 1 任文部教官
		村 石 昭 三	

資料室	非常勤	村石昭三	28.4.1採用
	"	岡本奎	28.5.1採用
	"	白砂	29.1.4採用
	主任(兼)	岩渕悦太	28.6.1文部省調査局国語課へ転任
		有賀憲三	
		村尾文雄	
		友部浩	
		高橋太郎	
		高渡友左	
	庶務部課	兼任所員	吉沢典男
"		高田正治	28.8.1任文部教官
"		遠藤嘉基	京都大学教授
"		藤原与一	広島大学助教授
"		浅井恵倫	金沢大学教授
"		佐藤喜代治	東北大学教授
部長		細井房夫	
		真取正二	
庶務課		芳賀清一郎	
		鈴木篁二	28.5.16 一橋大学から転任
	加藤ふみ		
	西山博子	29.1.4改姓(旧姓若宮)	
	波谷よね子	28.4.10改姓(旧姓江頭)	
	味噌善子	休職	
	増山治子		
	三枝や才江		
	黄木得二郎		
	伊藤仲二		
會計課	鈴木清伍	29.3.31辭職	
	三浦山健次		
	藤谷正則		
	齊藤静志		
	吉田芳太郎	29.3.31採用	
	浜田好代		
	塚田と志		
	江頭健一		

D. 内地留学生の受け入れ

全国都道府県派遣の内地留学生を迎えて、各研究室で研究の便をはかっている。次にその氏名研究題目を掲げる。

氏名	学校	研究題目	
佐野 芳夫	甲府市立穴切小学校教諭	読むことを中心とした国語学習指導法の研究	昭和28. 4. 1から " 29. 3. 31まで
大久保 芳継	兵庫県加東郡社中 小学校教諭	作文教育のあり方	昭和28. 4. 1から " 29. 3. 31まで
狩野 尾陸磨	青森県上北郡野辺 地町中学校教諭	国語学的指導法、小中学 に校おける共通語指導の 問題の研究	昭和28. 9. 2から " 28. 12. 1まで
村田 一之	富山県氷見郡阿尾 小学校教諭	初等教育における国語科 教育の基本的なあり方に 関する研究	昭和28. 9. 2から " 28. 12. 1まで
西村 正三	北海道江別第三小 学校教諭	教科の学習効果のうち特 に国語能力の具体的評価 の研究	昭和28. 9. 25から " 28. 12. 31まで
佐方 嘉彦	山口市大殿小学校 教諭	国字問題と読書指導の研 究	昭和28. 10. 6から " 29. 3. 31まで
佐々木 邦夫	北海道稚内ろう学 校助教諭	検定国語教科書に現れた 文型語彙の基本価値によ る最低必要量の検出	昭和28. 10. 1から " 28. 12. 31まで
麻生 繁	鶴岡市朝陽第一小 学校教諭	国語の学習指導法と国語 学習の本質について。言 語の発達段階について	昭和28. 11. 20から " 29. 2. 19まで

E. 日誌抄

1953. 4. 28 各省直轄研究所長会議農林省蚕糸試験場で
(昭28)
- 5, 1 三鷹仮分室移転, 新たに新宿区立四谷第一小学校内に分室を設
け, ひきつづき研究第2部が勤務。
5. 21~22 第11回文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議(学術会
議で)。なお, 西尾所長の「国語問題のひとつ」と題する特別
講演があった。
- 5, 23 第4回文部省所轄研究所事務協議会(国立近代美術館で)

6. 8 第22回国立国語研究所評議員会
議 事
1. 昭和27年度の研究経過報告
 2. 昭和28年度の地方調査員の承認
6. 12 各省直轄研究所長連絡協議会（東京工業試験場で）
" 第1回国立国語研究所地方調査員全国協議会
8. 28 文部省久保田調査局長退官。後任として官房会計課長小林行雄氏が任命された。
10. 26～27 文部省直轄研究所並びに国立大学附置研究所長会議（名古屋商工会議所で）
11. 28 統計数理・国立教育・国立国語・国立遺伝各研究所連合講演会（後援 文部省・朝日新聞社）
ところ 朝日新聞社講堂
1. 開会のあいさつ
国立国語研究所長 西尾 実
 2. 統計的研究より見たわが国民性
統計数理研究所 林知巳夫
 3. 小中学生の学力水準
国立教育研究所 飯島篤信
 4. 現代人の言語生活
国立国語研究所 中村通夫
 5. 性とは何ぞや
国立遺伝学研究所 竹中 要
 6. 閉会のあいさつ
国立遺伝学研究所長 小熊 捍
12. 15 第23回国立国語研究所評議員会
議 事

1. 研究の進行状況について報告
2. 行政改革本部案による機構改革について評議員会として
反対の声明書を発表することに意見の一致を見、松坂・
中島・土岐各評議員が起草委員に委嘱された。

12.22 衆議院文部委員竹尾式、坂田道太両議員、文部省係官とともに
来所、事業内容、庁舎等視察

1954. 2.26 第24回国立国語研究所評議員会
議 事

1. 行政機構改革案に対する評議員会の声明書発表後の経過
について報告
2. 29年度予算事業計画について懇談があった。

3.10 第3回国立国語研究所講演会（後援 大阪毎日新聞社）

ところ 大阪毎日新聞社講堂

題 目

われわれの言語生活

国立国語研究所長 西尾 実

私の見た日本語の性質

京都大学教授 吉川幸次郎

表現の可能性

東京大学 講師 中島健蔵
国立国語研究所評議員

— 国立国語研究所刊行書 —

- 国立国語研究所報告 1 八 丈 島 の 言 語 調 査
- 国立国語研究所報告 2 言 語 生 活 の 実 態 (秀英出版刊
—白河市および附近の農村における— 300.00)
- 国立国語研究所報告 3 現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞
—用法と実例—
- 国立国語研究所報告 4 現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語
- 国立国語研究所報告 5 地 域 社 会 の 言 語 生 活 (秀英出版刊
—鶴岡における実態調査— 600.00)
- 国立国語研究所報告 6 少 年 と 新 聞
—小・中学生の新聞への接近と理解—
- 国立国語研究所報告 7 入 門 期 の 言 語 能 力
-
- 国立国語研究所資料集 1 国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17~24年)
- 国立国語研究所資料集 2 語 彙 調 査
—現代新聞用語の一例—
- 国立国語研究所資料集 3 送 り 仮 名 法 資 料 集
-
- 昭和 24 年度 国 立 国 語 研 究 所 年 報 1
- 昭和 25 年度 国 立 国 語 研 究 所 年 報 2
- 昭和 26 年度 国 立 国 語 研 究 所 年 報 3
- 昭和 27 年度 国 立 国 語 研 究 所 年 報 4
- 昭和 28 年度 国 立 国 語 研 究 所 年 報 5

昭和 29 年 11 月

865

国立国語研究所

東京都千代田区神田一ツ橋1-1

電話九段(33) { 4 2 9 5
 4 2 9 6

1953 ~ 1954

ANNUAL REPORT OF NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Researches from April 1953 to March 1954

Analysis of Spoken Common Japanese

Pilot Survey of the Vocabulary in Cultural Reviews

(the so-called *Sōgō Zasshi*)

Study in Problems which Arose from Application of the Table of
“ *TōYō Kanzi* ” and its Solution

Survey of Local Dialects from Honorifics I

Survey of Local Dialects from Honorifics II

Analysis of Honorifics Survey in Ueno City, Mie Pref.

Honorifics Survey in Okazaki City, Aiti Pref.

Study of Learning Difficulties of Written Language

Language Development of School Children

Making the Standard of Achievement in Language Teaching

Experimental Study on Efficiency in Reading

Style Analysis of Radio News

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
KANDA-HITOTUBASI, TIYODA, TOKYO

正 誤 表

ページ・行	誤	正
18・15	^{x x} (中村大一)	(中村)
23・2	^x $L(0, x; t_0, t_1)$	^o $L(0, x; t_0, t_1)$
23・25	リプリント ^x 手集計方式	リプリント ^o = 手集計方式
25	図 中央下 ^x ニ〔第1図〕ト入レル	
26	図 中央下 ^x ニ〔第2図〕ト入レル	
30・6	^x 銀行簿とカード ^x ニファイルとかがあつて	^o 銀行簿とかがカード ^o ニファイルとかがあり
31・第3表	^x ランダム性	^o ランダム性
31・脚注	^x 指示とかを抜き送んだ	^o 指示とかを抜き送んだ
33・補説	^{x x} 狂いの種類の評価	^{o o} 狂いの程度の評価
68・2	^x 書写した	^o 書写した
71・9	^{x x} ゴジデスバイ	^{o o} ゴジデスバイ
122・9	^{x x} 6, 151	^{o o} 6, 183
192・表5	^x お物て	^o おきて
235・5	^x 記念館画館	^o 記念絵画館
11	^x 経 資	^o 経 費
13	^x 人件資	^o 人件費
14	^x 事業資	^o 事業費
21	^x 波田野完治	^o 波多野完治
236・2	^x 計組織	^o ト ル
237・17	^x 庶務部	^o 庶務部
18	^x 庶務課	^o 庶務課
裏表紙・下	^x RESEACH	^o RESEARCH